宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第96集

竹 淵 C 遺 跡

Takebuchi - C Site

一ツ瀬川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

宮崎県埋蔵文化財センター

竹淵C遺跡近景（西から）

巻頭図版2

竹淵C遺跡全景　調査第3面（古墳時代～古代の竪穴住居跡）

竹淵C遺跡全景　調査第2面（中世の掘立柱建物跡）

SA17竈

土層断面写真

序

このたび宮崎県教育委員会では、一ツ瀬川河川改良工事に伴い、竹澗C遺跡の発掘調査を行いました。

竹澗C遺跡が存在する新富町大字新田は、県内第二の大古墳群で国指定史跡となっている新田原古墳群が著名であり、近辺には、大小様々な遺跡が存在していることが知られています。本遺跡は、一ツ瀬川沿いに立地していながら河川の氾濫による攪乱を受けておらず、遺構・遺物が良好な形で残っていました。そして、縄文時代早期から近世にかけて、長い間、先人の生活が営まれていたことが判明しました。その頃、当地域では自然環境や社会環境に適応しながら独自の文化が育まれたものと推察されますが、一方で、土器につけられた文様や石器の石材などから広域にわたる人・もの・情報の交流の跡をうかがい知ることができ、大変興味深いものがあります。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成１７年１月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長　宮園　淳一

例　　言

1　本書は、一ツ瀬川河川改良工事に伴い、宮崎県教育委員会が行った竹澗C遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、宮崎県土木部西都土木事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は、平成14年5月21日から平成14年10月18日まで行った。

4　本遺跡は「竹澗C遺跡」であるが、所在地については現在の行政区名である「竹渕」と呼称する。

5　現地での実測・写真撮影等の記録は主に杉田康之・古屋美樹が行い、空中写真撮影は（株）スカイサーベイに委託した。その他、発掘調査期間中に多くの埋蔵文化財センター職員が遺構実測に加わった。実測者は以下のとおりである。
南正覚雅士・久保春夫・福田泰典・田中光・甲斐貴充・柳田晴子・重留康弘・丹俊詞・黒木修

6　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース・写真撮影等は、杉田が整理作業員の協力を得て行った。

7　本書で使用した第1図「竹澗C遺跡と周辺の遺跡位置図」は、国土地理院発行の5万分の1図「妻」、第2図「竹澗C遺跡周辺地形図」は、国土地理院発行の5,000分の1図「国土基本図」を基に作成した。

8　土層断面及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に拠っているが、数字等記載のないものはその限りでない。

9　本書で使用した方位は、座標北（座標第Ⅱ系）及び磁北である。座標北を用いた場合には、G.N.、磁北はM.N.と表示している。レベルは海抜絶対高である。

10　本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
ＳＡ……竪穴住居跡　ＳＢ……掘立柱建物跡　ＳＣ……土坑　ＳＥ……溝状遺構
ＳＨ……ピット　ＳＩ……集石遺構　ＳＪ……カマド跡

11　本書の執筆は、第1章第1節を松林豊樹がおこない、その他の執筆及び編集を杉田が担当した。

12　出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　遺跡の位置と環境 …… 2
第Ⅱ章　調査の概要
　第１節　調査の経過 …… 6
　第２節　層序 …… 8
第Ⅲ章　調査の記録
　第１節　調査第１面（縄文時代）の調査 …… 9
　　１　調査の概要 …… 9
　　２　遺構と遺物 …… 9
　　(1) 集石遺構（ＳＩ） …… 9
　　(2) その他の遺物 …… 11
　第２節　調査第２面（古墳時代から古代）の調査 …… 15
　　１　調査の概要 …… 15
　　２　遺構と遺物 …… 16
　　(1) 竪穴住居跡（ＳＡ） …… 16
　　(2) その他の遺物 …… 42
　第３節　調査第３面（中世）の調査 …… 56
　　１　調査の概要 …… 56
　　２　遺構と遺物 …… 56
　　(1) 掘立柱建物跡（ＳＢ） …… 56
　　(2) 石組遺構 …… 63
　　(3) その他の遺物 …… 66
　第４節　調査第４面（近世）の調査 …… 73
　　１　調査の概要 …… 73
　　２　遺構と遺物 …… 73
　　(1) 溝状遺構（ＳＥ） …… 73
　　(2) 土坑（ＳＣ） …… 74
　　(3) 石積遺構 …… 75
　　(4) 石塔 …… 77
　　(5) その他の遺物 …… 83
　第５節　時期不明の遺構調査 …… 87
　　(1) 竪穴状遺構 …… 87
第Ⅳ章　まとめ
　第１節　縄文時代の遺構・遺物 …… 88
　　(1) 集石遺構 …… 88
　　(2) 遺物 …… 88
　第２節　古墳時代から古代の遺構・遺物 …… 89
　　(1) 竪穴住居跡 …… 89
　　(2) 竈 …… 91
　　(3) 土器埋設炉 …… 91
　　(4) 風字硯 …… 92
　第３節　中世の遺構 …… 93
　　(1) 掘立柱建物跡 …… 93
　　(2) 石組遺構 …… 93
　第４節　近世の遺構・遺物 …… 94

挿 図 目 次

第１図　竹澗Ｃ遺跡と周辺の遺跡位置図 …… 4
第２図　竹澗Ｃ遺跡周辺地形図 …… 5
第３図　グリッド配置図及び遺構検出状況図 …… 7
第４図　層序図 …… 8
第５図　調査第１面遺構分布図 …… 9
第６図　ＳＩ１及び出土遺物実測図 …… 9
第７図　ＳＩ２実測図 …… 10
第８図　縄文土器実測図 …… 11
第９図　縄文石器実測図 …… 13
第10図　調査第２面遺構分布図 …… 15
第11図　ＳＡ１・２及び出土遺物実測図 …… 16
第12図　ＳＡ３・４・５及び出土遺物実測図 …… 19
第13図　ＳＡ６・７・８及び出土遺物実測図 …… 20
第14図　ＳＡ７内土器埋設炉実測図 …… 20
第15図　ＳＡ９及び出土遺物実測図 …… 23
第16図　ＳＡ10及び出土遺物実測図 …… 24
第17図　ＳＡ11・12・13及び出土遺物実測図 …… 25
第18図　ＳＡ１４実測図 …… 26
第19図　ＳＡ15・16実測図 …… 26
第20図　ＳＡ14・15・16出土遺物実測図 …… 27
第21図　ＳＡ17及び出土遺物実測図 …… 29
第22図　ＳＡ17・18及び出土遺物実測図 …… 30
第23図　ＳＡ19・20及び出土遺物実測図 …… 32
第24図　ＳＡ21・22・23・24実測図 …… 34
第25図　ＳＡ21内遺構断面実測図 …… 34
第26図　ＳＡ22内土器埋設炉実測図 …… 34
第27図　ＳＡ23内土器埋設炉実測図 …… 34
第28図　ＳＡ24内土器埋設炉断面実測図 …… 34
第29図　遺構外土器埋設炉実測図 …… 34
第30図　ＳＡ21・22・23・24出土遺物実測図 …… 35
第31図　ＳＡ25及び出土遺物実測図① …… 36
第32図　ＳＡ25出土遺物実測図② …… 37
第33図　ＳＡ26実測図 …… 38
第34図　ＳＡ27実測図 …… 38
第35図　ＳＡ27出土遺物実測図① …… 39
第36図　ＳＡ27出土遺物実測図② …… 40
第37図　ＳＡ28・29及び出土遺物実測図① …… 41
第38図　ＳＡ28・29出土遺物実測図② …… 42
第39図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図① …… 43
第40図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図② …… 44
第41図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図③ …… 45
第42図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図④ …… 46
第43図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図⑤ …… 47
第44図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図⑥ …… 47
第45図　土錘実測図① …… 48
第46図　土錘実測図② …… 49
第47図　調査第３面遺構分布図 …… 56
第48図　ＳＢ１及び１号石組遺構実測図 …… 58
第49図　ＳＢ２実測図 …… 59
第50図　ＳＢ３実測図 …… 59
第51図　ＳＢ４実測図 …… 60
第52図　ＳＢ５実測図 …… 60
第53図　ＳＢ６実測図 …… 61
第54図　ＳＢ７・８実測図 …… 61
第55図　ＳＢ９・10・11実測図 …… 62
第56図　１号石組遺構実測図 …… 64
第57図　２号石組遺構実測図 …… 65
第58図　１号石組遺構出土遺物実測図 …… 66
第59図　２号石組遺構出土遺物実測図 …… 66
第60図　その他の遺物（中世土師器）実測図 …… 68
第61図　その他の遺物（中世須恵器）実測図 …… 69
第62図　その他の遺物（中世陶磁器）実測図 …… 69
第63図　その他の遺物（中世銅製品）実測図 …… 69
第64図　その他の遺物（中世銭貨）実測図 …… 69
第65図　調査第４面遺構分布図 …… 73
第66図　ＳＥ１出土遺物実測図 …… 73
第67図　ＳＥ１実測図 …… 73
第68図　ＳＣ１実測図 …… 74
第69図　ＳＣ１出土遺物実測図 …… 75
第70図　１号石積遺構実測図 …… 76
第71図　１号石積遺構断面実測図 …… 77
第72図　石塔・板碑各部名称及び法量表凡例 …… 79
第73図　石塔実測図① …… 80
第74図　石塔実測図② …… 81
第75図　石塔実測図③ …… 82
第76図　その他の遺物（近世陶磁器）実測図① …… 83
第77図　その他の遺物（近世陶磁器）実測図② …… 84
第78図　１号竪穴状遺構実測図 …… 87
第79図　竹澗Ｃ遺跡時期別（古墳時代～古代）遺構配置図 … 90

表 目 次

第１表　竹澗Ｃ遺跡出土縄文土器観察表 …… 14
第２表　竹澗Ｃ遺跡出土縄文石器計測表 …… 14
第３表　竹澗Ｃ遺跡竪穴住居跡計測表 …… 50
第４表　竹澗Ｃ遺跡出土土器（古墳時代～古代）観察表① … 51
第５表　竹澗Ｃ遺跡出土土器（古墳時代～古代）観察表② … 52
第６表　竹澗Ｃ遺跡出土土器（古墳時代～古代）観察表③ … 53
第７表　竹澗Ｃ遺跡出土土器（古墳時代～古代）観察表④ … 54
第８表　竹澗Ｃ遺跡出土陶磁器（古墳時代～古代）観察表 … 54
第９表　竹澗Ｃ遺跡出土鉄製品（古墳時代～古代）計測表 … 55
第10表　竹澗Ｃ遺跡出土石器（古墳時代～古代）計測表 …… 55
第11表　竹澗Ｃ遺跡出土土錘計測表 …… 55
第12表　掘立柱建物跡一覧表 …… 58
第13表　宮崎県内の石組遺構 …… 70
第14表　竹澗Ｃ遺跡出土土器（中世）観察表 …… 71
第15表　竹澗Ｃ遺跡出土陶磁器（中世）観察表 …… 72
第16表　竹澗Ｃ遺跡出土金属製品（中世）計測表 …… 72
第17表　竹澗Ｃ遺跡出土石器（中世）計測表 …… 72
第18表　竹澗Ｃ遺跡出土銭貨（中世）計測表 …… 72
第19表　竹澗Ｃ遺跡出土空風輪法量表 …… 85
第20表　竹澗Ｃ遺跡出土火輪法量表 …… 85
第21表　竹澗Ｃ遺跡出土水輪法量表 …… 85
第22表　竹澗Ｃ遺跡出土地輪法量表 …… 85
第23表　竹澗Ｃ遺跡出土土器（近世）観察表 …… 86
第24表　竹澗Ｃ遺跡出土陶磁器（近世）観察表 …… 86
第25表　竹澗Ｃ遺跡出土鉄製品（近世）計測表 …… 86
第26表　竹澗Ｃ遺跡出土石器（近世）計測表 …… 86
報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭図版１　竹澗Ｃ遺跡近景（西から）
巻頭図版２　竹澗Ｃ遺跡全景（調査第３面）
竹澗Ｃ遺跡全景（調査第２面）
巻頭図版３　ＳＡ17竈
土層断面写真

図 版 目 次

図版１　調査第１面調査グリッド、調査第１面散礫、ＳＩ１、
ＳＩ２、ＳＩ３、ＳＩ４ …… 95

図 版 目 次

図版２　調査区北部の竪穴住居跡群、調査区中央部の竪穴住居
跡群 …… 96
図版３　竪穴住居跡検出状況、ＳＡ４竈、ＳＡ６土器埋設炉、
ＳＡ７、ＳＡ９、ＳＡ９竈 …… 97
図版４　ＳＡ10、ＳＡ12土器埋設炉、ＳＡ13、ＳＡ16、ＳＡ17
（竈）・ＳＡ18、ＳＡ19（竈）、ＳＡ20 …… 98
図版５　ＳＡ17竈及び支脚、ＳＡ24土器埋設炉（左）及び後世
埋設の土器埋設炉（右） …… 99
図版６　ＳＡ19竈、ＳＡ20土器埋設炉、ＳＡ23土器埋設炉、
ＳＡ25遺物出土状況、ＳＡ25遺物出土状況(302)、
住居外検出の土器埋設炉 …… 100
図版７　ＳＢ１と１号石組遺構、ＳＢ２・３・４ …… 101
図版８　ＳＢ５、ＳＢ７・８・９・10・11 …… 102
図版９　１号石組遺構分解写真 …… 103
図版10　１号石組遺構検出状況、１号石組遺構埋土除去後、
１号石組遺構礫除去後、１号石組遺構完掘状況、
２号石組遺構埋土除去後、２号石組遺構完掘状況 … 104
図版11　ＳＥ１、ＳＥ１埋土堆積状況、ＳＣ１礫出土状況、
ＳＣ１埋土堆積状況 …… 105
図版12　石積遺構調査前、石積遺構浮石等除去後 …… 106
図版13　水輪(425)と地輪(432)、地輪下の半截状況、礫の並び
下の半截状況、石積遺構調査前、復元した石塔、１号
竪穴状遺構 …… 107
図版14　現地説明会、職場体験学習、作業風景 …… 108
図版15　縄文土器、縄文石器 …… 109
図版16　ＳＡ２・４～７・９～10・12・14・16出土遺物 …… 110
図版17　ＳＡ17・18・20～24出土遺物 …… 111
図版18　ＳＡ25・27出土遺物 …… 112
図版19　ＳＡ28・29出土遺物、その他の遺物、風字硯 …… 113
図版20　風字硯、陶磁器 …… 114
図版21　土錘 …… 115
図版22　石組遺構出土遺物、中世土師坏・皿 …… 116
図版23　中世土師皿、陶磁器、銭貨、ＳＥ１出土遺物 …… 117
図版24　五輪塔（空風輪・火輪） …… 118
図版25　五輪塔（水輪） …… 119
図版26　五輪塔・板碑 …… 120
図版27　近世陶磁器 …… 121
図版28　埋設土器内から出土した遺物の顕微鏡写真 …… 122

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

宮崎県西都土木事務所河川砂防課では、平成10年度から一ツ瀬川竹渕地区の河川改修事業を進めている。宮崎県教育庁文化課では、同事業の平成13年度以降の対象地内に周知の遺跡が存在することを確認したため、平成13年３月27日に西都土木事務所河川砂防課及び新富町教育委員会の三者で、その取扱いについて協議を行った。この結果、平成13年度に対象地内に現存する五輪塔の移転に伴う調査や遺跡の状況を把握するための確認調査を実施することとなった。

県文化課では、五輪塔群の移転を行うため、平成13年７月に現況空中写真撮影、同年９月から10月に写真測量を行った。その間、９月17日に確認調査を行い、五輪塔群が樹立していた部分の南東側にも縄文時代から中世にいたる遺構・遺物の存在を確認した。この後、工法変更等による遺跡保存の可能性について協議を行ったが、現況における保存は困難な状況であったことから、やむを得ず遺跡が影響を受ける事業対象地内の1,455㎡について次年度以降に本格的な発掘調査を行い、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査は、平成14年５月21日から10月18日にかけて、宮崎県埋蔵文化財センターによって実施した。また、平成15年度から平成16年度にかけて、遺物整理と報告書作成を埋蔵文化財センターで行った。

第２節　調査の組織

発掘調査（平成14年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	米良弘康
副所長兼総務課長	大薗和博
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課総務係長	野邊文博
調査第二課調査第三係長	菅付和樹
同係主査（調査担当）	杉田康之
同係埋蔵文化財調査員	古屋美樹

整理及び報告書作成（平成15年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	米良弘康
副所長兼総務課長	大薗和博
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川恵史
調査第二課調査第三係長	菅付和樹
同係主査（報告書担当）	杉田康之

整理及び報告書作成（平成16年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	宮園淳一
副所長兼総務課長	大薗和博
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川恵史
調査第二課調査第三係長	菅付和樹
同係主査（報告書担当）	杉田康之

調査協力　新富町教育委員会

第３節　遺跡の位置と環境（第１図・第２図）

竹澗Ｃ遺跡の所在する児湯郡新富町は、宮崎県のほぼ中央部の日向灘沿岸部にあり、宮崎平野の北部に位置する。北は標高1,405mの尾鈴の秀峰を筆頭に畑倉山、稗畑山など標高800mを越える山々を遙かに仰ぎ、南は急峻な山々が連なる九州山地に端を発した一ツ瀬川により西都市と相接する。町内には、沖積地とその平野部を望む茶臼原面（Ⅶ面：標高120m級）、三財原面（Ⅵ面：標高90m級）、新田原面（Ⅴ面：標高70m級）などの洪積台地が広がっており、台地上には県内有数の古墳群が立地している。本地域における表層は、宮崎層群で淡灰色をしたもろい砂岩や無層理の泥岩層からなる妻層を基盤に、台地を構成する洪積層や火山灰などの降下堆積物、及び低地の新しい沖積層から成り立っている。地勢は、九州山地から日向灘に向かって漸次低下してきており、東に傾く様相を呈している。

竹澗Ｃ遺跡は、児湯郡新富町大字新田字竹渕に所在する。本遺跡は日置川水系、鬼付女川水系、藤山水系により複雑な谷状地形を形成して断片化しつつある新田原台地南側の沖積平野にあり、東流する一ツ瀬川左岸、標高約11mの低位段丘に立地している。付近には一ツ瀬川の堆積作用によって形成された微高地や自然堤防などが見られる。

竹澗Ｃ遺跡の周辺には、町内はもとより近隣市町にわたって多くの遺跡が確認されている。以下、発掘調査結果や資料などをもとに各時代を概観する。

【縄文時代】

縄文時代の遺跡は、茶臼原面、三財原面、新田原面の各台地の縁辺部に多く確認されている。その中でも集石遺構が23基検出された瀬戸口遺跡は、新田原台地の西南端に位置し、押型文土器と貝殻条痕文土器が出土している。また、現在調査が進められている東九州自動車道の沿線では、集石遺構や竪穴住居跡などが確認されはじめている。

【古墳時代から古代】

古墳時代の遺跡は、台地上から丘陵斜面下端の小扇状地又は麓屑面まで広がってくる。特に古墳については国内でも有数の密集地に当たり、富田古墳群、鎧古墳、下屋敷古墳などが点在するが、中でも本遺跡のある竹澗地区は、国指定史跡である新田原古墳群（祇園原古墳群、山ノ坊古墳群、塚原古墳群など）内に所在する。総数207基を数えるこの古墳群では、前方後円墳が24基、方墳が１基、円墳が182基

確認されている。さらに、一ツ瀬川を挟んで北西5.5kmの丘陵台地上には、特別史跡である西都原古墳群が偉容を誇っている。また、古墳以外にも、北田地区遺跡、上薗遺跡、銀代ヶ迫遺跡、八幡上遺跡、藤掛遺跡などが調査されている。いずれも竪穴住居跡が検出されており、炉跡や埋甕（土器埋設炉）などを有する住居跡も確認されている。

律令制のもとでの当町域の所属は明らかでなく、那珂郡と境を接する児湯郡の内にあった。建久図田帳には島津庄寄郡として「児湯郡内湯宮十三丁　倍木（日置）三十丁　新田八十丁　下富田百三十丁　宮頭三十丁」の記載がある。平成11年に、日向国庁の正殿と推定される東西棟建物が確認された寺崎遺跡は、一ツ瀬川を挟んで北西5.1kmに所在する。その調査の中で、下村窯跡群で焼かれたと考えられる瓦や土器などが出土しているが、本遺跡は下村窯跡群と寺崎遺跡の中間地点にあたり、寺崎遺跡付近でも本遺跡から出土した風字硯とよく似たものが表採されている。また、隣接市である西都市には、銅製で平安時代の初期に児湯郡司の使用したものと考えられる「児湯郡印」（国指定重要文化財：西都市役所蔵）の伝世があり、本遺跡と程遠からぬ所に郡衙があった可能性を示唆している。さらに、日向国分寺（西都市三宅）の所在も本遺跡の北4.1kmに確認されている。本遺跡が古代日向国の国府に近く、日向国の交通網が全て国府を中心に整えられていることを考えれば、本遺跡付近が政治・経済・文化面において重要な役割を果たしていたことが考えられる。

【中世以降】

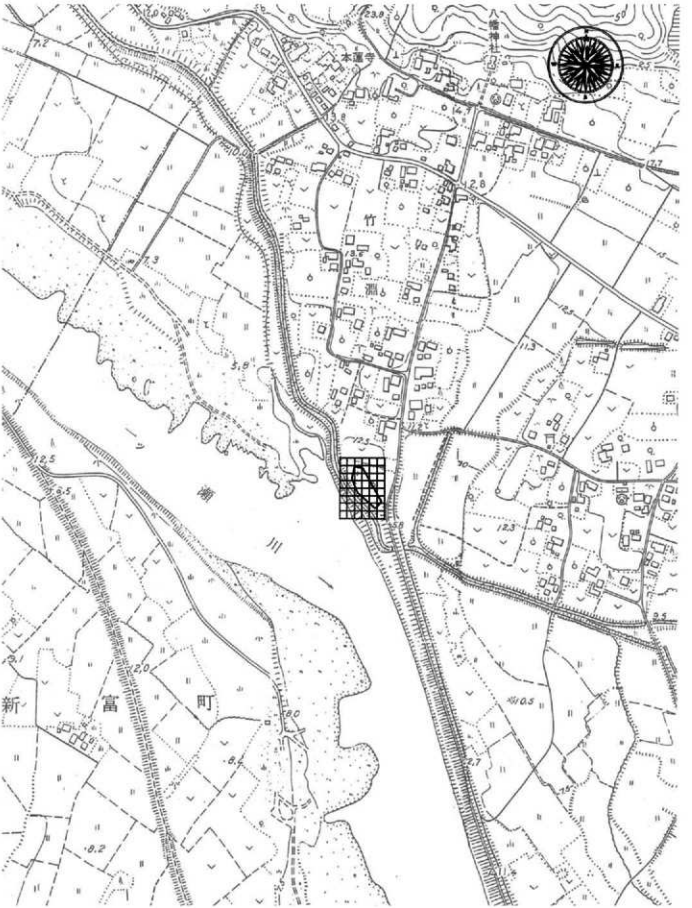
鎌倉時代には島津庄のうち寄郡一か所及び安楽寺領一か所、八条女院領国富庄三か所の計五か所の荘園があった。南北朝争乱以後、伊藤義祐の代に入るまでは、本蓮寺を中心とした日蓮宗と大光寺を中心とした禅宗が、同じ伊藤氏領内で在地武士階層を中心にしてその教勢を二部していたが、本蓮寺址境内付近で、銅鋳製経筒と陶製経筒が同時に発見されている。天正６年の耳川合戦直後からは島津氏の支配が本格化したが、天正15年に島津氏が豊臣秀吉に下ってからは島津氏と秋月氏という二つの領主によって、佐土原藩領（富田・新田）と高鍋藩領（日置・三納代）に二分されることになり近世社会を迎えた。新富町内には、いくつかの古城跡と伝えられているところがある。本遺跡の東には、竹ヶ山城、富田上ノ城、富田下ノ城があるが、今のところ詳細を伝える資料は少ない。

【参考文献】

コロナ社	(1979)	『宮崎県地学のガイド』宮崎県高等学校教育研究会　理科・地学部会編
新富町教育委員会	(1982)	『新富町の埋蔵文化財』遺跡詳細分布調査報告書
新富町	(1992)	『新富町史』　通史編
新富町教育委員会	(1992)	『七又木地区遺跡（八幡上遺跡　七又木遺跡　銀代ヶ迫遺跡）』新富町文化財調査報告書第13集
宮崎県史刊行会	(1993)	『宮崎県史』　資料編　考古１
宮崎県史刊行会	(1993)	『宮崎県史』　資料編　考古２
新富町教育委員会	(1998)	『平成９年度　町内遺跡発掘調査概要報告書』　新富町文化財調査報告書　第24集
宮崎県教育委員会	(1998)	『宮崎県史研究』12「日向国府・国衙跡推定地・妻北地区の調査」
山川出版社	(1999)	『宮崎県の歴史』　坂上康敏・長津宗重・福島金治・大賀郁夫・西川誠

①竹洞C遺跡	②瀬戸口遺跡	③富田古墳群	④祇園原古墳群	⑤山之坊古墳群	⑥塚原古墳群
⑦北田地区遺跡	⑧銀代ヶ迫遺跡	⑨八幡上遺跡	⑩寺崎遺跡	⑪下村窯跡群	⑫日向国分寺
⑬竹ヶ山城	⑭富田上ノ城	⑮富田下ノ城	⑯宮ノ東遺跡		

第1図 竹洞C遺跡と周辺の遺跡位置図（S=1/50,000）



第２図　竹渕Ｃ遺跡周辺地形図（S=1/5,000）

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査の経過

調査は、築堤建設予定地及びその川側で河川氾濫による遺構・遺物の消失が懸念される地域を対象にして行った。調査対象面積は1,455㎡である。本遺跡では表土付近から遺物が検出されることから、重機で浅く表土を剥ぐことから始めた。本調査区の用地買収前は蘭のハウス栽培やグリーングラス栽培を行っていたが、溜め池のあった南端部の一部を除いて調査区全域にわたる撹乱は見られなかった。

表土の除去後トレンチを数か所設定して土層の確認を行った。調査区北側の一段低くなった平地(175㎡)では、表土下に蛤良岩戸（第３オレンジ）火砕流層、旧段丘堆積物が層をなし、遺構・遺物等も見られないことから調査対象から外した。その結果、最終的に調査したのは、約1,280㎡である。また、調査対象地は北から南へ緩やかに傾斜した地形であること、土層の堆積状況が一様でないことなどとともに、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層が遺物包含層であることを確認した。

そこで調査は、まず第Ⅱ層を人力で剥ぎながら精査を行ったところ、土師器をはじめとする遺物が大量に出土し始め、調査区北部においては、東西に走る溝状遺構を１条検出した。その後の調査で、調査区全面からピットを約1,200基検出し、埋土からも大量の土師器や陶磁器等が出土した。この他にも掘立柱建物跡と考えられる並びを11棟、石組土坑を調査区北部と東部に各１基ずつ検出した。

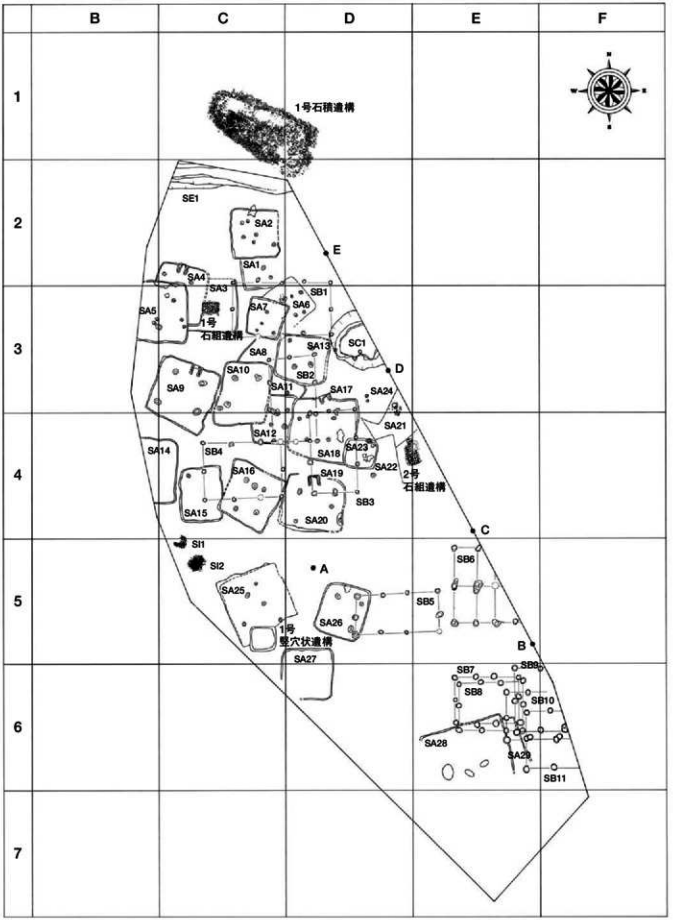
第Ⅲ層からは、古墳～古代の住居跡群を調査区北部を中心に不確定なものも含め29軒検出した。この中には、竈や土器埋設炉を付設するものがあった。中でも17号竪穴住居跡からは支脚が立ったまま検出され、上部は削平されながらも使用時の状況に近い竈を確認することができた。また、住居跡や包含層から大量の土器とともに石器や鉄器などが出土した。さらに、構築時期不明の竪穴状遺構１基を検出した。

第Ⅳ層の調査は、焼礫の集中する調査区中央部西側において調査区面積の約10%を部分発掘した。その結果、集石遺構４基を検出し、押型文系及び貝殻条痕文系の土器を中心とする遺物が出土した。

また、このほか石積遺構が調査区北端に遺存していた。石積遺構の調査は、事前に現況空中写真撮影と写真測量を行い石塔を移転させ、その後本調査で後世に積まれた礫や遺物を取り除く作業を行った。その結果、遺構構築時の石の並びが現れるとともに新たな五輪塔や板碑などが出土した。また、礫中から石積遺構の周囲から持ち込まれたと思われる土器、陶磁器、石器などが出土した。この中には風字硯も含まれている。石塔は現場での図面や写真記録の後、地権者の好意により隣接地に移設されている。なお、移設後の石塔の組み合わせは、使用石材や大きさによる推定復元である。

試掘調査の段階では、本調査区は縄文時代早期及び中世の遺跡である可能性が指摘されていた。しかし、本調査に入ってみると、大量の遺物とともに、古墳から古代にかけての竪穴住居跡群を含むたくさんの遺構が確認された。しかも、遺構の上部が削平されていること、遺構が複雑に切り合っていることなどから遺構検出に時間がかかり、調査期間の延長が必要となった。そこで、当初の平成14年９月20日終了予定を平成14年10月18日まで延長して調査を実施した。

現地では記録作成のため、国土座標（ＸＹ座標）に乗じた10m単位のグリッドを設定（第３図）し、南北方向に北から１～７、東西方向に西からＡ～Ｆの記号を付けた。

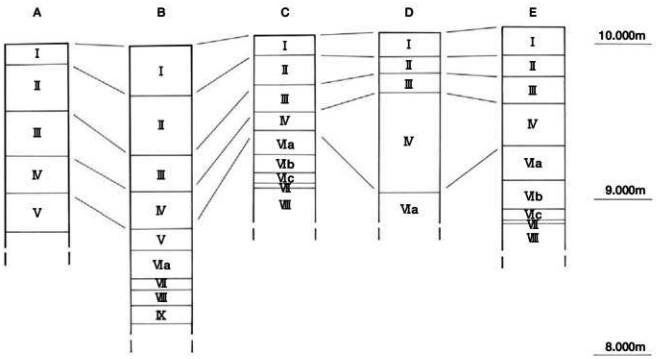


第３図　グリッド配置図及び遺構検出状況図（S=1/300）

第２節　層序

竹澗Ｃ遺跡の基本層序を第４図に示した。遺跡が一ツ瀬川の近くに位置しているにもかかわらず、河川の氾濫による浸食をほとんど受けずに堆積していた。北から南へ緩やかに傾斜した地形で、アカホヤ火山灰層はすでに消失しており、姶良入戸火砕流などのテフラの堆積状況は一様ではない。

第Ⅰ層の表土は、2mmから1cmほどの石を少量含む非常にかたいシルトで、現在まで畑地等として利用され、縄文時代から中・近世にわたる多量の遺物が出土した。第Ⅱ層から第Ⅳ層までは、黒褐色、黒褐色、暗褐色土で、主な遺物・遺構の包含層は、第Ⅱ層：近世～中世、第Ⅲ層：古墳時代～古代、第Ⅳ層：縄文時代早期である。第Ⅴ層は小林軽石を含む褐色土層で、南西部に厚く堆積し北東部では消失する。**第Ⅵ層は姶良入戸火砕流を含む層である。北西部では成層堆積している箇所を確認したが、北部は二次堆積と思われる。第Ⅶ層以下は、明赤褐色土、褐色土、にぶい黄橙色土と続く。**



第Ⅰ層	褐灰色土	**Hue 7.5YR 4/1 耕作土。非常にかたいシルト2mm～1cm程の石を少量含む。**
第Ⅱ層	黒褐色土	**Hue 7.5YR 3/1 上部に表土が混じる。かたいシルト**
第Ⅲ層	黒褐色土	**Hue 7.5YR 3/1 下部にⅣ層が混じる。かたいシルト。黒色のにじみが見られる。**
第Ⅳ層	暗褐色土	**Hue 7.5YR 3/1 粗粒でしまりがある。**
第Ⅴ層	褐色土	**Hue 10 YR 4/4 小林軽石を含む褐色土層。1mm程の橙色粒をまばらに含む。下部は粘性をもつ。**
第Ⅵa層	黄褐色土	Hue 10 YR 5/6 AT層。粗粒でやや粘性がある。1mmから3mm程の白色粒及びガラス粒を含む。
第Ⅵb層	にぶい黄橙色土	Hue 10 YR 6/4 AT層。粗粒で硬い。微小の白色及びガラス粒を含む。
第Ⅵc層	明黄褐色土	Hue 10 YR 6/8 AT層。粗粒でさらさらしており。微小な白色及び黒色粒を含む。
第Ⅶ層	明赤褐色土	Hue 5 YR 5/8 火山豆石を含む。また、微小なガラスの粒を多く含む。
第Ⅷ層	褐色土	Hue 10 YR 4/4 水分を多く含む粘土層。
第Ⅸ層	にぶい黄橙色土	Hue 10 YR 7/4 粘土層。

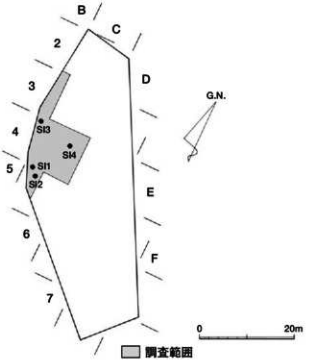
第４図　層序図

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　調査第１面（縄文時代）の調査

１　調査の概要

調査区内に鬼界アカホヤ火山灰層は確認できなかった。調査第１面は、縄文時代の包含層である第Ⅳ層が表土剥ぎ後に表出したり、地表から浅いところに遺存したりしていたＣ４グリッド付近を中心に調査した。縄文時代の遺構としては、集石遺構を４基検出した。各集石遺構は、赤変した四万十累層群の砂岩を主構成礫とするタイプで中に頁岩やホルンフェルス化した頁岩を含んでいた。



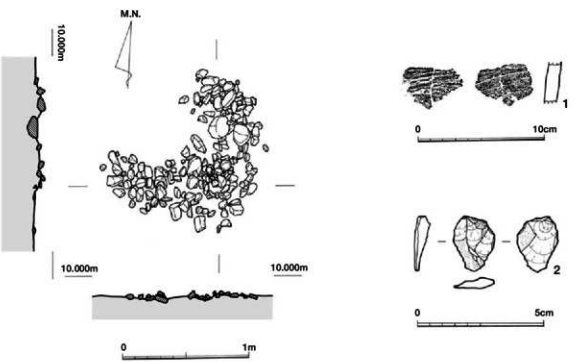
第５図　調査第１面遺構分布図（S=1/800）

２　遺構と遺物

（１）　集石遺構（ＳＩ）

ＳＩ１（第６図）

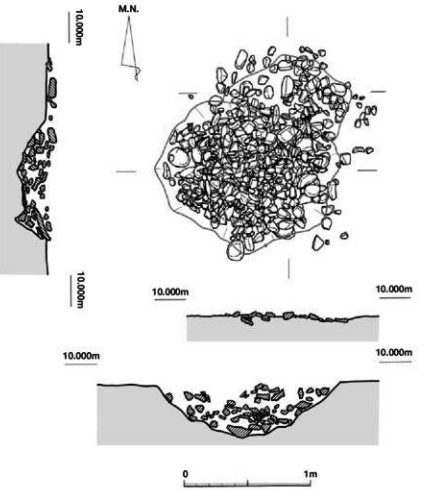
調査区中央部西端で検出。ＳＩ２の北西に隣接するが切り合い関係はない。長径125cm、短径115cmで、掘り込みはもたない。構成礫は、5～15cm程度の砂岩が主となる。礫総数は256個、総重量47.5kgで１個あたりの平均礫重量は0.186kgである。北西部には礫が存在しないが、欠損（消失）の痕跡は認められなかった。礫間から深鉢の胴部片と剥片石器が出土した。遺物（第６図）１は縄文土器である。風化が進んでいるものの外面に横方向の条痕文を施しているのが観察され、内外面に繊維痕が残る。２は剥片である。利用石材は桑ノ木津留産の黒曜石で、縦長剥片を素材にした使用痕剥片である。



第６図　ＳＩ１及び出土遺物実測図（遺構:S=1/30、遺物:S=2/3、1/2）

ＳＩ２（第７図）

調査区中央部西端で検出した。長径139cm、短径115cm、最深部は検出面から約40cmの不整楕円形プランを呈する。北東部には浅い掘り込みをもつが、ＳＩ２に付随するものかどうかは判明しなかった。構成礫は５～15cm程度の砂岩が主で赤化した泥岩や頁岩も含まれ礫の密集度が高い。礫形状は円礫や角礫(破砕礫)など様々であり、特に底部付近に大き目の円礫が集中する傾向がある。礫総数は1,130個、総重量は271.0kgで１個あたりの平均礫重量は0.240kgである。被熱したと考えられる礫が多いが、炭化物等は検出しなかった。また、遺物は出土しなかった。



第７図　ＳＩ２（S=1/30）実測図

ＳＩ３（第５図）

調査区北西端部で検出。古墳時代の竪穴住居跡であるＳＡ２近くで検出された。写真撮影による記録を行い図面は作成していない。規模は、長径123cm、短径121cmの不整円形プランを呈しており、掘り込みはもたない。構成礫は、5～15cm程度の砂岩が主となる。礫総数は353個、総重量65.2kgで１個あたりの平均礫重量は0.185kgである。遺物は出土しなかった。

ＳＩ４（第５図）

調査区中央部で検出。南側は試掘トレンチで消失しているが、直径約45cm程度の規模を有するものと考えられる。写真撮影による記録を行い図面は作成していない。残存部は拳大の砂岩で構成されていて主に角礫を用いているが、赤変はそれほど顕著ではない。礫総数は23個、総重量は5.3kgで１個あたりの平均礫重量は0.230kgである。明確な掘り込みは確認できなかったが、断面の形状では若干窪んでいる。遺物は出土しなかった。

（2）その他の遺物

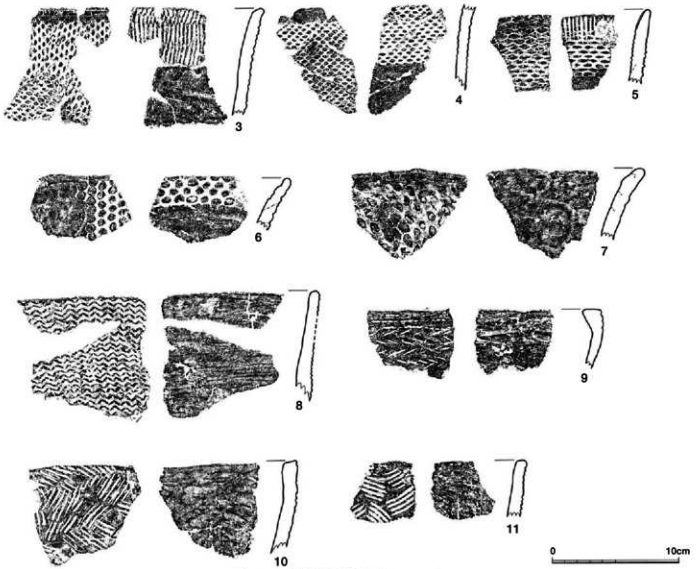
① 縄文土器（第8図）

本遺跡から出土した縄文土器は縄文時代早期に相当する土器である。そのうち9点を図化したが、縄文時代の遺構や包含層から出土したものと、他の時期の遺構に混入したものとがある。遺構出土の土器は遺構情報の一部として遺構記述の中に掲載した。土器は押型文土器と貝殻文円筒形土器に大別される。包含層出土のものについては層位的な検討が十分に行えなかったが、以下順を追って説明する。

第Ⅰ類 押型文を施す土器

A：楕円押型文（3～7）

3は口縁部が直口し口縁端部は先細りとなる。外面には口縁端部付近に無文部分を残し、その下に縦位の楕円文を施す。その後連続して横位の楕円文を施す。楕円文の一単位は長径6mm、短径3mmの小型のものである。内面には口縁部のみ縦位の平行押型文を4段に分けて施す。4はやや外反する口縁部をもつと思われる。口縁端部の無文帯の下部に、浅めで横位の楕円文を施す。内面には口縁部に横位の楕円文を施す。5は口縁部が直口し口縁端部は先細りとなる。外面には口縁部に浅めで



第8図 縄文土器実測図（S=1/3）

横位の楕円文を施している。内面は口縁下部に横位の楕円文を施した後、口縁上部に1段の平行押型文を施す。6は口縁部がやや外反し、口縁端部は丸みをもたせて仕上げている。外面口縁には長径7mm、短径6mmの大きめの楕円文を施すが、途中に無文帯を設けている。内面には口縁部に横位の楕円文を施す。楕円文の大きさは外面に施されたものとほぼ同じであるが、内面の方が若干間隔が広い。7は口縁部が外反し、器壁は厚めである。内面は指頭圧痕の後ナデ調整で、外面には長径10mm、短径7mmの大きめの楕円文を斜位に施した後、ナデ消している。楕円文の間隔は広い。

B：山形押型文（8）

8は口縁部が直口し口縁端部は丸みをもたせて仕上げている。外面は全面に横位の山形文を施す。内面は無文でナデ調整であるが、口縁部付近は丁寧なナデ調整である。

第Ⅱ類　貝殻条痕文を施す土器（9～11）

9は平坦な口唇部が肥厚し内湾する。外面には口縁上部に連点状の貝殻腹縁圧痕文、口縁下部に横位の「ハ」字形の短沈線文を施す。10は平坦な口唇部が内傾し口縁部もわずかに内湾する。外面にやや短めの粗い羽状文を施す。11は口縁部が直口する。外面に乱れた羽状文を施す。

②　石器（第9図）

出土地点は調査第1面に限らないが、概ね縄文時代の所産と考えられる石器が10点出土しており、実測図と観察表で記載した。器種ごとの内訳は打製石鏃5点、剥片2点、石斧3点である。

打製石鏃（12～16）

第Ⅰ類　平面形態が二等辺三角形（12,13）

いずれも基部形態は凹基で、尖った先端と内湾した側縁部をもつ。12は利用石材が頁岩ホルンフェルスで「U」字状の抉りが深い。13は利用石材が腰岳産の黒曜石で、開き気味の「U」字状の抉りが浅い。

第Ⅱ類　平面形態が正三角形（14～16）

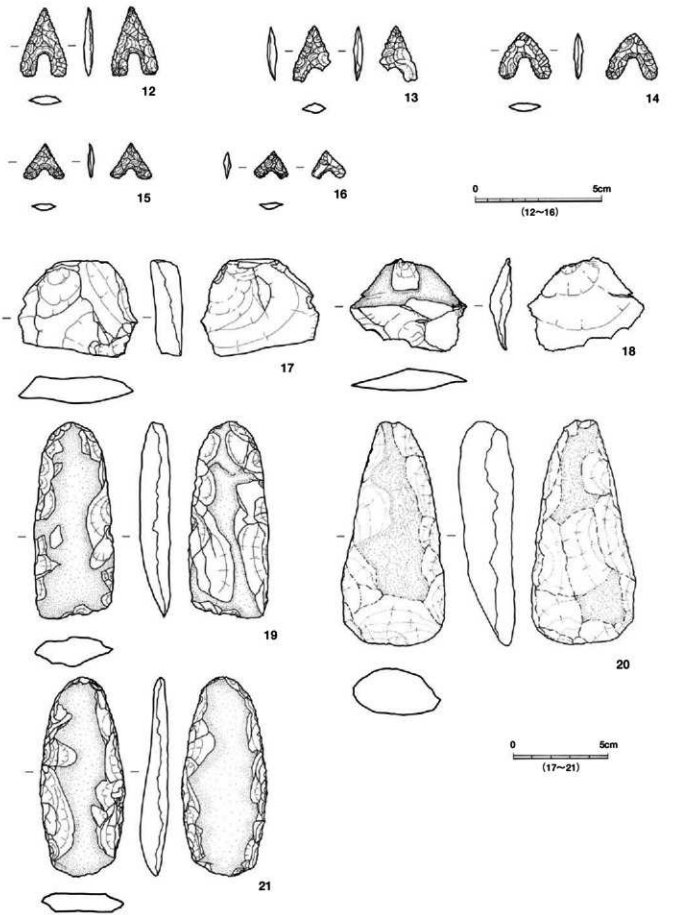
いずれも基部形態は凹基である。14は利用石材がチャートで側縁部が内湾し、開き気味の「U」字状の抉りが深い。15,16は尖った先端と直線的な側縁部をもつ小型の石鏃である。開き気味の「U」字状の抉りが浅い。利用石材はそれぞれチャート（15）、腰岳産黒曜石（16）である。

剥片（17,18）

いずれも幅広の剥片である。利用石材は砂岩（17）と頁岩ホルンフェルス（18）である。18は自然面をもち周辺部に使用の痕跡がみられる。また、このほかにも小片で図化していないが黒曜石の剥片（桑ノ木津留産、腰岳産）が出土している。

打製石斧(19～21)

利用石材はいずれも頁岩ホルンフェルスである。19,20は刃部付近が最大幅になり、頭部に向かってやや細くなるもので撥形石斧の一種に含まれるものであろうか。自然面を残した剥片を素材にして加工を施す。21も自然面を残すが、刃部が加工されてないことから未製品の可能性がある。



第8図　縄文石器実測図（S=2/3、1/2）

第１表　竹淵Ｃ遺跡出土縄文土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土場所	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	焼成	胎土の特徴	備考	
1	深鉢	胴部	SI1	—	—	—	条痕文	ナデ	にぶい赤褐 (2.5YR5/3)	にぶい赤褐 (2.5YR5/3)	良好	1mm以下の褐灰粒 1mm以下の光沢粒	貝殻条痕文	繊維痕
3	深鉢	口縁部	C4G Ⅳ層	—	—	—	楕円押型文	平行押型文（原体条痕）ナデ	にぶい赤褐 (2.5YR5/3)	にぶい赤褐 (2.5YR5/3)	良好	1mm以下の褐灰粒 1mm以下の光沢粒	楕円押型文	繊維痕
4	深鉢	頸部～胴部	I層	—	—	—	楕円押型文 ナデ	楕円押型文 ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	2mm以下の淡黄粒 1mm以下の透明光沢粒	楕円押型文	内面に顔料？胎土に黒曜石を含む
5	深鉢	口縁部	SA15	—	—	—	楕円押型文	楕円押型文 平行押型文（原体状痕）ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	2mm以下の淡黄粒 2mm以下の角柱の光沢粒	楕円押型文	繊維痕
6	深鉢	口縁部	C4G Ⅳ層	—	—	—	楕円押型文 ナデ	楕円押型文 ナデ	灰褐 (7.5YR6/2)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	3mm以下の灰白粒 1mm以下の角柱の黒色光沢粒	楕円押型文	
7	深鉢	口縁部	C4G Ⅳ層	—	—	—	楕円押型文 ナデ	指頭痕 ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好	1mm以下の淡黄橙粒 1mm以下の透明光沢粒	楕円押型文	
8	深鉢	口縁部	Bトレンチ	—	—	—	山形押型文	ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	良好	2mm以下の淡黄、灰白粒 微細な透明光沢粒	山形押型文	内面口縁部付近に丁寧なナデ
9	深鉢	口縁部	SA9	—	—	—	貝殻腹縁圧痕 短沈線文	ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/3)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	良好	1mm以下の淡黄橙粒 1mm以下の金色光沢粒	辻タイプ	
10	深鉢	口縁部	C4G Ⅳ層	—	—	—	貝殻条痕文（羽状文）	ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	3mm以下の灰白粒 2mm以下の金色光沢粒	桑ノ丸	
11	深鉢	口縁部	C4G Ⅳ層	—	—	—	貝殻条痕文（羽状文）	ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	にぶい赤褐 (2.5YR4/3)	良好	3～5mm以下のにぶい黄橙粒 3mm以下のにぶい褐と黄橙粒	桑ノ丸	

第２表　竹淵Ｃ遺跡出土縄文石器計測表

遺物番号	器種	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
2	剥片	SI 1	2.2	1.7	0.6	1.3	黒曜石（桑ノ木津留）	
12	石鏃	SA10	2.7	1.8	0.4	1.3	頁岩ホルンフェルス	
13	石鏃	E2G	2.2	1.5	0.4	0.7	黒曜石（腰岳）	
14	石鏃	Ⅰ層	1.8	2.0	0.4	0.9	チャート	
15	石鏃	SA16	1.5	1.7	0.3	0.4	チャート	
16	石鏃	SA25	1.4	1.1	0.3	0.2	黒曜石（腰岳）	
17	剥片	SA29	5.1	6.3	1.4	63.2	砂岩	
18	剥片	C4G Ⅳ層	5.0	6.2	1.1	24.3	頁岩ホルンフェルス	
19	打製石斧	石積	10.3	4.3	1.6	91.3	頁岩ホルンフェルス	
20	打製石斧	Ⅲ層	11.9	5.5	2.9	203.4	頁岩ホルンフェルス	
21	打製石斧	Ⅲ層	10.6	4.5	1.5	81.1	頁岩ホルンフェルス	

第２節　調査第２面（古墳時代から古代）の調査

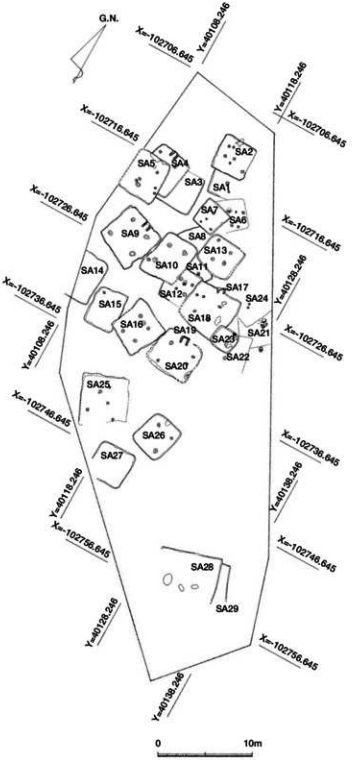
１　調査の概要（第10図）

調査第２面（基本土層の第Ⅲ層）の調査面積は1,280㎡で地形は平坦である。包含層を精査していくと、上部が削平された竪穴住居跡を29軒検出した。遺物は土師器が最も多く、須恵器や石器、鉄器もあわせて出土した。この第Ⅲ層は、古墳時代と古代を分ける明確な層序を確認できず、古墳時代から古代にかけて構築された竪穴住居跡が幾重にも切り合って検出されたことから本節にまとめて記述した。なお、須恵器の型式を比定するにあたっては、陶邑窯跡群の田辺昭三氏、隼上がり窯跡資料を用いた増田一裕氏の編年案を用いた。

住居跡はほぼ調査区全域で確認され、特に北部から中央部にかけて集中していた。本遺跡の住居跡の規模は一辺が3.8m～4.8mのものが主流を占めており、主軸を北とする方形や隅丸方形を呈するものが多い。住居跡からは、土器をはじめとするたくさんの遺物が出土したが、床面直上で取り上げたものを住居の遺物として取り扱い、埋土中から出土した遺物については、他の節で述べる。

本遺跡の住居跡には、竈や土器埋設炉を付設したものがあり特に４基の竈は、いずれも北壁中央に付設した造り付けのもので、袖は粘質土で固めてあった。火床面は良く焼けており、ＳＡ17では２本の支脚が立ったまま遺存していた。

ほとんどの住居跡では床面から複数のピットを検出したが、後世に掘り込まれたものについては図面から削除した。なお、本文の記述を簡便にするために住居跡の詳細なデータは「第３表　竹澗Ｃ遺跡竪穴住居跡計測表」にまとめた。表中の「規模」は床面の中軸線上で測定し、床面積は遺存部が総面積の８割を超えると推定されるものについて、遺存部の図面(S=1/20)からプラニメーターで測定した。



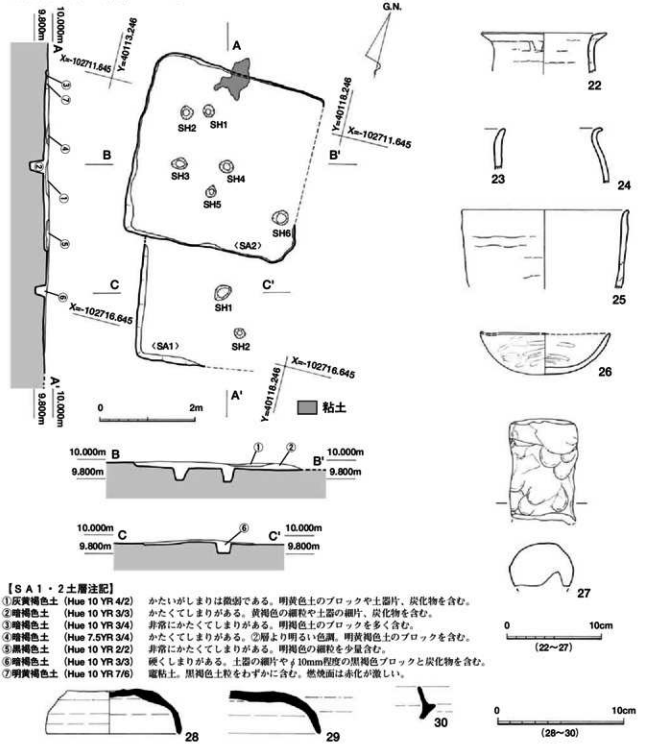
第10図　調査第２面遺構分布図(S=1/400)

2　遺構と遺物

（1）　竪穴住居跡（ＳＡ）

ＳＡ１（第11図）

ＳＡ２の南隅に位置し、Ⅲ層中で検出した。ほとんど上部が削平されており、南西隅のみ壁の立ち上がりを検出した。ＳＡ２との切り合い関係は確認できなかった。床面は平坦で遺物は出土しなかったが、ＳＨ１～２を検出し、いずれも６～７世紀代のものと思われる土師器甕片が数点出土した。遺構構築時期も同時期の可能性がある。



【ＳＡ１・２土層注記】

①灰黄褐色土	(Hue 10 YR 4/2)	かたいがしまりは微弱である。明黄色土のブロックや土器片、炭化物を含む。
②暗褐色土	(Hue 10 YR 3/3)	かたくてしまりがある。黄褐色の細粒や土器の細片、炭化物を含む。
③暗褐色土	(Hue 10 YR 3/4)	非常にかたくてしまりがある。明褐色土のブロックを多く含む。
④暗褐色土	(Hue 7.5YR 3/4)	かたくてしまりがある。②層より明るい色調。明黄褐色土のブロックを含む。
⑤黒褐色土	(Hue 10 YR 2/2)	非常にかたくてしまりがある。明褐色の細粒を少量含む。
⑥暗褐色土	(Hue 10 YR 3/3)	硬くしまりがある。土器の細片や φ10mm程度の黒褐色ブロックと炭化物を含む。
⑦明黄褐色土	(Hue 10 YR 7/6)	竈粘土。黒褐色土粒をわずかに含む。燃焼面は赤化が激しい。

第11図　SA1・2及び出土遺物実測図（遺構：S=1/80、遺物：S=1/4、1/3）

ＳＡ２（第11図）

検出時平面プランが不明確だったが、壁際にトレンチを入れ壁面の立ち上がりを検出しながら遺構の全体像を確認した。東壁は削平されており明確でないが、遺存部により隅丸方形を呈すると考えられる。遺存した隅角は鈍角で西壁はふくれ気味である。柱穴は配列上規則的でないが、ＳＨ１～６を検出した。掘り形は楕円形及び円形で径は0.20m～0.34mを測る。住居跡の埋土には、主に硬くてしまりのある黄褐色細粒を含む暗褐色土が堆積していた。床面はほぼ平坦である。北壁中央部付近に竈粘土に似た明黄褐色粘土が検出され、その中から支脚が出土したが、かなり撹乱が進んでおり竈を検出するには至らなかった。遺物は西部を中心に出土した。遺構構築は遺構配置及び遺物から推して７世紀前葉か。**遺物（第11図）**22～25は土師器の甕である。22は直線的な胴部を呈す小型の土器で、口縁部はゆるやかに外反する。内外面とも粘土紐継ぎ目が残るが、指でナデ消している。23は筒状の器形を呈するものと思われ、口縁部はわずかに外反する。外面は全面黒変している。24は胴部に膨らみをもつものと思われ、頸部はなだらかにくびれて口縁部が外反し、口唇部は外方向にわずかにつまみ出している。25は口縁部が開くバケツ形を呈するものと思われる。口縁部はわずかに外反する。26は土師器塊である。ミガキ調整で、外面口縁部及び欠損部付近は黒変している。27は土師質の竈支脚である。円筒形で特に上端面は丁寧にナデられている。黒変している部分は、支脚上部で火所を向いていたと考えられる。28、29は須恵器の坏蓋である。いずれも天井部が回転ヘラケズリであるが、28はヘラ切り後未調整である。30は坏身である。また、他に丹塗りの塊や円盤状高台が出土している。

ＳＡ３（第12図）

住居の西側をＳＡ４・５に切られており、北壁はトレンチにより削平されている。全貌は明確でないが、遺存部により隅丸方形を呈すると考えられる。遺存した隅角は鈍角で東壁はふくれ気味である。埋土は１層で、明褐色土の細粒を含む黒褐色土である。住居の中央に１号石組遺構を検出したが、ＳＡ３の出土遺物とかなり時期差があることから後世に構築されたものであり、本住居との関連はないと考える。柱穴は検出できなかった。床面は平坦で、ほぼ全域から遺物が出土した。遺構構築は遺構配置および遺物から推して６世紀中葉か。**遺物（第12図）**31は、須恵器の坏蓋である。

ＳＡ４（第12図）

埋土の観察状況から、東部はＳＡ３を切り、南西部はＳＡ５に切られていることが確認できた。また、北東隅はトレンチにより削平されている。切り合い関係から全貌は明確でないが、遺存部により隅丸方形を呈すると考えられる。遺存した隅角は鈍角で北壁はふくれ気味である。埋土は褐色土と黒色土の細粒を含む黒褐色土である。床面はほぼ平坦で、柱穴はＳＨ１～２を検出した。掘り形は円形で径は0.28m～0.32mを測る。遺物は、竈付近を中心に出土した。遺構構築は遺構配置および遺物から推して７世紀前葉か。**竈（第12図）**北壁中央部やや西寄りの造り付け竈。屋外に煙道をもたない。上部はかなり削平されており、平面プランのみ確認できた。燃焼部は住居内に位置し、焚口部は広い。袖長70cmの規模で、「ハ」の字形に開く。竈袖の粘質土や規模・形状ともＳＡ９の竈とよく似る。**遺物（第12図）**32～34は土師器の塊である。いずれもミガキと思われる調整が内外面とも施される。32は内外面とも丹塗りされている。35は土師器の高坏脚部である。開き気味の「ハ」の字形を呈し工具ナデ調整

である。36は須恵器の坏蓋である。

ＳＡ５（第12図）

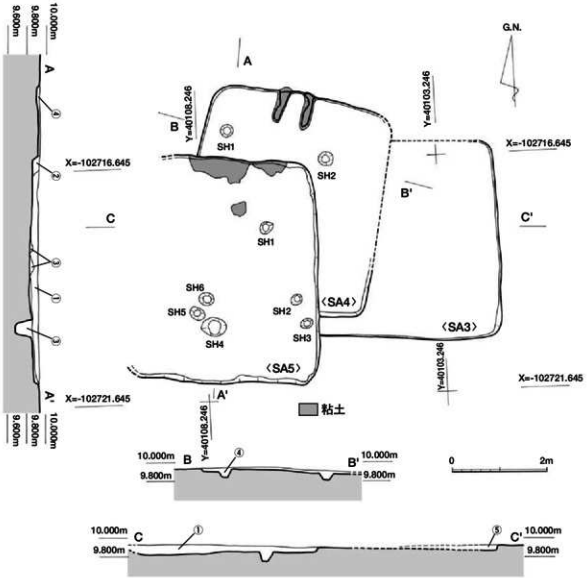
北東部で、ＳＡ３・ＳＡ４を切っている。西壁は用水路建設工事により削平されており全貌は明確でないが、遺存部により隅丸方形を呈すると考えられる。隅角は鈍角で壁面はふくれ気味である。埋土はしまりのある暗褐色土が主体で、黄褐色土の細粒と明褐色土のブロック（φ10mm）を含む。床面からＳＨ１～６を検出した。楕円形で径は0.18m～0.56mを測る。ＳＡ５内のＳＨ１は、ＳＡ４の柱穴である可能性があったが、掘込みの深さや埋土から判断するとＳＡ５の柱穴であると考えられる。北壁付近に竈粘土に似た明黄褐色粘土を検出したが、竈は遺存しなかった。しかし、竈が付設されたＳＡ４と規模・主軸等が似ていることから同じような造り付け竈が存在していた可能性がある。床面は平坦であるが、中央部がわずかに窪む。遺物は北部と南部を中心に出土した。遺構構築は遺構配置および遺物から７世紀前葉か。**遺物（第12図）** 37は土師器の坏である。非常に丁寧なつくりで、内外面ともミガキ調整がみられる。体部と口縁部の間に稜をもちわずかに外反する。38、39は須恵器の坏蓋である。

ＳＡ６（第13図）

上部は削平されており床面のみ検出した。南西部はＳＡ７に切られている。また、南部は削平されて明確でない。床面は黒褐色土で平坦に硬化しており住居中央部やや西よりに土器埋設炉を検出した。床面には他にＳＨ１～４を検出した。床面で出土した遺物は少数で小片のため図化していないが、埋設された土器と大きな時期差が認められないことから、住居はこれらの土器とほぼ同時期に構築されたと考えられる。６世紀後葉の構築か。**土器埋設炉（第14図）** 北西部は、後世に掘り込まれたピットで削平されていた。埋設されていた土師器は甕で、胴部から底部にかけて遺存していたが、頸部の一部は埋設土器内や埋設炉付近から出土した。土器は床面に対してほぼ垂直に設置されている。掘込み面は黒褐色土で床面は暗褐色土層に達する。検出面における掘込みの平面プランは、長軸Ｎ－32°－Ｅの不整楕円形で長径57cm、短径44cm、深さ19cmを測る。焼土は土器を埋設した掘込みの底から住居床面まで確認され、甕全体を取りまき、上部に向かう程厚くなる。埋設されていた土器の埋土からは、直径2.2mm程の石灰化した筒状遺物が出土したが、小動物の骨ではないかと考えられる。**遺物（第13図）** 40は埋設されていた土師器の甕である。胴部に膨らみをもち、口頸部が緩やかにくびれ外反するものと思われる。外面には黒変がみられる。41は須恵器の坏身である。焼成不完全（生焼け）で風化が激しく黒斑が確認できる。

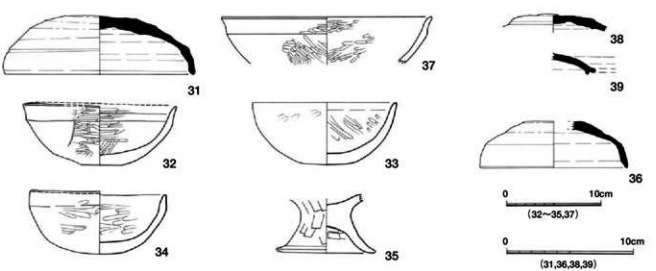
ＳＡ７（第13図）

住居の北東部でＳＡ６、南部でＳＡ８を切っている。住居跡の平面形は方形のものに属するが、南壁に比べて北壁が若干長いため台形状を呈する。本遺跡では比較的小型の竪穴住居跡である。柱穴は、配列上規則的なものはなく、ピットを４基検出した。楕円形で径は20～30cmを測る。床面はほぼ平坦で、特に硬化した範囲はみられない。遺物は、北部周辺を中心に21点（図化２点）の遺物が出土した。遺構構築は６世紀後葉か。**遺物（第13図）** 42は土師器甕の口縁部と思われる。調整は内外とも横方向のナデであるが、内面に粘土のつなぎ目が明瞭に残る。43は土師器の壺の底部と思われる。丸底で器厚は底に近づくにつれて薄くなる。



【ＳＡ３・４・５土層注記】

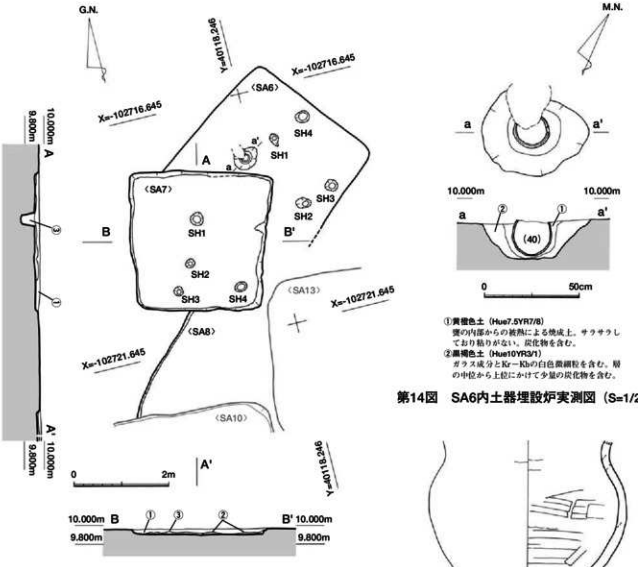
①暗褐色土	(Hue 10 YR 3/3)	かたくてしまりがある。黄褐色土の細粒を含む。明褐色土のブロック（φ10mm）を一部含む。
②淡黄橙色土	(Hue 10 YR 8/4)	わずかに暗褐色土(Hue10YR3/3)粒を含む。
③暗褐色土	(Hue 10 YR 3/4)	①層に似ているがより明るい色調である。かたくてしまりがある。黄褐色土及び明褐色土の細粒を含む。
④黒褐色土	(Hue 7.5YR 3/2)	非常にかたくてしまりがある。褐色土のブロック（φ20～40mm）や黒色土のブロック（φ10mm）、黄褐色土の細粒を含む。
⑤黒褐色土	(Hue 10 YR 2/3)	①層ほどかたくなくしまりも普通である。明褐色土のブロック（φ10mm）を一部含む。



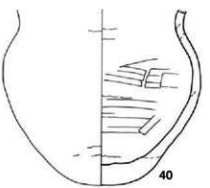
第12図　SA3・4・5及び出土遺物実測図（遺構：S=1/80、遺物：S=1/4、1/3）

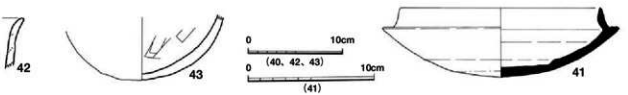
ＳＡ８（第13図）

住居の北部をＳＡ７に、南部をＳＡ10に切られている。上部はかなり削平されており形態・性格は明確でないが、北西壁の立ち上がりが確認できたことからここでは住居跡として取り扱う。遺物は、少数ながら古墳時代の特徴をもつ甕が出土した。出土遺物の特徴や埋土の切り合い関係からＳＡ７やＳＡ10より古い時期に構築されたと考えられる。



第14図　SA6内土器埋設炉実測図（S=1/20）





第13図　SA6・7・8及び出土遺物実測図（遺構：1/80、遺物：1/4、1/3）

ＳＡ９（第15図）

住居の平面形は方形を呈する。本遺跡では規模の大きい部類に属する。隅角は鋭く壁面はややふくれ気味となる。柱穴はＳＨ１～４を検出し４本柱と考えられる。いずれも楕円形で径は0.36m～0.61mを測る。ＳＨ２は、北部を後世に掘り込まれたピットで切られている。床面は平坦だが硬化するには至らない。遺物は竈を中心に床面全体から出土した。構築時期は遺物から７世紀前葉か。**竈（第15図）**北壁中央部の造り付け竈。袖長80cm弱の規模で、袖下の黒褐色土は幾分盛り上がり竈粘土がその上部にのる。袖は平行に構築され開かない。煙道をもたず、燃焼部は焼土や炭化物の分布状況及び窪みの様子から長軸30cm、短軸20cmの不整楕円形か。床は平坦だが、東部中央部がわずかに窪む。遺物は、竈内部から高台付き塊、坏が出土した。**遺物（第15図）**44は土師器の坏蓋である。口縁部と体部の境で稜をもつが風化のため調整は不明である。45は高坏の坏部である。風化のため単位は不明だがミガキ調整が施されている。46は土師器の高坏脚部で、外面にミガキ調整が施されている。47、48は、それぞれ須恵器の坏蓋・身でヘラ記号を有する。49は甕で胴部に横方向の沈線が２条みられ、その間に櫛歯状の工具による斜めの連続刺突文がみられる。50、51は鉄製品である。50は内湾側が細くなっていることから鎌の可能性がある。51は、鉄製方頭鏃で茎部の断面は方形である。鏃身部に木の繊維痕がみられる。

ＳＡ10（第16図）

隅丸方形を呈するが、西壁がＳＡ９を避けるように窪む。隅角は鈍角である。柱穴は４本柱の様相を呈するが、配列上配置されるはずの南東部は検出できなかった。また、ＳＨ３と西壁に挟まれてＳＨ４を検出した。ＳＨ３の補助的な柱穴である可能性がある。いずれも楕円形で径は0.20m～0.52mを測る。床面はほぼ平坦で北から南に僅かに傾くが、高低差は7cm程度である。遺物は、中央部を中心にほぼ全域で出土した。遺構構築は遺構配置と遺物から７世紀前葉か。**遺物（第16図）**52は土師器の小型甕口縁か。53は本遺跡で唯一出土した土師器の柄杓状土器である。工具ナデの調整であるが、外面底部には木の葉痕、内面底部に指頭痕がナデ消されずに残る。54は磨石である。利用石材は砂岩で表裏両面に磨痕が観察されるが、表面の磨面は２面ある。55は鉄製品である。断面は方形で先細りとなることから鉄鏃の茎である可能性が高い。

ＳＡ11（第17図）

住居跡は、ＳＡ10、ＳＡ12、ＳＡ13、ＳＡ18に切られるかたちで、東隅の立ち上がりのみを確認した。形態・性格ともに明確でないが、本遺跡で検出された方形の竪穴住居跡と似た立ち上がりの様相を呈することから、ここでは住居跡として取り扱う。遺物は、少片ながら古墳時代の特徴をもつ甕が少数出土したが、時期を特定することは難しい。ただ、埋土の切り合い関係からＳＡ12やＳＡ13より古い時期に構築されたと考えられる。構築時期は古墳時代中期から後期前葉か。

ＳＡ12（第17図）

南東隅部はトレンチにより削平されている。また、切り合っているため全貌は明確でないが、遺存部により方形を呈すると考えられる。遺存した隅角は鈍角で壁面は直線的である。土器埋設炉を住居跡中央部やや北寄りに検出した。床面は平坦だが、土器埋設炉付近は若干盛り上がる。柱穴は、炉を取り囲

む方形の各頂点部に位置しており、４本柱の竪穴住居跡と考えられる。いずれも楕円形で径は0.26m～0.49mを測る。遺物は、埋設土器以外にも数点出土したがいずれも小片で図化していない。遺構構築は遺構の配置や埋設土器から６世紀後葉の構築か。**土器埋設炉（第17図）**遺物は胴部上側を欠き、胴部から底部にかけて遺存していた。掘込み面は黒褐色土で、床面は黒色粘質土層に達する。検出面での掘込みの平面プランは、長軸N－12°－Eの楕円形で、長径52cm、短径38cm、深さ18cmを測る。焼土は、甕の底部上5cm程の所から掘込み面まで取りまいていた。埋設されていた土器の埋土からは、内部に網状構造をもつ骨片と思われる遺物が出土した。**遺物（第17図）**56は埋設土器である土師器の甕である。胴部に膨らみをもち底部は厚手の平底である。胴部下位に粘土のつなぎ目痕が観察される。

ＳＡ13（第17図）

隅丸方形を呈する。隅角は鈍角で南壁はふくれ気味になり、その他は直線的となる。柱穴はＳＨ１～４を検出し、４本柱の竪穴住居跡と考えられるが、ＳＨ１は配列上予想される位置から北西にずれる。柱穴径は0.20m～0.52mを測る。床面は、面をなすが南東方向に8cm程傾く。遺物は、住居内からほぼ全域で出土したがいずれも小片である。構築時期は遺構配置と遺物から６世紀後葉か。**遺物（第17図）**57は土師器の小型甕口縁部で直線的な胴部を呈す。器厚が薄く、内面に粘土のつなぎ目痕が残る。また、小片で図化していないが丹塗りの塊が出土している。

ＳＡ14（第18図）

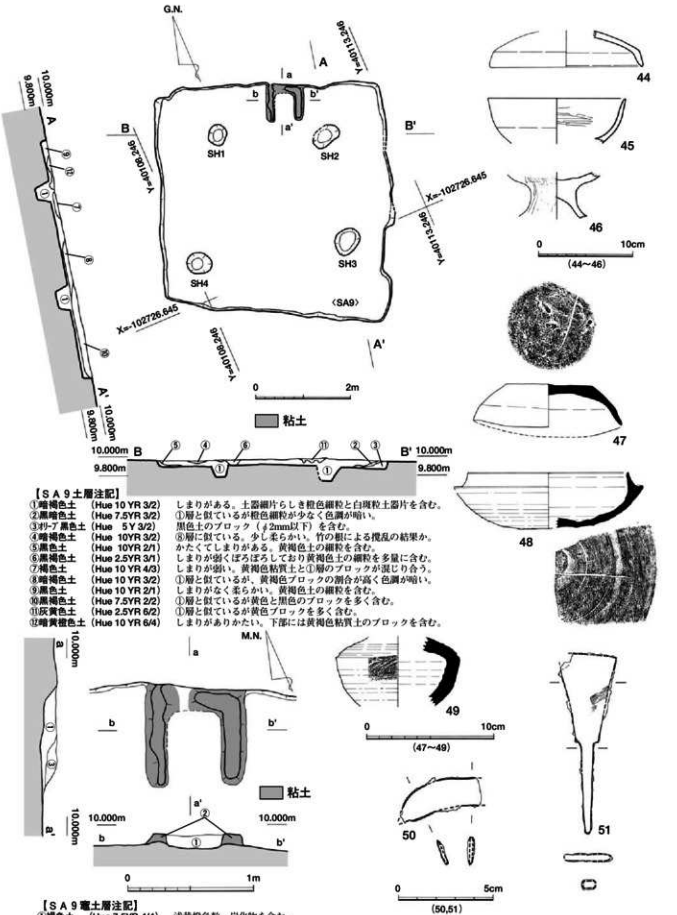
西壁は用水路建設工事により削平されており全貌は明確でないが、遺存部より平面プランは方形もしくは隅丸方形と考えられる。本遺跡では大きい規模の部類に属する。隅角は鈍角で北壁はややふくれ気味である。竹根により攪乱が進んでいるが、床面はほぼ平坦であり、南西部へ僅かに傾斜する。特に硬化した範囲はみられない。柱穴は検出できなかった。遺物は、北壁付近を中心に出土した。遺物から８世紀代の構築か。**遺物（第20図）**58は土師器の高台付塊である。貼付高台は外に張り出す。59は須恵器の長頸壺とみられ胴部と頸部の間に緩やかな稜をもつ。60は須恵器の甕胴部とみられ、内面に同心円当て具痕、外面に平行タタキがみられる。

ＳＡ15（第19図）

住居の東側南寄り部分をＳＡ16に切られている。平面プランは方形である。隅角は鈍角で壁面はふくれ気味である。柱穴はみられないがＳＨ１を検出した。楕円形で長径0.30m、短径0.21mである。床面はほぼ平坦である。遺物は小片が少数出土した。５世紀代の構築か。**遺物（第20図）**61は小型の土師器甕か壺で、内面に斜・横方向の工具ナデがみられる。このほかにも小片で図化していないが粗いタタキ調整の土師器甕片が出土した。

ＳＡ16（第19図）

住居の西隅でＳＡ15を切っている。平面プランは方形である。北西隅がやや西に窪み、東隅以外は鈍角である。壁面はほぼ直線的である。柱穴は、ＳＨ１～４を基本とする４本柱だと考えられる。ＳＨ５はＳＨ１とＳＨ２の柱穴間線上のほぼ中央部に位置することから、補助的な構造柱である可能性がある。



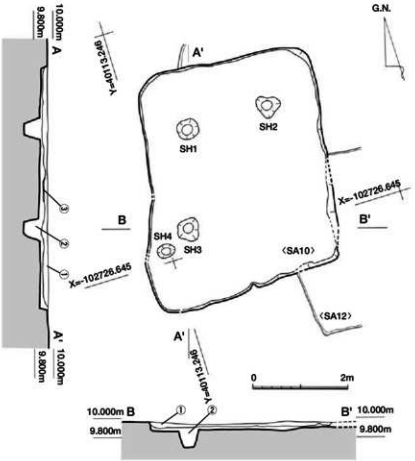
【ＳＡ９土層注記】

①暗褐色土	(Hue 10 YR 3/2)	しまりがある。土器細片らしき橙色細粒と白斑粒土器片を含む。
②黒褐色土	(Hue 7.5YR 3/2)	①層と似ているが橙色細粒が少なく色調が暗い。
③ｽﾘｰﾌﾞ黒色土	(Hue　5Y 3/2)	黒色土のブロック（φ2mm以下）を含む。
④暗褐色土	(Hue 10YR 3/2)	⑧層に似ている。少し柔らかい。竹の根による攪乱の結果か。
⑤黒色土	(Hue 10YR 2/1)	かたくてしまりがある。黄褐色土の細粒を含む。
⑥黒褐色土	(Hue 2.5YR 3/1)	しまりが弱くぼろぼろしており黄褐色土の細粒を多量に含む。
⑦褐色土	(Hue 10 YR 4/3)	しまりが弱い。黄褐色粘質土と①層のブロックが混じり合う。
⑧暗褐色土	(Hue 10 YR 3/2)	①層と似ているが、黄褐色ブロックの割合が高く色調が暗い。
⑨黒色土	(Hue 10 YR 2/1)	しまりがなく柔らかい。黄褐色土の細粒を含む。
⑩黒褐色土	(Hue 7.5YR 2/2)	①層と似ているが黄色と黒色のブロックを多く含む。
⑪灰黄色土	(Hue 2.5YR 6/2)	①層と似ているが黄色ブロックを多く含む。
⑫暗黄橙色土	(Hue 10 YR 6/4)	しまりがありかたい。下部には黄褐色粘質土のブロックを含む。

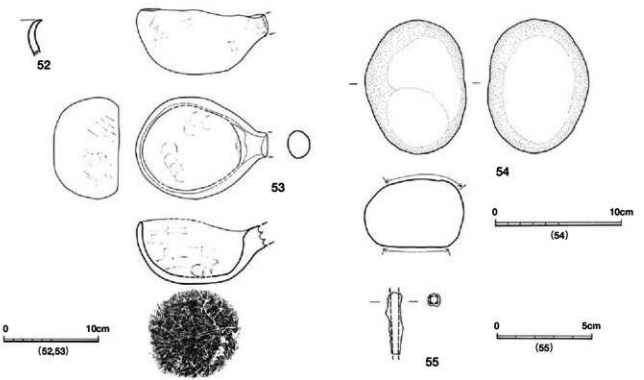
【ＳＡ９竈土層注記】

①褐色土	(Hue 7.5YR 4/4)	浅黄橙色粒、炭化物を含む。
②浅黄橙土	(Hue 10 YR 8/4)	竈粘土。わずかに暗褐色土粒を含む。
③橙色土	(Hue 2.5YR 2/3)	焼土

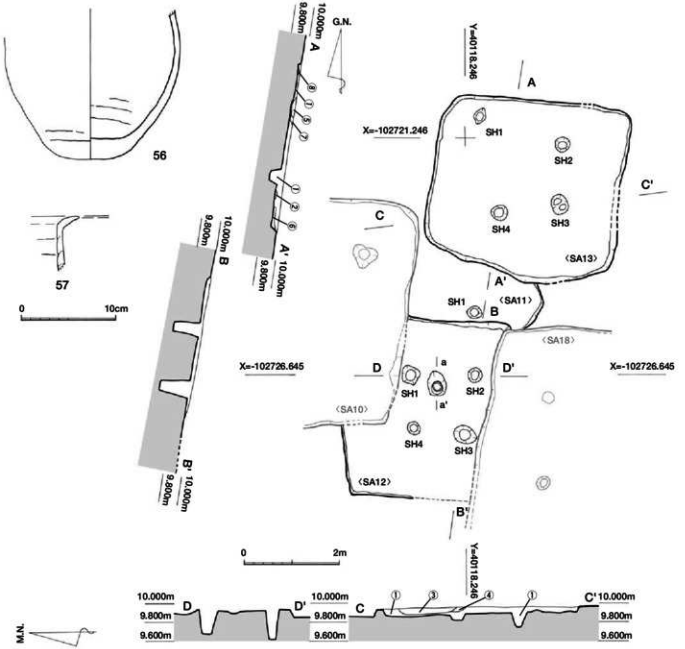
第15図　SA9及び出土遺物実測図（SA：S=1/80、竈：S=1/30、遺物：S=1/4、1/3、1/2）

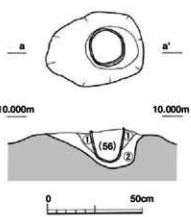


【ＳＡ10土層注記】
①暗褐色土（Hue 10 YR 3/2）
かたくしまるが土器の細片を多く含み、黒褐色の粒が混じる。
②黒色土　（Hue 10 YR 2/1）
やわらかくサラサラしている。
③黒褐色土（Hue 2.5YR 3/2）
黄褐色のブロック（φ2cm）を含む。



第16図　SA10及び出土遺物実測図（遺構：S=1/80、遺物：S=1/4、1/3、1/2）





【ＳＡ11・12・13土層注記】

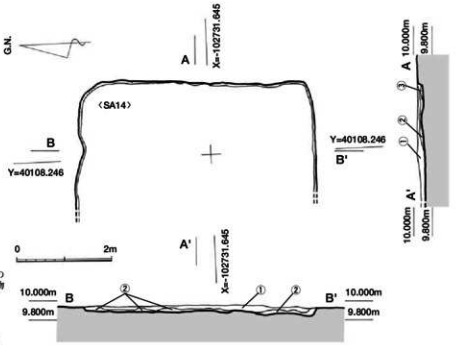
①暗褐色土	(Hue 7.5YR 3/2)	非常にかたくしまる。土器の細片と考えられる橙色粒や炭化物を多く含む。
②黒褐色土	(Hue 7.5YR 3/1)	やわらかくしまりはふつう。土器の細片と考えられる橙色粒をわずかに含む。
③灰褐色土	(Hue 10 YR 4/2)	①層と似ているが、土器細片らしき橙色粒の含有率が高い。色調も①層に比べ少し明るい。
④暗褐色土	(Hue 10 YR 3/2)	①層と③層の混合土もしくは漸移層の可能性がある。
⑤灰黄褐色土	(Hue 10 YR 6/2)	しまりがあり乾くとかたい。部分的に赤変している。被熱か。
⑥黄灰色土	(Hue 2.5YR 4/1)	土質は①層と同じ。色調の違いであると考えられる。
⑦黒褐色土	(Hue 2.5YR 3/1)	土質は①層に似ているが、若干粘性がある。層中に土器片を含む。
⑧橙色土	(Hue 10 YR 3/2)	赤化した⑤層であると考えられる。
⑨褐色土	(Hue 7.5YR 4/4)	浅黄橙、橙、暗褐色粒（φ1 mm～1cm）を含む。炭化物も混じる。

【ＳＡ12内土器埋設炉土層注記】

①橙色土	(Hue 7.5YR 6/8)	黒褐色土に焼土が混じる。炭化物を含む。
②黒褐色土	(Hue 10YR 3/2)	かたくしまっており粘性あり。炭化物を含む。

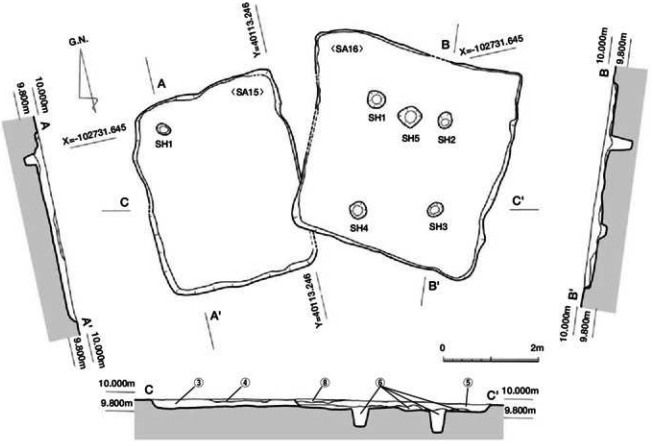
第17図　SA11・12・13及び出土遺物実測図（SA：S=1/80、土器埋設炉：1/20、遺物：1/4）

【ＳＡ14土層注記】
①暗褐色土（Hue 10 YR 3/3）
黒褐色が強い部分もある。粘性あり。炭化物や土器片を含む。竹根により撹乱が進んでいる。
②黒褐色土（Hue 10 YR 2/2）
かたくしまっている褐色土とそうでもない黒色土が混じり合う。竹根により撹乱が進んでいる。
③黒褐色土（Hue 10 YR 2/2）
かたくしまっている。粘性ややあり。黄橙のブロックを少量含む。土器と考えられる橙色粒が混入する。

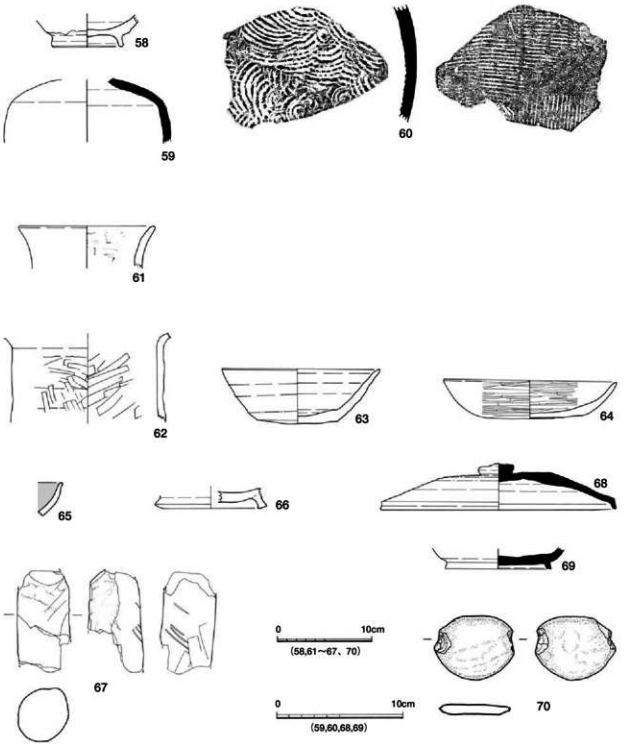


第18図　SA14実測図（S=1/80）

【ＳＡ15・16土層注記】
①黒色土（Hue 7.5YR 2/1）
しまりが弱くぼろぼろしている。黒褐色土が混ざる。
②黒褐色土（Hue 7.5YR 3/1）
しまりが弱くぼろぼろしている。φ5mm程度の黄褐色のブロックを少量含む。
③暗褐色土（Hue 10YR 3/3）
非常にかたくしまりがある。φ10mm程度の黒褐色土のブロックとφ10mm程度の炭化物が少量見られる。
④褐灰色土（Hue 10 YR 4/1）
粘質土。黄褐色の細粒を少量含む。
⑤暗褐色土（Hue 10 YR 3/3）
かたくしまっている。土器の細片や炭化物を多く含む。
⑥黒色土（Hue 10 YR 2/1）
かたくてしまりがある。黄褐色土の細粒を含む。明褐色土のブロック（φ10mm）を一部含む。
⑦暗灰黄色土（Hue 2.5Y 4/3）
土器の細片と考えられる橙色粒と焼土を少量含む。
⑧褐色土（Hue 10 YR 4/4）
粘土、焼土、炭化物が多く混ざっている。



第19図　SA15・16実測図（S=1/80）

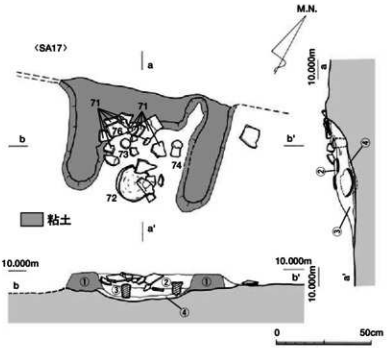


第20図　SA14・15・16出土遺物実測図（S=1/4、1/3）

いずれも楕円形で径は0.18m～0.61mを測る。床面は、ほぼ平坦だが中央部がわずかに盛り上がり壁面に向けて窪む。遺物は、住居内のほぼ全域から出土した。また、住居内に竈跡は検出できなかったが竈粘土に似た土を西壁付近に検出したことや竈支脚が出土したことから、かつては竈が存在していたという可能性は否めない。遺構構築は遺構配置や遺物から８世紀代のものか。**遺物（第20図）**62は土師器の甕胴部である。胴部はふくらみをもたず直線的で、内外面とも粘土のつなぎ目痕をナデ消すように工具で調整している。63、64は土師器の坏である。63は回転ナデ調整で底部はヘラ起こしである。64は内面に暗文がみられ、非常に丁寧なつくりである。65、66は土師器の塊である。65は内外面とも丁寧なナデ調整の黒色土器である。66は高台付塊である。貼付高台は面取されており、断面は高台中央部から畳付にかけて広がる台形状を呈する。接地面は高台内側である。67は土師質の竈支脚である。円筒状に整形され調整は工具ナデである。また、線刻が４条観察される。68は須恵器の坏蓋である。焼成不完全で風化が激しい。つまみ部は周辺が押さえられ、やや窪んだ擬宝珠状である。69は須恵器の高台付坏である。高台が外側に張り出し、高台と体部の間に稜をもつ。70は石錘である。利用石材は砂岩で、扁平礫の長軸を数度の打撃による剥離で紐掛け部をつくり出している。

ＳＡ17（第21図）

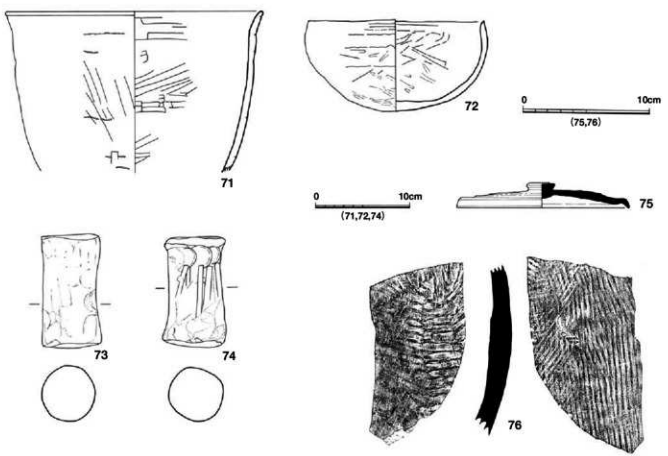
ＳＡ18の上面で検出したが、住居部分はほとんど削平されており、竈及び造り付け部分の北壁一部を検出した。当初、この竈はＳＡ18に付設されたものと考えていたが、造り付け部分がＳＡ18の北壁とずれていたこと、竈の下部はＳＡ18の床面より高く異なる土質の面に接していること、竈内から出土した遺物とＳＡ18から出土した遺物に時期差が生じることからＳＡ18より新しく、既に床面の削平された住居跡と考えられる。遺構構築は遺構配置と遺物から８世紀代か。**竈（第21図）**造り付け竈である。袖長60cm弱の規模で平行に構築され開かない。燃焼部は平坦で焼土が堆積していた。煙道は検出されなかった。燃焼部には、２本の土師質の支脚が立ったまま遺存しており、二つ掛け横並びの竈だと考えられる。また、２本の支脚は向かって右側に偏在しており、法量の違う２種類の土師器甕に使用されていた可能性がある。遺物は、竈内の支脚の間に塊が、また、向かって左側の支脚付近に甕がつぶれた形で出土した。**遺物（第21図）**71は土師器の甕と考えられるが甑の可能性もある。内外面とも工具ナデ調整である。72は土師器の塊である。竈支脚の前方で竈袖の両先端中央部から出土した。風化や剥離が進んでおり単位は不明瞭であるがミガキ調整が施される。73、74は支脚と考えられる土製品である。いずれも円筒形で上下面部は面取されており、大きさ形状、重量(73:228g、74:208g)ともよく似る。また、火所に向いた部分は煤により黒変する。73は下面がやや内湾し、柱部は指押さえで成形した後工具で調整している。74は柱部に比べ若干上下面径を大きくする。75は須恵器の坏蓋である。平たいつまみをもち、口縁部を下方に折り曲げて内傾させている。76は須恵器甕の胴部である。外面には平行タタキを施し、内面には平行当て具痕が残る。



竈検出状況

竈と支脚

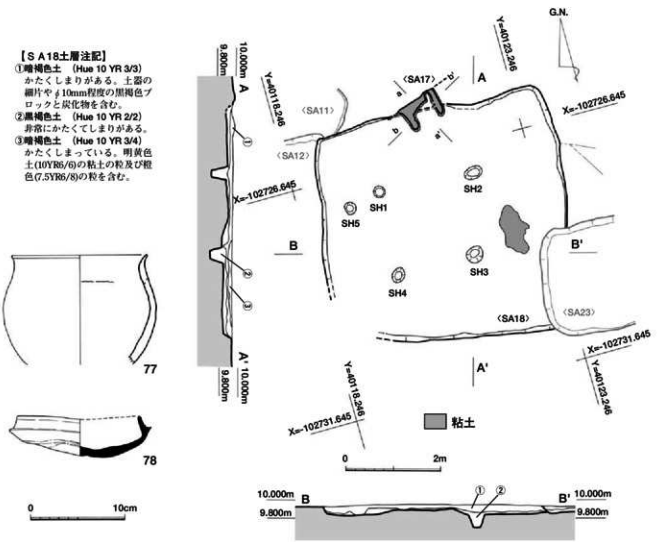
【ＳＡ17土層注記】
①明黄褐色土（Hue 10YR 7/6）　竈粘土。黒褐色土粒をわずかに含む。燃焼面は赤化が激しい。
②橙色土（Hue 5YR 6/6）　5mm～15mmの明赤褐色(5YR5/6)粒や橙色(5YR7/6)粒を多量に含む。
③橙色土（Hue 5YR 6/6）　5mmから10mmの赤褐色(5YR5/6)粒や炭化物を含む。
④黒褐色土（Hue 10YR 2/2）　非常にかたくてしまりがある。明褐色の細粒を少量含む。



第21図　SA17及び出土遺物実測図（遺構：S=1/20、遺物：S=1/4、1/3）

ＳＡ18（第22図）

ＳＡ17の下層で検出した。ＳＡ11・12を西壁、ＳＡ24を東壁で切っており、ＳＡ23から東壁を切られている。平面プランは方形を呈するが、西壁に比べ東壁が若干長いため台形状を呈する。隅角は鈍角で壁面はややふくれ気味である。柱穴は、ＳＨ１～４の４本柱か。ＳＨ５は、ＳＨ１と西壁の間に位置することからＳＨ１の補助的な柱穴である可能性がある。柱穴径は0.20m～0.40mを測る。床面は、南部と西部がわずかに窪む。床面付近で竈粘土に似た土を検出した。遺物は、住居内からほぼ全域で出土したが、ＳＡ17のほぼ真下に位置することから、埋土上面に含まれる遺物にはＳＡ17の遺物も含まれていると考えられる。遺構構築は遺構位置と遺物から７世紀前葉か。**遺物（第22図）**77は土師器の中型球形胴甕である。78は焼成歪みをもつ須恵器の坏身である。立ち上がりが斜め上方に伸び、端部は丸く仕上げている。



第22図　SA17・18及び出土遺物実測図（遺構：1/80、遺物：1/4）

ＳＡ19（第23図）

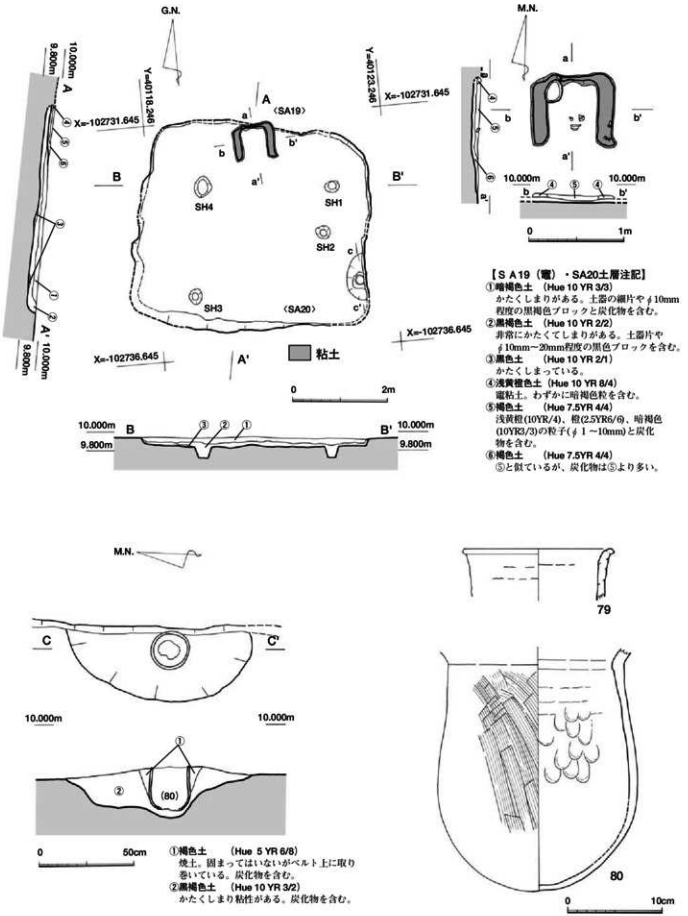
ＳＡ20の上面で検出したが、住居部分はほとんど削平されており、竈部分のみ検出した。竈の主軸はＳＡ18と若干ずれており、ＳＡ20の北壁上につくられている。また、竈の下部はＳＡ20の床面より高く異なる土質の面（ＳＡ20の埋土）に接しており、ＳＡ20より新しい住居跡だと考えられる。ＳＡ17と主軸や規模がよく似ていることから同時期構築の可能性がある。**竈（第23図）**地表近くで検出し、竈粘土は広範囲につぶされ広がっていた。竈本体と思われる袖は、粘土の堆積厚が最大3cm程度の残存で上面は削平されていた。遺存部分から推測すると、袖長70cm弱の規模で平行に構築され開かない。小片のため図化していないが、支脚と思われる土製品がＳＡ20の北壁部で出土した。燃焼部は確認できなかった。**遺物（第23図）**79は土師器の甕である。竈内から出土し、内外面とも粘土のつなぎ目痕が残る。

ＳＡ20（第23図）

ＳＡ19の下位で検出した。隅丸方形を呈するが、北壁に比べ南壁が若干長いため台形状を呈する。南東隅はトレンチで消失しているが、隅角は鈍角で壁面はややふくれ気味である。柱穴はＳＨ１～ＳＨ４の４本柱の様相を呈するが、ＳＨ２は配列上配置されるはずの南東部より北にずれて検出された。柱穴は、いずれも楕円形で径は0.22m～0.44mを測る。床面はほぼ平坦であるが、特に硬化した範囲はみられない。遺物は北東部を除いて住居内のほぼ全域から甕、坏が出土した。遺構配置や遺物から８世紀代の構築か。**土器埋設炉（第23図）**住居の東壁際に検出した。埋設されていた土師器は長胴甕で、口縁部を欠き頸部から胴部にかけて遺存していた。底部は破損していたが遺存しており復元することができた。おそらく、埋設した後に底部を打ちかいたものと思われる。掘込みは黒褐色土層に達する。検出面での掘込み平面プランは半不整楕円形で、長径98cm、深さ26cmを測る。焼土は胴部下位から甕全体を取り巻き、上部に向かう程厚くなる。埋設土器の埋土からは、骨や貝と思われる石灰化した物質とともに、炭化したセンダンの種子が出土した。**遺物（第23図）**80は土器埋設炉を形成していた肩部の張らない厚手の長胴甕である。胴部には強いハケ目調整がみられる。

ＳＡ21（第24図）

住居北西部をＳＡ24に、南隅をＳＡ22に切られている。上部は削平されており平坦な床面を検出した。柱穴は検出できなかった。住居跡中央部から人頭大の２つの礫と、それぞれの礫の下敷きになった土師器片が出土した。土師器片は接合すると、胴部から口縁部にかけてほぼ完形である甕２個体（第30図：81、82）となった。出土状況は、床面に対して垂直に置かれた甕の中心に礫が置かれていた。しかも床面の下位まで土器がはまりこんでいることから、かなり強い圧力がかかったものと思われる。遺構構築は遺構配置と遺物から５世紀中葉か。**遺物（第30図）**81～85は土師器の甕である。81は最大径を胴部上位にもち大きく外反する口縁部をもつ。頸部に刻目突帯が施されるが、突帯の粘土厚は薄く刻みは土器表面に至る。82は球形に近い中膨らみの胴部をもち、頸部に刻目突帯が施される。83は最大径を口縁部にもち、胴部外面には強い平行タタキがみられる。84は頸部にしまりがなく、わずかに開く口縁部をもつ。胴部にヘラ状の工具で刻まれた線刻が施される。85は木の葉底の甕と思われる。86は甑で、外面は平行タタキ調整である。87は土師器の高坏である。坏部下位から口縁部へ大きく外反する。



【ＳＡ19（竈）・SA20土層注記】
①暗褐色土　(Hue 10 YR 3/3)
かたくしまりがある。土器の細片やφ10mm程度の黒褐色ブロックと炭化物を含む。
②黒褐色土　(Hue 10 YR 2/2)
非常にかたくてしまりがある。土器片やφ10mm～20mm程度の黒色ブロックを含む。
③黒色土　(Hue 10 YR 2/1)
かたくしまっている。
④浅黄橙色土 (Hue 10 YR 8/4)
暗粘土。わずかに暗褐色粒を含む。
⑤褐色土　(Hue 7.5YR 4/4)
浅黄橙(10YR/4)、橙(2.5YR6/6)、暗褐色(10YR3/3)の粒子(φ１～10mm)と炭化物を含む。
⑥褐色土　(Hue 7.5YR 4/4)
⑤と似ているが、炭化物は⑤より多い。

①褐色土　(Hue 5 YR 6/8)
焼土。固まってはいないがベルト上に取り巻いている。炭化物を含む。
②黒褐色土　(Hue 10 YR 3/2)
かたくしまり粘性がある。炭化物を含む。

第23図　SA19・20及び出土遺物実測図（SA：S=1/80、竈：S=1/40、土器埋設炉：S=1/20、遺物：S=1/4）

ＳＡ22（第24図）

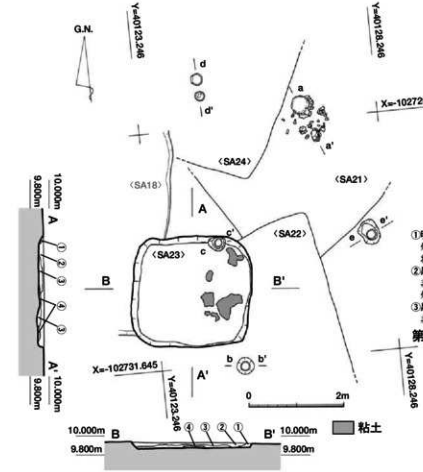
住居北部でＳＡ21を切っており、北西部はＳＡ23に切られている。住居上部及び南部は削平されており住居中央部から北東部にかけて床面を検出した。床面はほぼ平坦で、柱穴は検出できなかった。遺物は、ほとんど出土せず住居中心部付近に土器埋設炉を検出した。遺構配置と遺物から７世紀後葉から８世紀前葉の構築か。**土器埋設炉（第26図）**埋設土器（第30図：88）は頸部から上側と底部を欠き、胴部のみ遺存していた。底部は埋土や掘り込みの最深部に出土しなかったことから、埋設の際、すでに底部は失われていたと推測できる。掘込みの底は暗褐色土層に達する。焼土は、遺存部上部をベルト状に取り巻いていた。埋設土器の埋土からは、タール状の物質が付着した二枚貝の殻頂に似た石灰質状物質が出土した。**遺物（第30図）**88は肩部の張らない厚手の土師器長胴甕で、頸部より上半部を欠く。外面は強めのハケ目が施され、内面に指頭痕が残る。

ＳＡ23（第24図）

住居東部でＳＡ22、西部でＳＡ18を切っている。隅角は鈍角で壁面はふくれ気味な隅丸方形を呈し、本遺跡では比較的小型の竪穴住居跡である。床面は面をなすが南部でわずかに窪む。柱穴は検出できなかったが、北壁東寄りに土器埋設炉を検出した。遺物は、住居内からほぼ全域で出土したが、いずれも甕や坏の小片である。遺構配置と遺物から８世紀代の構築か。**土器埋設炉（第27図）**竈は検出されなかったが、土器の近くや住居内に竈土に似た粘土が検出されたことから、竈に付設された埋設炉の可能性がある。埋設されていた甕（第30図：89）は胴部のみ遺存していた。おそらく、底部を打ちかいた後埋設したのであろう。掘込みは黒褐色土層に達する。検出面での掘込み平面プランは不整楕円形で、直径38cm、深さ18cmを測る。焼土は、胴部下位から甕全体を取りまき、上部に向かう程厚くなる。甕の埋土の中から小動物の脊髄と思われる石灰質状物質が出土した。**遺物（第30図）**89は、胴部下位に膨らみをもつ厚手の土師器長胴甕である。外面に強めのハケ目調整が施され、内面に粘土のつなぎ目痕と指頭痕が残る。90は須恵器の坏蓋で口縁部を下方に折り曲げている。

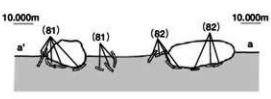
ＳＡ24（第24図）

住居南東部でＳＡ21を切り、北東部をＳＣ１に切られている。上部は削平されており床面を検出した。床面はほぼ平坦で、柱穴は検出できなかった。遺物はほとんど出土せず住居中央部やや南寄りに土器埋設炉を２基検出した。そのうち北側の埋設炉は、床面ではなくＳＡ24の埋土中から掘り込んでいる。また、出土した土器は南側の埋設土器とかなりの時期差があることから、ＳＡ24に伴うものではなく、古代に埋設されたものである。遺構構築は、遺構配置と遺物から７世紀前葉か。**土器埋設炉（第28図）**埋設土器（第30図：91）は胴部上側を欠いて遺存していた。掘込みの床面は暗褐色土層に達する。焼土は、埋設土器上半部をベルト状に取り巻いていた。土器内からは、内部に網状構造をもつ石灰質物質や炭化したセンダンの種子が出土した。**遺物（第30図）**91は土器埋設炉を形成していた土師器の甕である。胴部に膨らみをもち底部は厚手の丸底である。内外面とも工具ナデ調整であるが、内面に粘土のつなぎ目痕がナデ消されずに残る。92は須恵器高坏の坏底部である。

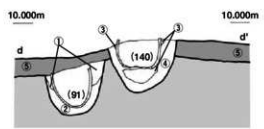


【SA23土層注記】
①褐色土　(Hue 7.5YR 4/3)　かたくてしまりがある。黄褐色の細粒を少量含む。
②明褐色土　(Hue 10 YR 3/3)　非常にかたくしまりがあり、黄褐色の細粒を少量含む。φ10mm程度の黒褐色土のブロックを含む。φ10mm程度の炭化物が少量見られる。
③黒褐色土　(Hue 10 YR 3/2)　かたくしまりがある。φ5mm程度の黄褐色のブロックを少量含む。
④黒色土　(Hue 10 YR 2/1)　かたくしまっている。φ3mm程度の黄褐色の細粒を少量含む。

第24図　SA21・22・23・24実測図（S=1/80）

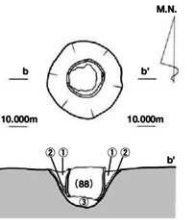


第25図　SA21内遺構断面実測図（S=1/20）



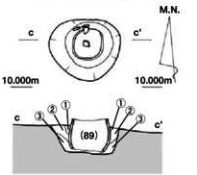
【SA24内土器埋設炉土層注記】
①橙色土　(Hue 7.5YR 6/8)　焼土。固まってはいないがベルト状に取り巻いている。
②暗褐色土（Hue 10 YR 3/3）　やわらかく粘性あり。焼土を含んでいる。ATブロックを少量含む。
③黄橙色土（Hue 7.5YR 7/8）　焼土。サラサラしていてしまりなし。炭化物を含む。
④黒褐色土（Hue 10 YR 3/1）　非常にかたくしまっている。粘性あり。焼土を少量含み、炭化物を混じる。
⑤褐色土　(Hue 10 YR 3/3)　かたくてしまりがある。粘性あり。土器片や炭化物を含む。

第28図　SA24内土器埋設炉断面実測図（S=1/20）



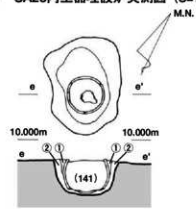
①明赤褐色土（Hue 5 YR 5/8）　焼土。固まっているがもろい。埋設土器の頸部付近にベルト状に取り巻いている。
②黒褐色土　(Hue 10 YR 3/1)　非常にかたくしまっているが、粘性弱くもろい。炭化物、焼土を含む。
③黒褐色土　(Hue 10 YR 2/2)　非常にかたくしまっている。粘性あり。炭化物を含む。

第26図　SA22内土器埋設炉実測図（S=1/20）



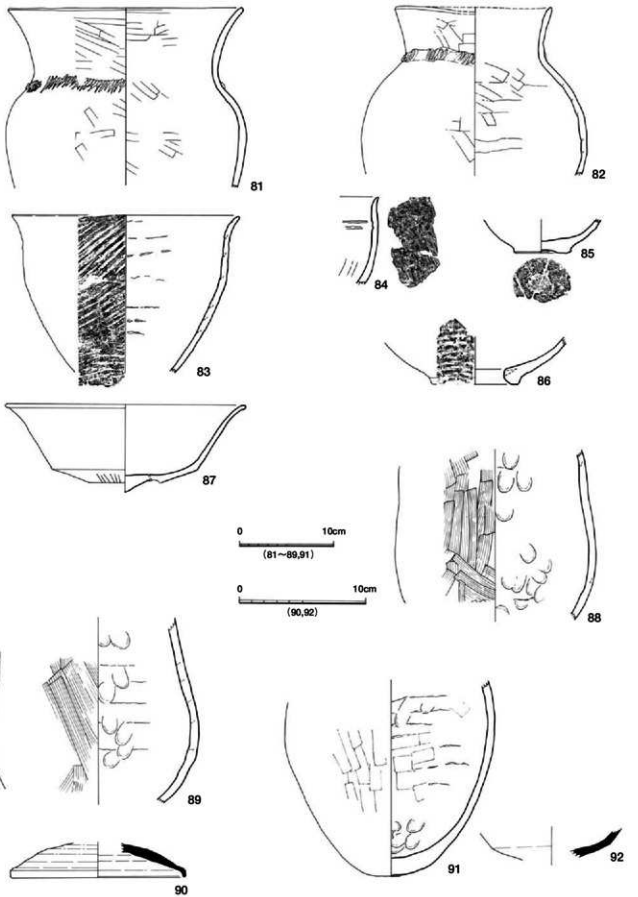
①明褐色土（Hue 7.5YR 5/6）　焼土。埋設土器の頸部よりやや下をベルト状に取り巻いている。
②黒褐色土（Hue 10 YR 3/2）　非常にかたくしまりがあるが粘性弱い。焼土を粒状に含む。
③黒褐色土（Hue 10 YR 3/1）　かたくしまりがある。粘性あり。土器片や炭化物を含む。

第27図　SA23内土器埋設炉実測図（S=1/20）



①黄橙色土（Hue 7.5YR 7/8）　焼土。サラサラしてしまりなし。炭化物を含む。
②暗褐色土（Hue 10 YR 3/3）　非常にかたくしまりがある。土器の細片を多く含む。φ1mm程度の黒褐色のブロックを含み、焼土と炭化物が混じる。

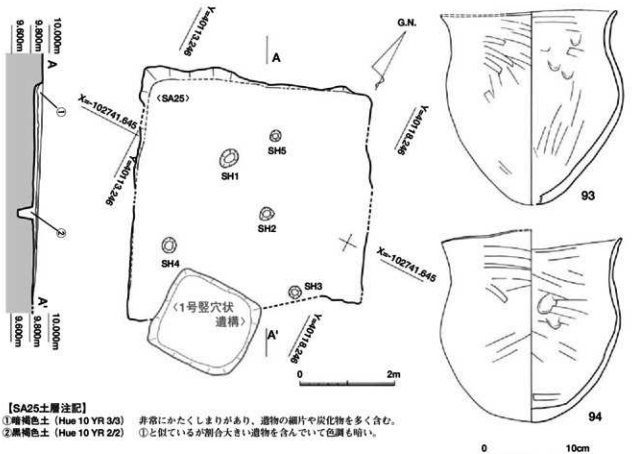
第29図　遺構外土器埋設炉実測図（S=1/20）



第30図　SA21・22・23・24出土遺物実測図（S=1/4、1/3）

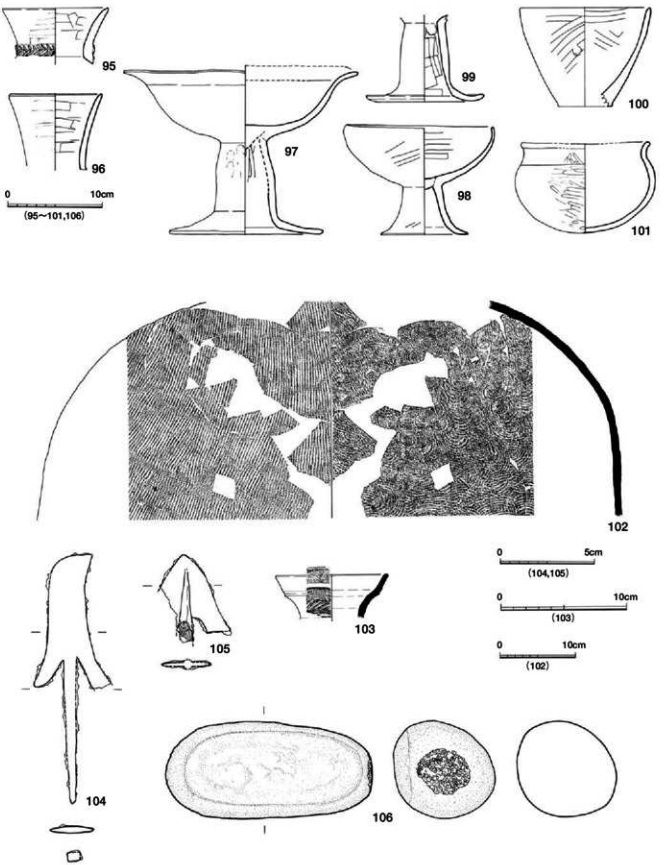
ＳＡ25（第31図）

上部は北壁および西壁の一部を除いて削平されており、その他については床面のみ検出した。他の住居跡とは幾分距離を置いた調査区中央部西端に構築されており、南壁は竪穴状遺構に切られている。方形を呈するが南東部は若干内側に切れ込む形状を呈する。隅角は鈍角で壁面は直線的である。本遺跡では比較的大規模な竪穴住居である。配列上規則的な柱穴はなくピットを５基検出した。いずれも楕円形で径は0.20m～0.43mを測る。床面は、ほぼ平坦で特に硬化した範囲はみられない。遺物は土師器を中心に須恵器、鉄器、石器などが大量に出土した。本遺跡の中では最も古い住居跡の部類に入る。遺物から５世紀後葉から６世紀前葉の構築か。**遺物（第31・32図）** 93,94は土師器の甕である。いずれも頸部にしまりがなくわずかに開く口縁部をもつが、93は尖底で94は丸底気味である。95,96は土師器の壺である。内外面とも工具ナデ調整で、95は刻目突帯が施される。97～99は土師器の高坏である。97の坏部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。98は塊状の坏部に「ハ」字状に大きく広がる脚部をもつ。99は脚部中位に若干膨らみをもち、開き気味にのびながら裾部で外反する。100,101は鉢である。100はバケツ状を呈するが、101は頸部で屈曲し外反する。102は須恵器の大甕である。床面上に胴部片が重なるように出土した。肩部には打撃痕と思われる同心円状の亀裂が確認できる。外面に平行タタキ痕、内面に同心円当て具痕が残る。103は須恵器の蓋で外面には櫛描波状文が施される。104,105は鉄鏃**である。104は腸抉三角形鏃の変形鏃であり鏃身先端が中心から大きく曲がる。105は無茎鏃で鏃身部に木片が遺存している。106は敲石である。利用石材は砂岩で、長軸の一端のみ敲打痕が観察される。**



【SA25土層注記】
①暗褐色土（Hue 10 YR 3/3）　非常にかたくしまりがあり、遺物の細片や炭化物を多く含む。
②黒褐色土（Hue 10 YR 2/2）　①と似ているが割合大きい遺物を含んでいて色調も暗い。

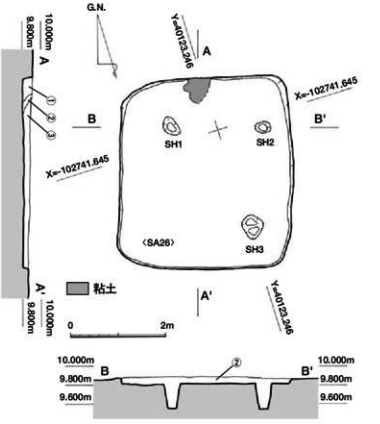
第31図　SA25及び出土遺物実測図①（遺構：S=1/80、遺物：S=1/4）



第32図　SA25出土遺物実測図②（S=1/5、1/4、1/3、1/2）

ＳＡ26（第33図）

切り合い関係をもたず単独で構築されている。隅丸方形を呈するが、隅角は鈍角で壁面はややふくれ気味である。柱穴は4本柱の様相を呈するが、配列上配置されるはずの南西部は検出できなかった。いずれも楕円形で径は0.15m～0.42mを測る。北壁付近に竈粘土に似た明黄褐色粘土を検出したが、竈は遺存しなかった。床面は、ほぼ平坦であるが、特に硬化した範囲はみられない。遺物は、粘土を検出した北壁付近を中心に古墳時代中期の特徴をもつ、タタキ調整の土師器甕の小片が出土した。遺構構築時期も同時期か。

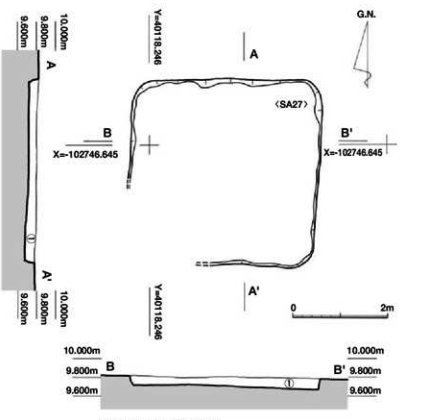


①暗オリーブ褐色土（Hue 2.5YR 3/3）　φ2～5cmの黒褐色ブロック、焼土を多く含む。
②黒褐色土（Hue 10YR 2/3）　土器の細片を多く含み、かたくしまりがある。
③にぶい黄褐色土（Hue 10YR 4/3）　φ5cm程度の褐灰色の粘土ブロックを含む。

第33図　SA26実測図（S=1/80）

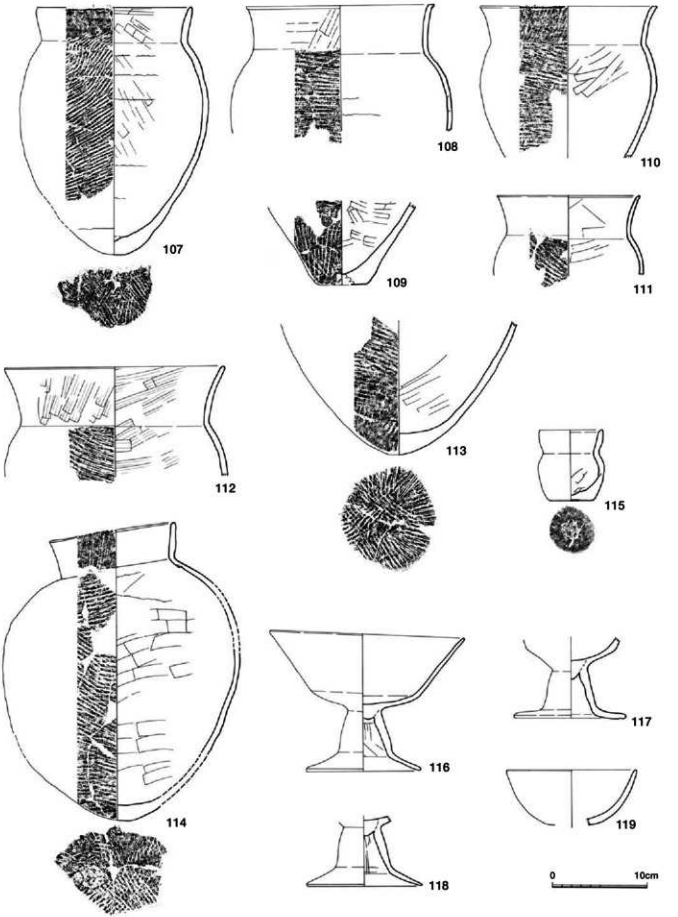
ＳＡ27（第34図）

調査区西端の境界外に近い南西隅は不明であるが、遺存部により隅丸方形を呈すると考えられる。本遺跡では古手の竪穴住居跡に分類できる。遺存した隅角は鈍角で壁面は直線的である。床面はほぼ平坦で、柱穴は検出できなかった。遺物は、北東隅及び北壁付近を中心に土師器や須恵器に加え石器等が出土した。遺物の量が大量でしかも住居北部に集中していることが特徴的である。遺物は1ｍグリッドを設定して取り上げた。遺物から、5世紀中葉から後葉の構築か。

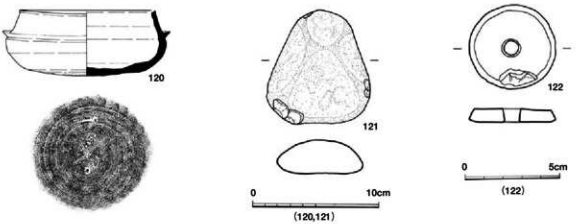


①暗褐色土（Hue 10 YR 3/3）
非常にかたくしまりがり、遺物の細片や炭化物を多く含む。

第34図　SA27実測図（S=1/80）



第35図　SA27出土遺物実測図①（S=1/4）

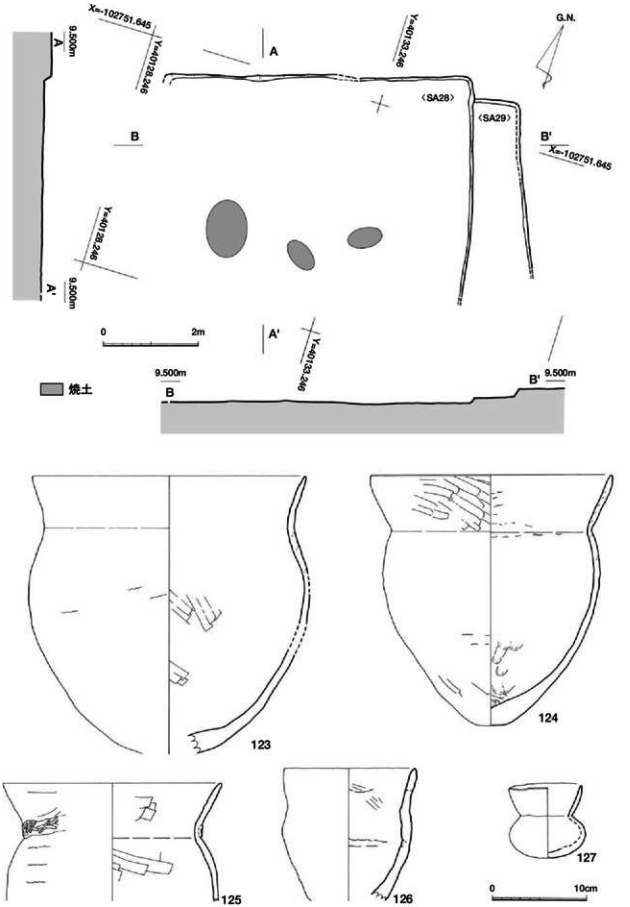


第36図　SA27出土遺物実測図②（S=1/3、1/2）

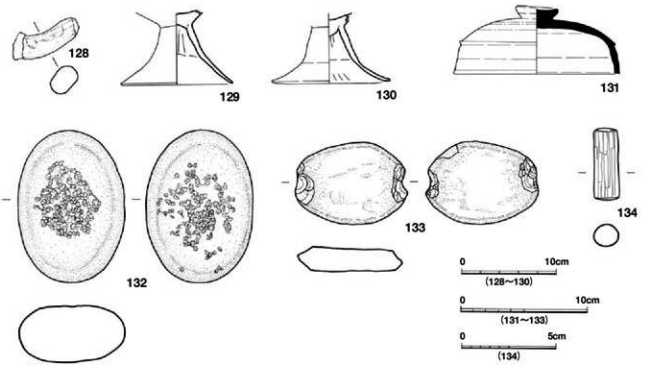
遺物（第35・36図） 107～119は土師器である。107～113は甕である。いずれも外面に強い平行タタキが施され胴部上位に最大径をもつが、頸部から口縁部にかけての形状や最大径の位置などに若干バリエーションがみられる。107,113は尖底で109は平底である。108と109は同一個体か。114,115は壺である。114は上部が張る扁球状の胴部をもち、外面は強い平行タタキが施される。115は小型の平底の壺で木の葉底をもつ。116～118は土師器の高坏である。いずれも脚部中部に膨らみがあり裾部との境に屈曲点をもつが、膨らみの度合いや裾部の形に若干のバリエーションがある。116は坏下位で屈曲し、外反気味に立ち上がる坏部をもつ。119は塊で丁寧なナデ調整である。120は須恵器の坏身である。蓋受け部は端部を鋭く仕上げている。身の底部にみられるヘラ削りの方向は反時計回りで、ヘラ記号をもつ。121は敲石である。利用石材は砂岩で三角形の頂点を使用している。122は蛇紋岩製の紡錘車である。

ＳＡ28・29（第37図）

調査区南端で検出した。上部は撹乱が進んでおり南西部は床面まで削平されていたが、壁の立ち上がりが確認できたこと、出土する土器に時期的な隔たりが小さいこと、床面に焼土の広がりが３か所確認できたことから住居跡として取り扱う。北西隅部が方形であることが確認できたが、全体的なプランは把握できなかった。ＳＡ28とＳＡ29は東部で切り合っているが削平が進んでおり、新旧関係は確認できなかった。床面は粘土質でほぼ平坦である。柱穴は検出できなかった。遺物は、土師器を中心に須恵器や石器などが出土した。遺物から５世紀後葉から６世紀前葉の構築か。**遺物（第37・38図）** 123～130は土師器である。123～126は甕である。123は最大径を胴部上位にもつのに対し、124～126は口縁部にもつ。また、125は頸部に刻目突帯をもち126は粗製である。127は卵倒形の胴部をもつ小型丸底壺である。128は甑の把手と思われる。129,130は高坏である。いずれも脚部は開き気味にのびるが、130は裾部との間に明瞭な稜をもつ。131は須恵器の有蓋高坏の蓋である。口縁端部に段を有し庇状の突出部がまわる。つまみは扁平である。132は敲石である。利用石材は砂岩で敲打痕による窪みは表裏両面に観察できる。133は石錘である。扁平な砂岩礫の長軸両端を数度の打撃により抉りをつくり出し、その部分を紐掛け部にしたもので「礫石錘」と呼ばれるものである。134は滑石製品で、円筒状に成形している。円筒上下端には使用痕がみられることから石墨の可能性がある。



第37図　SA28・29及び出土遺物実測図①（遺構：S=1/80、遺物：S=1/4）



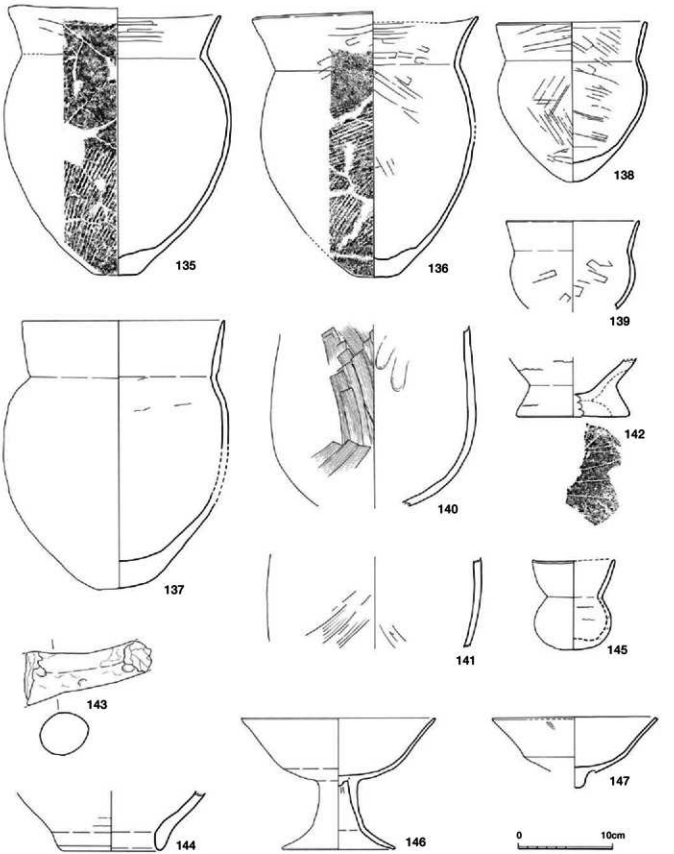
第38図　SA28・29及び出土遺物実測図②（S=1/4、1/3、1/2）

（2）その他の遺物（第39図～第46図）

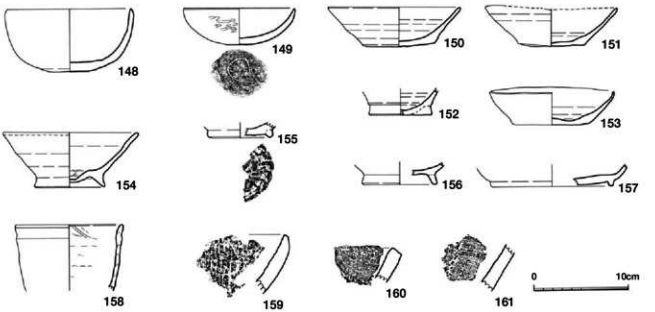
調査第2面の遺構から出土した遺物以外にも、包含層等から古墳時代～古代の特徴をもつ遺物が出土している。量的には類型化するほど多くなく種別ごとにその概要を述べる。

①土師器・土師質土器（第39・40図）

135～142は甕である。135～139は、いずれも「く」字形に外反する口縁部をもち小平底であるが、135,136は外面に粗いタタキが施され、137,138は丸底気味の小平底で直口口縁をもつなどいくつかのタイプがみられる。139は最大径を口縁部にもつ小型球形胴の甕である。140,141は器厚があり外面にハケ目調整がみられる。142は木の葉底をもつ。143,144は甑である。143は甑の把手とみられる。先端は欠損しているがかなり大型で粗いナデ成形である。144は底部で単孔である。145は小型丸底壺である。やや内湾する口縁部と扁球胴をもつ。146,147は高坏である。いずれも接合箇所に棒状の粘土塊を充填している。坏部は緩やかな変換点をもち、口縁部は外反する。148,149は塊である。149は底部に線刻を施している。150～153はいずれもヘラ切り底をもつ坏である。153は堅緻な焼きでたたくと金属音がする。154～156は高台付塊である。155は底部に花弁状のヘラ状工具痕が残る。157は底部と体部の境に段を有する皿である。158は粗製の鉢である。159～161は製塩土器と考えられている布痕土器である。



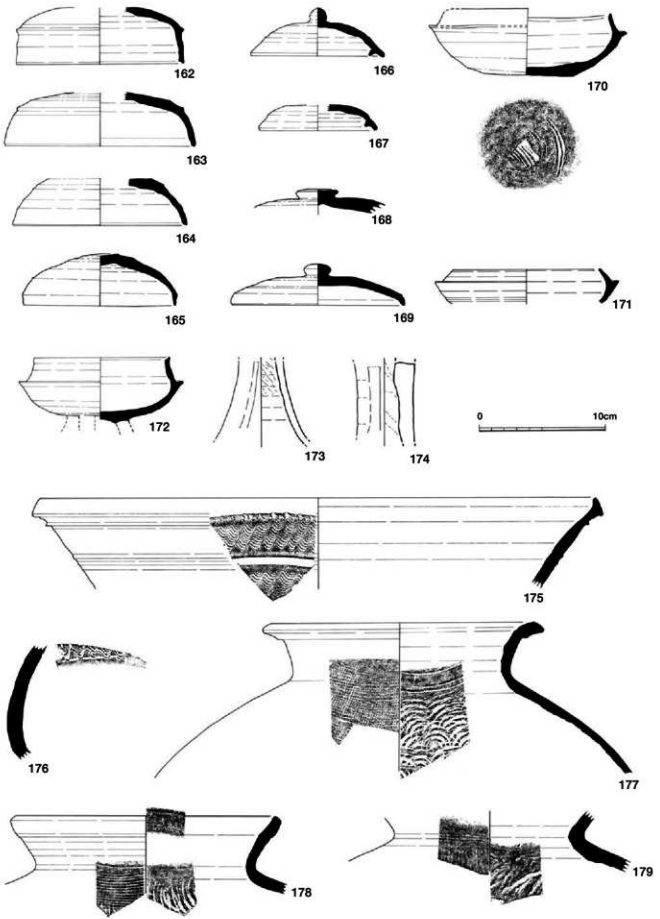
第39図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図①（S=1/4）



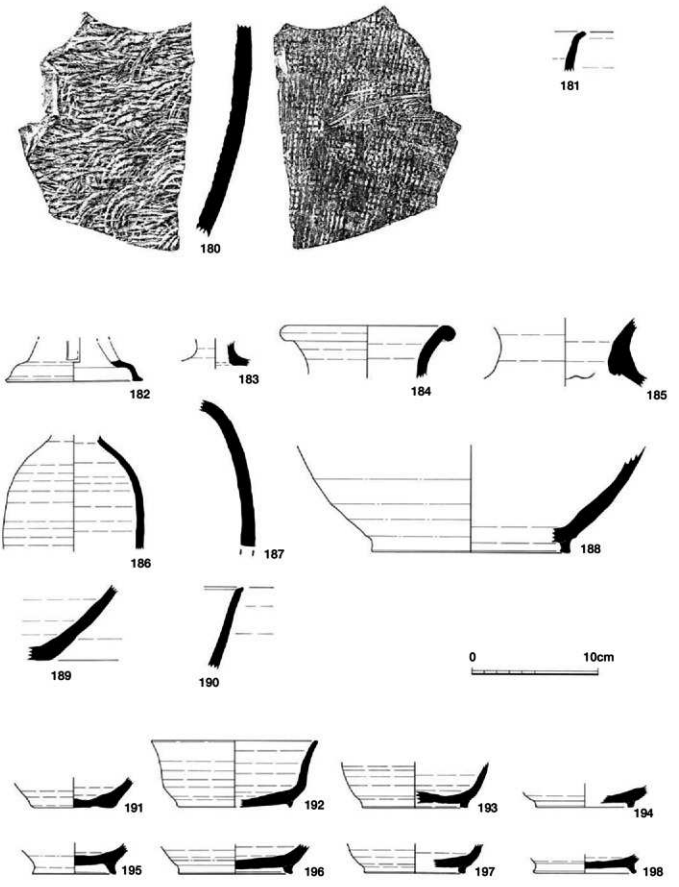
第40図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図②（S=1/4）

②須恵器（第41・42・43図）

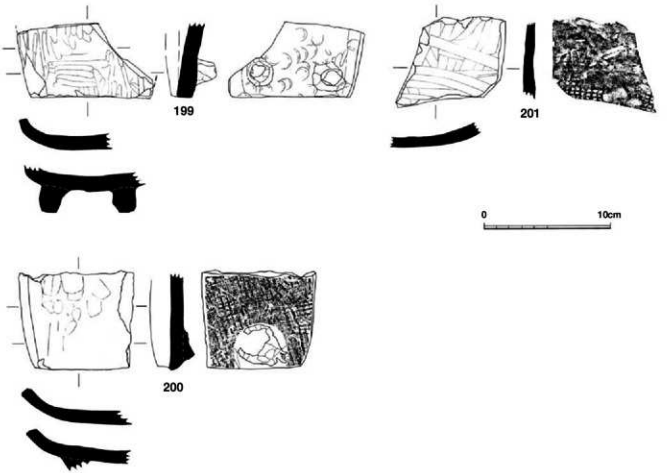
162～169は坏蓋である。162は口縁部が垂直気味に立ち上がり口縁端部に段を有す。また、天井部と口縁部との境に庇状の突出部をもつ。163も庇状の突出部をもつが退化気味で、体部は内湾気味に立ち上がる。164は天井部と口縁部の境が不明瞭で、天井部に回転ヘラ削りがみられる。165は丸い天井部から口縁部にかけてなだらかに内湾する。166～169はつまみをもつか欠損だと考えられ、166,167は返りをもつ。170,171は坏身である。170は底部に櫛歯状の工具痕が観察される。171は立ち上がりが短く内傾し、受け部の下部に明確な稜をもたず底部へつながる。172～174は脚部に三方透かしをもつ高坏である。175～181は甕である。175,176には櫛描波状文が施される。177,178は外面が平行タタキ、内面には同心円文当て具痕が観察される。179,180にも内面に同心円文当て具痕が観察されるが、外面はそれぞれ平行タタキ(179)、格子目タタキ(180)調整で、180は焼成不完全である。181は小型甕の口縁部と思われる。182～189は壺である。182は四方透かしをもつ壺の脚台と思われる。183は古墳時代後期の長頸壺の頸部と思われる。184～189は古代の壺か。190は鉢で、内外とも回転ナデ調整である。191は坏である。底部はヘラ切りで古墳時代後期のものと思われる。192～198はすべて古代のものと思われる高台付坏で、高台内は回転ヘラ起こし調整である。199～200は風字硯である。海部を欠いており墨痕は確認できないが、硯面が前方（海部）に傾斜するよう硯背後方部に二脚を設けている。両側縁端部は面取されており、硯尻から外湾するように開くと思われる。硯面はいずれも削りによる調整を施している。199の硯背には指頭痕が明瞭に残るのに対し、200は格子目タタキ調整である。201は四方が欠損しているが、上面が磨り面の様相をもつことや、200と器形や調整の仕方がよく似ていることから風字硯の可能性が高い。



第41図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図③（S=1/3）



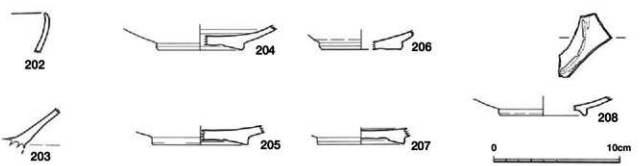
第42図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図④（S=1/3）



第43図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図⑤（S=1/3）

③陶磁器（第44図）

202,203は越州窯系青磁の小坏・碗である。胎土に微細な黒色粒子を少量含むが非常に精良である。202は内湾する口縁部をもつ。口縁に比べ体部の施釉が薄くなる傾向がみられる。203は口縁部と高台下部が失われているが体部外面に施釉以前の回転ナデ調整がみられる。204～207は緑釉陶器の皿である。露胎はない。畳付幅は13～16mmと広く、高台内面はヘラ切りで丁寧に仕上げられている。208は灰釉陶器の皿である。高台内面は露胎で、見込みに重ね焼きの痕跡であろう別個体の畳付跡が観察される。



第44図　その他の遺物（古墳時代～古代）実測図⑥（S=1/3）

④ 土錘（第45図）

包含層中出土の土錘は時期比定が困難であるため、ここで一括して取り扱う。総数368点出土しており、そのうち101点を図化した。すべて土師質で筒状をしたものである。まず、重量によりⅠ類（大型品）とⅡ類（中型～小型品）に分け、次に、形態や調整によりさらに細分化した

Ⅰ類：大型品＜重量が20ｇ以上＞

A：胴部中央部がふくらみ両端がすぼむ。（209～215）

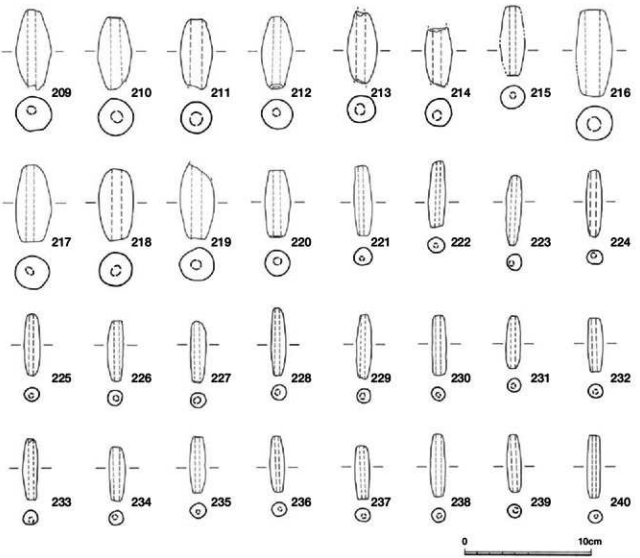
B：胴部があまりふくらまず両端は平坦に仕上げられている。（216～220）

Ⅱ類：中型～小型品＜重量が20ｇ以下＞

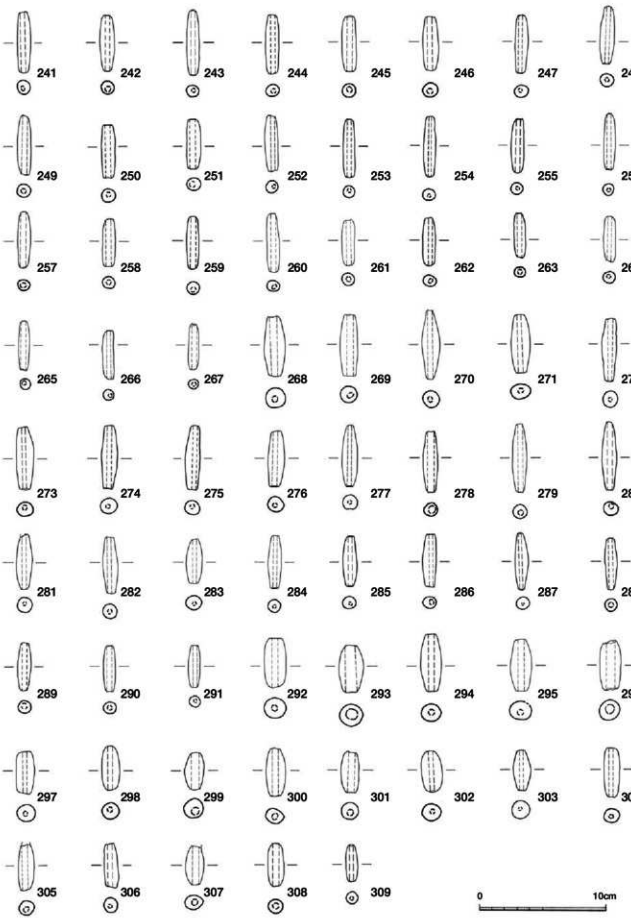
A：胴部があまりふくらまず、細長いタイプで小型である。（221～267）

B：中央部に最大径をもち、両端がすぼむ。両端の仕上げは粗いものが多い。（268～291）

C：大型品ではないが胴が肉厚で、長さの割に重量がある。（292～309）



第45図　土錘実測図①（S=1/3）



第46図　土錘実測図②（S=1/3）

第３表　竹淵Ｃ遺跡竪穴住居跡計測表

単位（規模:m、床面積㎡）

住居番号	位　置	方位	切り合い等	形　態	規模:長軸×短軸×（現存壁高）	床面積	ピット	竈	土器埋設炉	時　期
SA1	C−2・3グリッド	不明確	−	不明確	不明確	不明確	2	−	−	6〜7C代か
SA2	C−2グリッド	N1°W	−	隅丸方形	3.66×3.59×（0.06〜0.14）	13.44	6	△	−	7C前葉(TK217)
SA3	C−2・3グリッド	N5°W	SA4・5より古	隅丸方形	不明確	不明確	0	−	−	6C中葉(TK10)
SA4	B・C−2・3グリッド	N15°W	SA5より古 SA3より新	隅丸方形	4.35×3.95×?	不明確	2	○	−	7C前葉
SA5	B・C−2・3グリッド	N6°W	SA3・4より新	隅丸方形	4.79×不明確×（0.12〜0.16）	不明確	6	△	−	7C前葉(TK217)
SA6	C・D−2・3グリッド	不明確	SA7より古	方形	不明確	不明確	4	−	○	6C後葉か
SA7	C・D−3グリッド	N25°W	SA6・8より新	方形	2.86×2.77×（0.08〜0.12）	7.58	4	−	−	6C後葉か
SA8	C−3グリッド	不明確	SA7・10より古	不明確	不明確	不明確	0	−	−	6C前葉から中葉か
SA9	B・C−3・4グリッド	N22°W	−	方形	4.87×4.77×（0.09〜0.18）	22.79	4	○	−	7C前葉（TK217）
SA10	C−3・4グリッド	N15°W	SA8・11・12より新	隅丸方形	4.74×3.73×（0.03〜0.16）	18.16	4	−	−	7C前葉
SA11	C・D−3グリッド	不明確	SA10・12・13・18より古	不明確	不明確	不明確	1	−	−	6C前葉から中葉か
SA12	C・D−3・4グリッド	不明確	SA10・18より古 SA11より新	方形	3.72×?×?	不明確	4	−	○	6C後葉
SA13	C・D−3グリッド	N9°W	SA8・11より新	隅丸方形	3.83×3.71×（0.05〜0.16）	13.39	4	−	−	6C後葉
SA14	B・C−4グリッド	N3°W	−	方形	4.99×?×(0.09〜0.19)	不明確	0	−	−	8C（MT21）
SA15	C−4グリッド	N1°E	SA16より古	方形	4.09×3.16×（0.10〜0.14）	12.25	1	−	−	5C代か
SA16	C−4グリッド	N29°W	SA15より新	方形	4.20×4.03×（0.05〜0.09）	17.31	5	△	−	8C（MT21）
SA17	D−3グリッド	N38°E	SA18より新	不明確	不明確	不明確	0	○	−	8C（MT21）
SA18	D−3・4グリッド	N12°W	SA11・12・24より新 SA17・23より古	方形	5.05×4.74×（0.08〜0.22）	21.79	5	−	−	7C前葉（TK209）
SA19	D−4グリッド	不明確	SA20より新	不明確	不明確	不明確	0	○	−	8C代か
SA20	C・D−4グリッド	N12°W	SA19より古	隅丸方形	4.76×4.11×（0.14〜0.22）	18.44	4	−	○	8C（MT21）
SA21	D・E−3・4グリッド	不明確	SA22・24より古	不明確	不明確	不明確	0	−	−	5C中葉
SA22	D−4グリッド	不明確	SA23より古 SA21より新	不明確	不明確	不明確	0	−	○	7C後葉〜8C前葉
SA23	D−4グリッド	N9°W	SA18・22より新	隅丸方形	2.35×2.16×（0.10〜0.14）	4.63	0	−	○	8C（MT21）
SA24	D−3・4グリッド	不明確	SA21より古	不明確	不明確	不明確	0	−	○	7C前葉（TK209）
SA25	C・D−5グリッド	N10°E	竪穴状遺構より古	方形	4.97×4.73×（0.06〜0.19）	21.91	5	−	−	5C後葉〜6C前葉（TK23TK47）
SA26	D−5グリッド	N19°W	−	隅丸方形	3.97×3.56×（0.05〜0.09）	13.39	3	△	−	5C後葉か
SA27	C・D−5・6グリッド	N2°W	−	隅丸方形	3.96×3.89×?	13.8	0	−	−	5C中葉〜後葉（TK208TK23）
SA28	E−6グリッド	不明確	−	不明確	不明確	不明確	0	−	−	5C後葉〜6C前葉（TK47）
SA29	E−6グリッド	不明確	−	不明確	不明確	不明確	0	−	−	5C後葉〜6C前葉（TK47）

第４表　竹淵Ｃ遺跡出土土器（古墳時代～古代）観察表①

遺物番号	種別	器種 部位	出土場所	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
22	土師器	甕 口縁部～胴部	SA2	(13.2)	－	－	一部工具痕　ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	2mm程の茶・黒粒 1mm以下の茶・黒粒	内面に粘土のつなぎ目 一部黒変
23	土師器	甕 口縁部～頸部	SA2	－	－	－	ヨコナデ　縦方向の工具ナデ後ヨコナデ	斜方向のナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (7.5YR6/4)	良好	5mm以下の灰褐色粒	外面に黒変
24	土師器	甕 口縁部～胴部	SA2	－	－	－	ナデ　風化著しい　胎土の砂粒露出	ナデ　風化著しい	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	5mm以下の褐灰色粒	内面に黒変
25	土師器	甕 口縁部～胴部	SA2	(17.5)	－	－	ヨコナデ　ナデ	ナデ	橙 (5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	1mm～2mmの茶・褐・灰粒	外面に粘土のつなぎ目
26	土師器	埦 口縁部～底部	SA2	13.4	－	4.3	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	2mm以下の茶褐色粒	外面に黒変
27	土師器	支脚	SA2	5.5	5.5	8.4	ナデ	－	浅黄橙 (10YR8/3)	－	良好	きめ細やか	外面に黒変
28	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	SA2	(10.5)	－	3.6	回転ヘラ削り後ナデ　回転ナデ	不定方向のナデ　回転ナデ	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	2mm以下の白色粒	
29	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	SA2	(15.0)	－	3.3	回転ヘラ削り　回転ナデ	不定方向のナデ　回転ナデ	灰 (7.5Y/6/1)	灰 (7.5Y/6/1)	堅緻	1mm以下の黒色・白色粒	
30	須恵器	坏身 口縁部	SA2	－	－	－	回転ナデ　自然釉	回転ナデ	灰白 (N7/)	灰白 (N7/)	堅緻	1mm以下の黒色・白色粒	
31	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	SA3	14.9	－	4.7	回転ヘラ削り　回転ナデ　自然釉	不定方向のナデ　回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	2mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	
32	土師器	埦 口縁部～底部	SA4	16.2	－	6.5	口唇部ナデ　胴部工具痕　ヘラ状工具で調整した後ミガキ	ミガキ	淡赤橙 (2.5YR7/4)	橙 (2.5YR6/6)	良好	1mm以下の透明光沢粒	内外面に丹塗り 外面に黒変
33	土師器	埦 口縁部～底部	SA4	(15.0)	－	6.5	ミガキと思われるが風化のため単位不明	ミガキ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	1～2mmの黒茶の粒	外面に一部黒変
34	土師器	埦 口縁部～底部	SA4	14.1	－	6.7	ミガキ　底部もミガキと思われるが単位不明	ミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	1～2mmの黒茶の粒	外面に一部黒変　丹塗りか？
35	土師器	高坏 脚部	SA4	－	10.4	－	指ナデの後縦方向の工具ナデ　一部縦方向の工具ナデ	工具痕	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm～3mmの茶・褐・黒粒	
36	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	SA4	(11.6)	－	(3.7)	回転ヘラ削り　回転ナデ　自然釉	不定方向のナデ　回転ナデ	黄白～紫灰 (2.5Y6/1))	黄白～紫灰 (2.5Y6/1))	堅緻	1mm以下の白色粒	
37	土師器	坏 口縁部～胴部	SA5	(22.0)	－	－	ミガキ	ミガキ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm以下の透明・赤褐色・黒色光沢粒	
38	須恵器	坏蓋 天井部	SA5	－	－	－	回転ヘラ削り後ナデ　回転ナデ	回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の黒色・白色粒	
39	須恵器	坏蓋 口縁部	SA5	－	－	－	回転ナデ　回転ヘラ削り　自然釉	回転ナデ	灰 (5Y6/1)	灰白 (5Y7/1)	堅緻	1mm以下の白色粒 2mm以下の黒色粒	
40	土師器	甕 頸部～底部	SA6	－	－	－	ナデ	横方向の工具ナデ	明黄褐 (10YR6/6)	明黄褐 (10YR6/6)	良好	5mm以下のにぶい赤褐色粒	土器埋設炉土器 外面に黒変
41	須恵器	坏身 口縁部～底部	SA6	(15.6)	－	5.5	回転ナデ　回転ヘラ削り	回転ナデ　不定方向のナデ	褐灰 (10YR4/1)	灰黄褐 (10YR4/2)	焼成不完全（生焼け）	3mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	風化激しい　黒斑
42	土師器	甕 口縁部	SA7	－	－	－	横方向のナデ　ナデ	横方向のナデ　ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	5mm程の褐灰・明赤褐色粒	内面に粘土のつなぎ目
43	土師器	壺 胴部～底部	SA7	－	－	－	ナデと思われるが風化著しく不明	工具ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	7mm以下の褐灰・にぶい赤褐・灰褐・暗赤褐色粒	外面に一部スス付着か？
44	土師器	坏蓋 天井～口縁部	SA9	16.0	－	－	風化のため調整不明	ナデ	橙 5YR6/7)	橙 (5YR6/7)	良好	1mm程の茶・黒粒	
45	土師器	高坏の坏部 口縁部～胴部	SA9	14.5	－	－	ミガキと思われるが風化気味のため単位不明	ミガキ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	1mm程の灰粒	
46	土師器	高坏 脚部	SA9	－	－	－	ミガキ　工具ナデ	ミガキと思われるが風化著しい　ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR7/6)	良好	3mm以下の茶褐色粒	脚部の内面に粘土のつなぎ目
47	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	SA9	(11.8)	－	3.3	回転ヘラ削り後ナデ　回転ナデ	不定方向のナデ　回転ナデ	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	焼成歪み	1mm以下の黒色・白色粒	ヘラ記号「×」
48	須恵器	坏身 口縁部～底部	SA9	(12.7)	(4.5)	4.5	回転ナデ　回転ヘラ削り　自然釉	不定方向のナデ　回転ナデ　底部に工具痕	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	1mm以下の白色粒	ヘラ記号「／」
49	須恵器	𤭯 胴部	SA9	－	－	－	回転ナデ　回転ヘラ削り　連続刺突文　沈線２条	回転ナデ　ナデ	灰 (N6/)	灰白 (5Y7/1)	堅緻	2mm以下の白色粒	穿孔跡あり
52	土師器	甕 口縁部	SA10	－	－	－	指頭痕　横方向の工具ナデ	横・斜方向の工具ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	3.5mm以下の褐灰 黒褐・にぶい橙粒	
53	土師器	柄杓 受部	SA10	－	－	－	工具ナデ　ナデ	指頭痕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	4mm以下の橙・にぶい赤褐灰・黄灰粒	内外面に一部黒変 木の葉痕
56	土師器	甕 胴部～底部	SA12	－	－	－	ナデ	ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	7mm以下の灰白・褐灰・にぶい橙・にぶい黄橙色粒	土器埋設炉土器 粘土のつなぎ目
57	土師器	甕 口縁部	SA13	－	－	－	ナデ　工具痕	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	4mm以下の灰・灰黄褐 灰白粒	外面に一部黒変 内面には粘土のつなぎ目
58	土師器	高台付埦 底部	SA14	－	－	－	回転ナデ　貼付高台	回転ナデ　工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2mm以下の灰褐・赤褐粒	外面に粘土のつなぎ目やかぶりが見られる
59	須恵器	長頸壺 胴部	SA14	－	－	－	回転ナデ　自然釉	回転ナデ	オリーブ褐～灰 (2.5Y4/4)	暗灰 (N3/)	堅緻	1mm以下のにぶい明黄褐色粒	
60	須恵器	甕 胴部	SA14	－	－	－	平行タタキ	同心円当て具痕	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/8)	焼成不完全（生焼け）	1mm以下の明赤褐色粒	傾き・上下不明
61	土師器	甕 口縁部	SA15	(14.2)	－	－	ナデ　風化気味	斜・横方向の工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	4mm以下の灰褐・褐灰 黒色粒	
62	土師器	甕 頸部～胴部	SA16	－	－	－	ナデの後　横・斜方向の工具ナデ	斜方向の工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	6mm以下の灰赤・灰褐・赤褐・明赤褐・灰色粒	外面に粘土のつなぎ目
63	土師器	坏 口縁部～底部	SA16	16.7	8.6	6.0	回転ナデ　底部付近は回転ヘラ起こし	回転ナデ　不定方向のナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	2mm以下の金色光沢・乳白色光沢粒	内面に炭化物付着
64	土師器	坏 口縁部～底部	SA16	18.2	－	4.2	回転ナデの後暗文	回転ナデの後暗文	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm以下の透明・乳白色光沢粒	
65	土師器	埦 口縁部～体部	SA16	－	－	－	ヨコナデ　口縁部は横方向のミガキ	横方向のミガキ	橙 (7.5YR6/6)	黒 (7.5YR2/1)	良好	2mm以下の褐灰色・灰褐色粒	内黒土器
66	土師器	高台付埦 底部	SA16	－	(10.9)	－	ナデ	不定方向のナデ　回転ナデ	浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	良好	2mm以下の灰・黄灰色粒	外面に貼付高台 内面には黒変
67	土師器	支脚	SA16	4.1	－	4.2	線刻　指頭痕　工具ナデ	－	橙 (5YR6/6)	－	良好	5mm以下の褐灰色粒	
68	須恵器	坏蓋 つまみ～口縁部	SA16	16.7	－	3.7	回転ヘラ削り　回転ナデ　ナデ	回転ナデ　不定方向のナデ	橙 (5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	焼成不完全（生焼け）	1mm以下の明赤褐色粒	風化激しい
69	須恵器	高台付坏 底部	SA16	－	8.4	－	回転ナデ　貼付高台　ナデ	回転ナデ　不定方向のナデ	灰黄褐～浅黄 (10Y5/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	焼成不完全（やや生焼け）	1mm以下のにぶい明褐色粒	
71	土師器	甕 口縁部～胴部	SA17	(27.0)	－	－	工具ナデ　ナデ	斜・横方向の工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	5mm以下の灰黄褐・灰白褐・にぶい赤褐・黒褐色粒	外面に粘土のつなぎ目
72	土師器	埦 口縁部～底部	SA17	16.4	－	9.6	ヨコナデ　工具ナデ（縦横-斜）後ヘラミガキ	ミガキ	明褐 (7.5YR5/6)	明褐 (7.5YR5/6)	良好	5.5mm以下の褐色粒	外面に部分的に黒変　風化
73	土師器	支脚	SA17	4.8	－	9.1	ナデ　指頭痕	－	にぶい橙 (7.5YR7/4)	－	良好	1mm以下の茶黒粒	一部黒変

第５表　竹淵Ｃ遺跡出土土器（古墳時代～古代）観察表②

遺物番号	種別	器種 部位	出土場所	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	焼成	胎土の特徴	備考
74	土師器	支脚	SA17	4.3	－	8.8	指頭痕　工具痕　ナデ	－	にぶい黄橙(10YR7/3)	－	良好	1mm以下の茶黒粒	粘土のよれが見られる　一部黒変
75	須恵器	坏蓋 完形	SA17	13.7	－	2.0	回転ヘラ削り　回転ナデ　自然釉	不定方向のナデ　回転ナデ　自然釉	灰～淡黄(N6／)	灰～暗灰黄(6N／)	堅緻	1mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	転用硯の可能性有り
76	須恵器	甕 胴部	SA17	－	－	－	平行タタキ	平行当て具痕　ナデ	灰(N4/)	灰(N5/)	堅緻	1mm以下の白色粒	傾き・上下不明
77	土師器	甕 口縁部～胴部	SA18	(14.0)	－	－	工具ナデ　風化摩耗	横・斜方向の工具ナデ　風化摩耗	にぶい黄褐(10YR5/3)	灰黄褐(10YR5/2)	良好	4.5mm以下の灰白・褐　褐灰色粒	内外面に黒変
78	須恵器	坏身 口縁部～底部	SA18	12.8		3.8	回転ナデ　回転ヘラ削り	回転ナデ　不定方向のナデ	灰(7.5Y/6/1)	灰(7.5Y/6/1)	焼成歪み	1mm以下の白色粒 2mm以下の黒色粒	
79	土師器	甕 口縁部	SA19	(14.2)	－	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	4mm以下の灰黄褐色粒	内外面に粘土のつなぎ目
80	土師器	甕 胴部～底部	SA20	－	－	－	ナデ　ハケ目	ナデ　指頭痕	明赤褐(2.5YR5/6)	橙(.5YR6/6)	良好	6mm以下の灰白・灰色粒	土器埋設炉土器
81	土師器	甕 口縁部～胴部	SA21	(24.5)	－	－	横・斜方向の工具ナデ　刻目突帯文	横・斜方向の工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	4.5mm以下の赤褐・灰褐・にぶい褐・灰白色粒	床下出土　外面に黒変
82	土師器	甕 口縁部～胴部	SA21	16.3	－	－	横方向のナデ　ナデ　一部工具ナデ　刻目突帯文	工具ナデ　ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/3)	良好	5mm以下の赤褐・褐灰・灰白・灰色粒	床下出土 内面胴部に粘土のつなぎ目
83	土師器	甕 口縁部～胴部	SA21	(23.6)	－	－	平行タタキ　ヨコナデ	タタキの上をヨコナデ　ナデ　摩耗著しい	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	6mm以下の灰褐・褐灰　明褐灰色粒	粘土のつなぎ目
84	土師器	甕 口縁部～胴部	SA21	－	－	－	工具ナデ　縦刷	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	5mm以下の灰・赤褐・赤灰色粒	内面に粘土のつなぎ目
85	土師器	甕 底部	SA21	－	(6.9)	－	ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	3mm以下の褐色・褐灰色粒	木の葉痕
86	土師器	甑 底部	SA21	－	－	－	平行タタキ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	良好	5mm以下の褐灰・灰褐色粒	内面に部分的に黒変
87	土師器	高坏 坏部	SA21	(25.0)	－	－	ヨコナデ　回転ナデ　工具ナデ	ヨコナデ　回転ナデ　ナデ	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/4)	良好	1mm以下の透明光沢粒	坏部に接合面
88	土師器	甕 胴部	SA22	－	－	－	縦・斜方向のハケ目	ナデ　指頭痕	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	5mm以下の灰白・灰黄褐　にぶい黄橙色粒	土器埋設炉土器　外面に黒変
89	土師器	甕 胴部	SA23	－	－	－	ハケ目	ナデ　指頭痕	橙(.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	4mm以下の灰白・灰色粒	土器埋設炉内土器　外面に黒変
90	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	SA23	(13.6)	－	－	回転ヘラ削り　回転ナデ	回転ナデ	灰黄～黄灰(2.5Y7/2)	浅黄(2.5Y7/3)	焼成不完全（生焼け）	1mm以下の明赤褐色粒	
91	土師器	甕 胴部～底部	SA24	－	7.4	－	縦・斜方向の工具ナデ	板状工具によるナデだが調整痕　指ナデ　指頭痕	浅黄橙(7.5YR8/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	6mm以下の赤褐・褐灰　黒・にぶい褐・灰白色粒	土器埋設炉内土器　黒変　粘土のつなぎ目
92	須恵器	高坏 坏底部	SA24	－	－	－	回転ヘラ削り　ナデ	回転ナデ　ナデ	暗青灰(5PB4/1)	青灰(5PB5/1)	堅緻	1mm以下の白色粒	
93	土師器	甕 口縁部～胴部	SA25	18.4	－	20.3	ヨコナデ　斜方向の工具ナデ	ヨコナデ　工具ナデ　指頭痕	にぶい黄橙(10YR7/4)	明黄褐(10YR7/6)	良好	3.5mm以下のにぶい赤褐　黒褐・褐・橙・褐灰色粒	
94	土師器	甕 口縁部～底部	SA25	(18.8)	－	(20.3)	ヨコナデ　横・斜方向の工具ナデ　一部風化のため単位不明	ヨコナデ　横・斜方向の工具ナデ　指頭痕	にぶい黄橙(10YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	良好	4mm以下の灰褐・にぶい褐・灰白・褐灰色粒	内外面とも黒変
95	土師器	壺 口縁部～頸部	SA25	(11.2)	－	－	横方向の工具ナデ　貼付刻目突帯文　ナデ	横・斜方向の工具ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	1mm以下の金色光沢粒 3mm以下の灰褐色粒	
96	土師器	壺 口縁部～頸部	SA25	9.6	－	－	ヨコナデ　工具ナデ	ヨコナデ　工具ナデ	灰白(7.5YR8/2)	浅黄橙(7.5YR8/4)	良好	1mm以下の半透明光沢粒	頸部に接合面
97	土師器	高坏 口縁部～裾部	SA25	24.6	16.0	17.2	ヨコナデ　斜め方向のナデ　指頭痕	ヨコナデ　ナデ　縦方向の工具による粗なナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	2mm以下の褐灰色粒	脚部外面に粘土の凹凸がナデ消されずに少し残る
98	土師器	高坏 口縁部～裾部	SA25	15.3	9.1	11.5	ヨコナデ　横・斜方向の工具ナデ　工具ナデ後ナデ	ヨコナデ　横方向の工具ナデ　風化	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	4mm以下のにぶい褐色粒	
99	土師器	高坏 基部～脚裾部	SA25	－	12.5	－	丁寧なナデ	ナデ　横方向の工具ナデ　絞り　指頭痕	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(7.5YR8/3)	良好	2mm以下の赤褐・灰の粒	脚部外面に一部炭化物付着
100	土師器	鉢 口縁部～底部	SA25	(7.8)	5.1	10.4	ヨコナデ　斜方向の工具ナデ　指頭痕	ヨコナデ　斜方向の工具ナデ	明褐色(7.5YR5/6)	明褐色(7.5YR5/6)	良好	3mm以下の褐灰色・灰褐色粒	内外面とも黒変
101	土師器	鉢 口縁部～底部	SA25	13.1	－	9.3	ヨコナデ　縦・横・斜方向のミガキ	ミガキと思われるが風化が激しい	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	2.5mmの褐色粒が見えるが精良	内外面とも黒変
102	須恵器	甕 胴部	SA25	－	－	－	平行タタキ	同心円当て具痕	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	堅緻	1mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	同心円状に残る打撃痕
103	須恵器	[illegible] 口縁部	SA25	(8.7)	－	－	回転ナデ　沈線　櫛描波状文	回転ナデ　自然釉	暗青灰(5PB4/1)	暗青灰～灰白(5PB4/1)	堅緻	1mm以下の白色粒	
107	土師器	甕 口縁部～底部	SA27	(16.3)	－	26.0	底部付近はタタキが交差する	ヨコナデ　斜め方向の工具ナデ　指頭痕	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐(10YR5/3)	良好	3mm以下のにぶい黄褐色粒	外面に黒変　内面に粘土のつなぎ目
108	土師器	甕 口縁部～胴部	SA27	(19.8)	－	－	ヨコナデ後斜方向の工具ナデ　横・斜の平行タタキ	工具ナデ　ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	良好	3mm以下の灰赤褐色粒	外面一部黒変
109	土師器	甕 底部	SA27	－	(5.0)	－	横と斜の平行タタキ	工具ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	良好	3mm以下の灰赤褐色粒	内外面に黒変
110	土師器	甕 口縁部～胴部	SA27	(20.8)	－	－	斜方向に平行タタキ後ナデ　胴部は斜・横方向にタタキ	斜方向のタタキ痕　工具ナデ	にぶい橙(5YR4/6)	にぶい橙(5YR4/6)	良好	3mm以下の褐灰色粒	外面に黒変
111	土師器	甕 口縁部～胴部	SA27	(15.0)	－	－	ヨコナデ　斜方向の平行タタキ	斜方向の工具ナデ	赤褐(5YR4/8)	明赤褐(5YR5/8)	良好	3mm以下の赤褐色粒	外面に黒変
112	土師器	甕 口縁部～胴部	SA27	(23.0)	－	－	ヨコナデ　ハケ目後ヨコナデ　斜方向の平行タタキ	斜・横方向のハケ目	明赤褐(5YR5/6)	橙(5YR6/6)	良好	4mm以下のにぶい赤褐色粒	外面に黒変
113	土師器	甕 胴部～底部	SA27	－	－	－	平行タタキ	縦と斜方向の工具ナデ　指頭痕	にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	良好	4mm以下のにぶい褐・灰　にぶい赤褐・暗灰粒	内面が一部黒変
114	土師器	壺 口縁部～底部	SA27	－	－	－	タタキ後ナデ　横・斜・縦方向の平行タタキ	横と斜方向の工具ナデ	橙(5YR7/6)	浅黄(2.5Y8/4)	良好	3mm以下の褐・赤褐色　灰粒	外面黒変　頸部内面に接合時の粘土のたるみ
115	土師器	壺 口縁部～底部	SA27	(8.6)	4.5	7.5	風化著しく調整不明　底部に充填痕？	胴部は調整痕	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	良好	1mm以下の透明光沢粒	内外面に粘土のつなぎ目　木の葉痕　内外面に黒変
116	土師器	高坏 口縁部～裾部	SA27	20.2	(12.0)	14.4	ナデ	斜方向の工具ナデ　絞り痕　ナデ	橙(7..5YR7/6)	橙(.5YR7/6)	良好	1.5mm以下のにぶい橙　灰白・赤褐色粒	
117	土師器	高坏 坏部～裾部	SA27	－	11.8	－	風化著しく調整不明　ヨコナデ	風化著しく調整不明　粘土の絞り目痕　充填の調整が粗	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	精良	
118	土師器	高坏 脚部	SA27	－	11.9	－	丁寧なナデ	ナデ　粘土の絞り痕	浅黄橙(7.5YR8/6)	明黄褐(10YR7/6)	良好	1mm以下の褐・赤褐・浅黄橙・無色透明光沢粒	
119	土師器	[illegible] 口縁部～胴部	SA27	(13.8)	－	－	ヨコナデ　丁寧なナデ	ヨコナデ　丁寧なナデ	にぶい橙(　7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	2mm以下の灰褐色粒	
120	須恵器	坏身 完形	SA27	10.8	－	5.3	回転ナデ　回転ヘラ削り　記号状刻印「×」　自然釉　疑似突帯	回転ナデ　ナデ　自然釉	灰(N5/)	灰(10Y5/1)	堅緻	1mm以下の白色粒	ヘラ記号「×」　石の動いた跡
123	土師器	甕 口縁～底部	SA29	(28.6)	－	－	ヨコナデ　ナデ	横方向のナデ後　斜方向の工具ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	3mm以下の乳白色・灰色粒	外面全体的に黒変　内面胴部に砂粒の動き
124	土師器	甕 口縁～底部	SA29	(25.4)	2.6	26.5	斜方向の工具ナデ　下から上への工具ナデ　ナデ	横方向のナデ　ナデ　指頭痕	にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(.5YR6/6)	良好	3mm以下のにぶい橙・褐灰色粒	外面に黒変　粘土のかぶり　平底
125	土師器	甕 口縁部～胴部	SA29	(23.0)	－	－	ヨコナデ　工具ナデ　貼付刻目突帯	工具ナデ　ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	良好	5mm以下の茶・灰色粒 2mm以下の白色粒	

第６表　竹淵Ｃ遺跡出土土器（古墳時代～古代）観察表③

遺物番号	種別	器種 部位	出土場所	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	焼成	胎土の特徴	備考
126	土師器	甕 口縁部～底部	SA29	13.8	－	－	ナデ	横方向のナデ　ハケ目	にぶい橙 (5YR 7/3)	にぶい橙 (5YR 7/4)	良好	4mm以下の茶色粒　3mm以下の灰白・灰・黒色粒	粗製 外面に黒変
127	土師器	壺 口縁部～胴部	SA29	7.5	－	7.7	ヨコナデ　調整不明	ヨコナデ　ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	1mm以下の茶，灰白粒	外面に一部黒変　丸底
128	土師器	甑 把手	SA29	－	－	－	ナデ　指頭痕	－	淡橙 (5YR8/4)	－	良好	3mm以下の茶・黒褐色，乳白色粒	
129	土師器	高坏 坏底部～脚部	SA29	－	11.8	－	風化著しいため調整不明	風化著しいため調整不明　粘土の絞り痕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	きめ細か	
130	土師器	高坏 基部～脚部	SA29	－	(13.6)	－	丁寧なナデ　ヨコナデ	丁寧なナデ　工具による横方向の粗いナデ　粘土の絞り痕	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	きめ細か	
131	須恵器	有蓋高坏の蓋 つまみ～口縁部	SA29	13.2	－	5.3	回転ヘラ削り　回転ナデ　自然釉	不定方向のナデ　回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (N5/)	堅緻	1mm以下の白色粒	口縁端部に段　皿状の突出部　つまみは扁平
135	土師器	甕 口縁部～底部	Ⅱ層	22.3	4.2	27.8	工具ナデ　タタキ後工具ナデ　ナデ	横方向の工具ナデ　工具ナデだが単位不明　指押え	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	4mm以下の褐色粒	内外面に黒変
136	土師器	甕 口縁部～底部	Ⅱ層	23.8	4.1	26.1	ヨコナデ　斜方向のナデ　斜方向の平行タタキ	横・斜方向の工具ナデ　一部風化していて工具単位不明	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	3mm以下のにぶい赤褐色粒	
137	土師器	甕 口縁部～底部	SH799	(21.2)	－	26.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	4mm以下の灰・茶色粒	外面に黒変
138	土師器	甕 口縁部～底部	Ⅱ層	(15.4)	－	16.8	ヨコナデ　斜方向の工具ナデ	斜方向のナデ後　横・斜方向の工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	2mm以下の褐色，褐灰，灰白色粒	外面にスス付着　黒変
139	土師器	甕 口縁部～胴部	SA28	(13.8)	－	－	ナデ　斜方向の工具ナデ	ナデ　横・斜方向の工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	2.5mm以下の褐灰，灰黄褐粒	外面に黒変
140	土師器	甕 胴部	Ⅱ層	－	－	－	斜方向のハケ目	ナデ　指頭痕	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	5mm以下の灰白粒	
141	土師器	甕 胴部	Ⅱ層	－	－	－	横方向のナデ　一部斜方向のハケ目	下から上へのナデあげ	にぶい橙 (2.5YR5/4)	橙 (5YR6/6)	良好	3mm以下の灰白・茶粒	外面にスス付着　内面に砂粒の動き
142	土師器	甕 底部	石積	－	(11.0)	－	ナデ	ナデ	灰 (5Y6/1)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	4mm以下の茶色粒 3mm以下の灰・茶褐色粒	木の葉痕　粘土のつなぎ目
143	土師器	甑 把手	石積	－	－	－	ナデ　指頭痕	－	にぶい黄橙 (10YR7/4)	－	良好	6mm以下の茶粒，5mm以下の灰，灰白粒	粘土のよれ
144	土師器	甑 胴部～底部	石積	－	(10.2)	－	横と斜方向の工具ナデ　工具ナデ後　ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	1mm～4mm以下の灰白色粒	
145	土師器	壺 口縁部～底部	Ⅱ層	8.8	4.5	9.3	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	きめ細か	外面全体の1/4黒変 底部にわずかに段差あり
146	土師器	高坏 口縁部～脚部	Ⅰ層	(20.4)	(11.8)	－	ヨコナデ　丁寧なナデ	指ナデ　指頭痕　一部丁寧なナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/8)	良好	1mm以下の透明の粒	脚部内面に粘土のよれ
147	土師器	高坏 口縁部～基部	Ⅱ層	(17.5)	－	－	風化激しいがミガキか？　充填	風化激しいがミガキか？	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1mm以下の無色透明粒	
148	土師器	埦 口縁部～底部	Ⅱ層	(13.0)	6.2	6.6	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	きめ細か	
149	土師器	埦 口縁部～底部	Ⅱ層	(6.7)	(2.7)	4.9	丁寧なヨコナデ　ミガキ　線刻	ミガキではあるが単位不明	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	良好	きめ細か	
150	土師器	坏 口縁部～底部	石積	(14.0)	7.7	4.2	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　仕上げナデ	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	きめ細か	板目圧痕
151	土師器	坏 口縁部～底部	石積	13.9	7.1	4.1	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　指ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	良好	きめ細か	
152	土師器	坏 体部～底部	石積	－	(6.7)	－	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	1mm以下の黒色光沢粒	板目圧痕　粘土のつなぎ目
153	土師器	坏 口縁部～底部	Ⅱ層	13.0	8.1	3.6	ナデ　回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	きめ細か	
154	土師器	高台付埦 口縁部～底部	石積	13.9	7.2	5.7	回転ナデ	回転ナデ　底部に指頭痕	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	1mm～5mm茶色粒 2mm以下の灰白粒	貼付高台
155	土師器	高台付埦 体部～底部	石積	－	(6.0)	－	横方向のナデ	ナデ　底部に花弁状のヘラ状工具痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1mm～2mmの茶色粒	貼付高台　外面に黒変
156	土師器	高台付埦 底部	石積	－	(7.8)	－	ナデ	風化著しい為調整不明　底部はナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	2mm以下の茶の粒・微細な無色透明粒	貼付高台
157	土師器	皿 胴部～底部	石積	－	(12.8)	－	回転ナデ	風化著しく調整不明	淡橙 (5YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	きめ細か	
158	土師器	鉢 口縁部～胴部	Ⅱ層	(11.3)	－	－	ヨコナデ　ナデ	工具ナデ　ナデ	灰褐 (7.5YR6/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	3mm～6mm程の褐灰・黒褐・にぶい褐粒	粗製　内面に粘土のつなぎ目
159	土師器	鉢 口縁部～胴部	石積	－	－	－	ナデ	布目圧痕	橙 (5YR7/6)	橙 (2.5YR6/6)	良好	6mm以下の橙の粒	製塩土器
160	土師器	鉢 口縁部	Ⅱ層	－	－	－	ナデ	布目圧痕	橙 (2.5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	良好	4mm～5mm程の暗褐・黒褐色粒	製塩土器
161	土師器	鉢 胴部	石積	－	－	－	ナデ	布目圧痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	7mm以下の灰色粒	製塩土器
162	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	Ⅰ層	(13.4)	－	－	カキ目状の回転ナデ　回転ナデ	不定方向のナデ　回転ナデ	灰白 (7.5Y5/1)	灰白 (7.5Y5/1)	堅緻	1mm以下の明黄褐色粒	口縁端部に段を有す　皿状の突出部がまわる
163	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	SH412	(15.0)	－	－	回転ヘラ削り　回転ナデ　自然釉　風化	不定方向のナデ　回転ナデ	灰～暗緑灰 (N6/)	灰 (N5/)	堅緻	2mm以下の明黄褐色粒	皿状の突出部は退化気味
164	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	Ⅰ層	(13.7)	－	－	回転ヘラ削り　回転ナデ	不定方向のナデ　回転ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	2mm以下の白色粒	
165	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	Ⅱ層	12.0	5.4	4.1	回転ヘラ削り後ナデ　回転ナデ	回転ナデ	灰 (5Y5/1)	暗灰黄～黄灰 (2.5Y5/2)	堅緻	1mm以下の白色粒	
166	須恵器	坏蓋 つまみ～口縁部	Ⅰ層	(10.4)	－	3.8	回転ヘラ削り　回転ナデ	不定方向のナデ　回転ナデ	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	2mm以下の白色粒	
167	須恵器	坏蓋 天井～口縁部	石積	(9.0)	－	－	回転ヘラ削り　回転ナデ	不定方向のナデ　回転ナデ	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	堅緻	1mm以下の明黄褐色粒	
168	須恵器	坏蓋 つまみ～天井部	石積	－	－	－	回転ナデ　回転ヘラ削り	不定方向のナデ　回転ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黄灰 (2.5YR5/1)	焼成不完全（生焼け）	1mm以下の白色粒	内面に炭化物付着　転用硯の可能性
169	須恵器	坏蓋 つまみ～口縁部	SH656	(13.6)	－	3.3	回転ナデ　回転ヘラ削り	不定方向のナデ　回転ナデ	にぶい (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	焼成不完全（生焼け）	1mm以下の白色粒	
170	須恵器	坏身 完形	Ⅱ層	13.2	8.1	－	回転ナデ　回転ヘラ削り	回転ナデ　不定方向のナデ	灰 (10Y4/1)	黄灰 (2.5Y5/1)	堅緻	1mm以下の白色粒	底部に櫛歯状の工具痕
171	須恵器	坏身 口縁部	石積	(11.6)	－	－	回転ナデ	回転ナデ	灰～灰オリーブ (5Y5/1)	灰 (5Y 4/1)	堅緻	1mm以下の明黄褐色粒	
172	須恵器	有蓋高坏 坏部	Ⅱ層	10.7	－	－	回転ナデ　回転ヘラ削り	回転ナデ　不定方向のナデ	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	堅緻	2mm以下の白色粒	三方透かし
173	須恵器	高坏 脚部	石積	－	－	－	回転ナデ	絞り痕　回転ナデ	灰 (7.5Y/6/1)	灰 (7.5Y/6/1)	堅緻	1mm以下の明黄褐色粒	三方透かし
174	須恵器	高坏 脚部	石積	－	－	－	回転ナデ　自然釉	絞り痕　自然釉	暗灰 (N3/)	灰 (7.5Y/6/1)	堅緻	1mm以下の明黄褐色粒	三方透かし
175	須恵器	甕 口縁部	石積	(44.0)	－	－	回転ナデ　櫛描波状文は２段以上　鳥嘴突起帯　自然釉	回転ナデ	オリーブ黒 (5Y3/1)	灰オリーブ (5Y4/2)	堅緻	2mm以下の白色粒	

第７表　竹淵Ｃ遺跡出土土器（古墳時代～古代）観察表④

遺物番号	種別	器種 部位	出土場所	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	焼成	胎土の特徴	備考
176	須恵器	甕 頸部	Ⅰ層	－	－	－	回転ナデ　櫛描波状文　自然釉	回転ナデ　自然釉	灰 (N5/)	オリーブ灰 (GY6/1)	堅緻	2mm以下の白色粒	
177	須恵器	甕 口縁部～胴部	Ⅱ層	(20.7)	－	－	回転ナデ　格子目タタキ後ヨコナデ　縦方向の平行タタキの後カキ目　自然釉	回転ナデの後カキ目　同心円当て具痕　自然釉	オリーブ黄～オリーブ黒 (7.5Y3/2)	灰～灰オリーブ (7.5Y6/2)	堅緻	1mm以下の白色粒	
178	須恵器	甕 口縁部～胴部	Ⅱ層	(20.5)	－	－	回転ナデの後カキ目　縦方向の平行タタキ後カキ目	回転ナデ　同心円当て具痕　櫛状工具によるヘラ記号	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	3mm以下の黒色粒 1mm以下の浅黄色粒	
179	須恵器	甕 頸部	石積	－	－	－	回転ナデ　平行タタキ後回転ナデ	回転ナデ　同心円当て具痕	黒褐～暗灰黄 (2.5Y3/1)	暗灰黄～黒褐 (2.5Y5/2)	堅緻	1mm以下の黒色粒	
180	須恵器	甕 胴部	石積	－	－	－	回転ナデ　自然釉　格子目タタキ	同心円当て具痕	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄褐 (10YR6/4)	焼成不完全［生焼け］	1mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	
181	須恵器	甕 口縁部	Ⅱ層	－	－	－	回転ヘラ削り　回転ナデ	回転ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	1mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	
182	須恵器	台付長頸壺 脚部	石積	－	(10.8)	－	回転ナデ　自然釉	回転ナデ　自然釉	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	1mm以下の白色粒	四方透かし
183	須恵器	長頸壺 頸部	石積	－	－	－	回転ナデ　自然釉	回転ナデ　ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	褐灰 (10YR6/1)	堅緻	1mm以下の白色粒	頸部に接合痕
184	須恵器	壺 口縁部	石積	(12.5)	－	－	回転ナデ	回転ナデ	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	1mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	
185	須恵器	壺 頸部	石積	－	－	－	回転ナデ　自然釉	回転ナデ　自然釉	オリーブ黒 (7.5Y3/2)	灰 (7.5Y4/1)	堅緻	1mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	頸部に一部ふくらみ
186	須恵器	長頸壺 胴部	Ⅰ層	(11.0)	－	－	回転ナデ　自然釉	回転ナデ	灰白 (N7/)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	1mm以下の黒色粒	
187	須恵器	短頸壺 胴部	ＳＣ１	－	－	－	回転ナデ　自然釉　櫛描状の工具による連続ナデ	回転ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の白色粒	
188	須恵器	高台付短頸壺 胴部～底部	ＳＣ１	－	(15.7)	－	回転ヘラ削り　自然釉	横方向のナデ	灰 (5Y6/1)	灰 (N6/)	堅緻	2mm以下の白色粒 1mm以下の浅黄色粒	貼付高台
189	須恵器	壺 胴部～底部	Ⅰ層	－	(10.4)	－	回転ナデ	回転ナデ　不定方向のナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	1mm以下の明赤褐色粒	
190	須恵器	鉢 口縁部	SH341	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (5Y6/1)	堅緻	1mm以下の明赤褐色粒	
191	須恵器	坏 胴部～底部	石積	－	(6.2)	－	回転ヘラ削り　回転ナデ	回転ナデ　ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	灰 (5Y6/1)	堅緻	1mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	
192	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	Ⅰ層	(12.8)	(5.8)	8.8	回転ナデ　貼付高台　自然釉	回転ナデ　不定方向ナデ	褐灰～灰赤 (5YR4/1)	にぶい赤褐～暗灰黄(2.5YR5/4)	堅緻	1mm以下の黒色粒 1mm以下の浅黄色粒	高台内は回転ナデ後ヘラ起こし
193	須恵器	高台付坏 底部	石積	－	(8.0)	－	回転ナデ　貼付高台	回転ナデ　ナデ	灰 (10Y5/1)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	2mm以下の白色粒	高台内は回転ナデ後ヘラ起こし
194	須恵器	高台付坏 体部～底部	石積	－	(7.8)	－	回転ナデ　貼付高台	回転ナデ　不定方向のナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の白色粒	高台内は回転ナデ後ヘラ起こし　焼成歪
195	須恵器	高台付坏 胴部～底部	石積	－	(6.7)	－	回転ヘラ削り　回転ナデ　貼付高台	回転ナデ　不定方向のナデ	灰オリーブ (5Y6/2)	灰 (5Y6/1)	堅緻	1mm以下の浅黄色粒	高台内は回転ナデ後ヘラ起こし未調整
196	須恵器	高台付坏 底部	石積	－	(9.0)	－	回転ヘラ削り　回転ナデ　貼付高台	回転ナデ　不定方向のナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	1mm以下の白色粒	高台内は回転ナデ後ヘラ起こし
197	須恵器	高台付坏 体部～底部	Ⅰ層	－	(8.0)	－	回転ナデ　貼付高台　自然釉	回転ナデ　不定方向のナデ	黄灰 (2.5Y6/1)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の白色粒	高台内は回転ナデ後ヘラ起こし
198	須恵器	高台付坏 底部	Ⅰ層	－	(7.6)	－	回転ナデ　貼付高台	回転ナデ　不定方向のナデ	灰～灰白 (10Y5/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	1mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	高台内は回転ナデ後ヘラ起こし
199	須恵器	風字硯	SA9	－	－	－	上（硯）面：工具による削り　側面はヘラ削りで面取	下面：ナデ　指頭痕	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	堅緻	1mm以下の白色粒	上（硯）面に磨り面
200	須恵器	風字硯	石積	－	－	－	上（硯）面：工具による削り　工具ナデ	下面：格子目タタキの後粗いナデ消し	にぶい黄橙 (10YR7/2)	灰黄褐 (10YR6/2)	堅緻	1mm以下の白色粒	上（硯）面に磨り面　足が欠損
201	須恵器	風字硯	石積	－	－	－	上（硯）面：工具ナデ	下面：格子目タタキの後粗いナデ消し	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	1mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	上（硯）面に磨り面

第８表　竹淵Ｃ遺跡出土陶磁器（古墳時代～古代）観察表

遺物番号	出土場所	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	胎土調	釉調 外面	内面	産地	年代・備考
202	石積	青磁	小坏	－	－	－	施釉	施釉	灰白 (5Y7/1)	灰オリーブ (7.5Y6/2)	灰オリーブ (7.5Y6/2)	越州窯	9～10c
203	石積	青磁	碗	－	－	－	施釉	施釉	灰 (5Y6/1)	灰オリーブ (5Y6/2)	灰オリーブ (5Y6/2)	越州窯	9～10c
204	石積	緑釉	皿	－	(6.7)	－	施釉	施釉	灰白 (2.5Y7/1)	灰オリーブ (7.5Y5/3)	灰オリーブ (7.5Y5/3)		9～10c
205	石積	緑釉	皿	－	(7.6)	－	施釉	施釉	灰白 (10Y7/1)	灰オリーブ (7.5Y5/3)	灰白 (10Y7/2)		9～10c
206	石積	緑釉	皿	－	(6.4)	－	施釉	施釉	灰白 (5Y7/1)	灰オリーブ (7.5Y5/3)	灰白 (10Y7/2)		9～10c
207	石積	緑釉	皿	－	(6.9)	－	施釉	施釉	灰 (N5/)	オリーブ灰 (10Y4/2)	オリーブ灰 (10Y4/2)		9～10c
208	SH45	灰釉	皿	－	(6.9)	－	施釉	施釉　蛇ノ目釉剥 高台内面露胎	灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	東海	9～10c

第９表　竹淵Ｃ遺跡出土鉄製品（古墳時代～古代）計測表

遺物番号	種別	器　種	出土場所	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
50	鉄器	鉄鎌	SA2	(4.4)	1.8	2.5	4.9	刃部の一部
51	鉄器	鉄鏃	SA9	9.5	2.9	0.5	18.3	方頭鉄鏃
55	鉄器	鉄鏃か	SA10	(3.2)	0.4	0.4	3.0	茎か
104	鉄器	鉄鏃	SA25	13.2	4.1	0.5	23.4	変形鉄鏃
105	鉄器	鉄鏃	SA25	4.7	3.7	0.6	9.1	短茎鏃　木片付着

第10表　竹淵Ｃ遺跡出土石器（古墳時代～古代）計測表

遺物番号	器　種	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
54	磨石	SA10	10.6	8.0	5.4	681.5	砂岩	
70	石錘	SA16	5.1	6.4	0.9	43.4	砂岩	
106	敲石	SA25	16.4	7.8	8.0	1568.4	砂岩	
121	敲石	SA27	9.1	7.3	2.7	262.9	砂岩	
122	紡錘車	SA27	4.6	4.5	0.7	27.5	蛇紋岩	
132	敲石	SA28･29	12.1	8.4	4.6	719.7	砂岩	
133	石錘	SA28･29	6.6	8.3	2.1	157.1	砂岩	
134	滑石製品	SA28･29	3.8	1.4	1.2	12.6	滑石	石墨か

第11表　竹淵Ｃ遺跡出土土錘計測表

遺物番号	出土場所	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	穿孔径(cm)	重量(g)
209	石積	6.4	2.8	2.8	0.7	40.2
210	石積	5.8	2.7	3.0	1.0	36.6
211	SA20	5.6	2.5	2.5	0.9	27.7
212	石積	5.8	2.7	2.4	0.7	26.2
213	SA9	5.7	2.3	2.2	0.7	22.2
214	SA10	4.7	2.2	2.2	0.7	20.7
215	E1	5.5	1.9	1.9	0.5	17.6
216	石積	6.9	2.9	2.8	1.1	49.8
217	CⅡ	6.1	2.7	2.6	0.6	37.5
218	SA20	5.7	2.7	2.7	0.7	36.0
219	CⅡ	5.9	2.2	2.7	0.7	30.7
220	石積	5.3	2.1	2.1	0.6	22.0
221	CⅠ	5.6	1.5	1.5	0.4	9.6
222	AⅢ	5.3	1.3	1.2	0.4	9.0
223	SC1	5.5	1.3	1.3	0.5	8.5
224	CⅡ	5.3	1.3	1.1	0.4	7.3
225	SH598	4.9	1.3	1.2	0.3	7.2
226	SC1	4.8	1.3	1.3	0.5	7.1
227	SC1	4.9	1.2	1.2	0.5	7.0
228	BⅡ	5.4	1.2	1.2	0.5	6.3
229	AⅢ	5.2	1.1	1.1	0.5	6.3
230	SA25	4.8	1.2	1.1	0.4	6.3
231	BⅢ	4.2	1.1	1.1	0.4	6.2
232	SH380	4.3	1.2	1.2	0.3	6.1
233	BⅢ	4.9	1.2	1.2	0.5	6.0
234	SH476	4.3	1.3	1.2	0.4	6.0
235	BⅡ	4.5	1.3	1.2	0.3	5.9
236	SH153	4.5	1.2	1.1	0.3	5.8
237	SC1	4.3	1.2	1.1	0.4	5.8
238	SH539	5.0	1.1	1.1	0.4	5.6
239	SH450	4.6	1.1	1.1	0.4	5.5
240	CⅡ-170	5.0	1.1	1.0	0.3	5.4
241	SH451	4.9	1.1	1.1	0.3	5.4
242	SA15	4.4	1.1	1.1	0.4	5.3
243	トレ3	5.2	1.0	1.0	0.4	5.2
244	BⅢ	4.7	1.1	1.0	0.3	5.2
245	SH614	4.4	1.1	1.1	0.4	5.2
246	SH455	4.3	1.3	1.2	0.4	5.2
247	D1	4.7	1.1	1.0	0.3	5.1
248	SA29	4.6	1.1	1.1	0.4	5.0
249	SH705	4.8	1.1	1.1	0.4	4.9
250	BⅢ	4.3	1.0	1.0	0.4	4.9
251	AⅢ	4.0	1.2	1.0	0.5	4.9
252	CⅢ	4.5	1.0	1.0	0.3	4.6
253	BⅡ	4.6	1.0	0.9	0.3	4.4
254	BⅡ	4.8	1.0	0.9	0.3	4.3
255	トレ1	4.3	1.0	0.9	0.4	4.1
256	BⅡ	4.5	1.0	1.0	0.3	3.9
257	SH255	4.5	1.1	0.9	0.3	3.9
258	D1	3.8	1.0	1.0	0.4	3.9
259	BⅡ	4.2	1.1	1.0	0.4	3.8
260	CⅡ	4.7	1.1	0.9	0.4	3.6
261	CⅡ	3.7	1.0	1.0	0.5	3.4
262	BⅡ	3.9	1.1	0.9	0.4	3.3
263	BⅡ	3.6	1.0	0.9	0.3	3.2
264	CⅡ	3.7	1.0	1.0	0.3	3.1
265	AⅡ	4.0	0.9	0.9	0.4	2.8
266	SA28	3.9	1.0	0.8	0.3	2.6
267	AⅡ	3.7	0.9	0.8	0.5	2.4
268	SA27	4.8	1.7	1.6	1.6	11.2
269	BⅡ	4.9	1.4	1.3	0.4	8.8
270	SH645	5.5	1.4	1.4	0.5	8.4
271	SH238	4.7	1.5	1.3	0.4	7.9
272	SC1	5.0	1.2	1.3	0.4	7.7
273	SH133	5.0	1.4	1.2	0.3	7.6
274	BⅡ	5.1	1.3	1.2	0.4	7.1
275	BⅢ	5.1	1.2	1.1	0.3	6.1
276	SA29	4.5	1.4	1.2	0.4	6.0
277	CⅡ	5.0	1.2	1.1	0.3	5.9
278	BⅡ	4.9	1.2	1.1	0.6	5.9
279	CⅡ	5.5	1.1	1.1	0.4	5.6
280	CⅡ	5.5	1.2	1.0	0.5	5.4
281	SA29	4.5	1.3	1.2	0.3	5.3
282	SA29	4.5	1.2	1.1	0.4	5.1
283	BトレⅠ	3.5	1.3	1.2	0.3	4.8
284	BトレⅠ	4.2	1.1	1.1	0.3	4.7
285	トレ1	4.0	1.1	1.0	0.3	4.5
286	E2	4.2	1.1	1.0	0.4	4.3
287	SH713	4.5	1.1	1.0	0.2	4.1
288	SC1	5.1	1.0	1.0	0.4	3.8
289	AⅡ	3.9	1.1	1.0	0.5	3.8
290	CⅡ	3.7	1.0	0.9	0.4	2.9
291	SH432	3.4	0.9	0.8	0.3	2.2
292	BトレⅠ	4.0	1.8	1.7	0.5	11.8
293	SA23	3.7	1.9	1.8	0.8	10.4
294	SH135	4.6	1.7	1.5	0.4	9.6
295	SC1	4.2	1.7	1.5	0.5	8.8
296	CⅡ	4.0	1.7	1.6	0.7	8.5
297	E1	3.4	1.5	1.4	0.4	7.3
298	SH248	3.5	1.4	1.4	0.4	7.0
299	BⅡ	3.0	1.1	1.6	0.6	6.1
300	SA29	3.8	1.5	1.2	0.5	6.0
301	D1	3.3	1.7	1.4	0.3	5.8
302	SH481	3.3	1.4	1.3	0.5	5.7
303	BⅡ	3.2	1.4	1.3	0.3	5.3
304	SA29	3.9	1.3	1.1	0.4	5.1
305	SA26	3.7	1.4	1.1	0.5	4.8
306	トレ6	3.6	1.1	1.2	0.4	4.7
307	CⅡ	3.5	1.5	1.1	0.6	4.4
308	SH539	3.5	1.3	1.2	0.5	4.2
309	トレ5	3.0	1.0	1.0	0.3	2.7

第３節　調査第３面（中世）の調査

１　調査の概要

調査第３面（基本土層の第Ⅱ面）の調査では、掘立柱建物跡11棟、石組遺構２基、ピットを約1,200基検出した。遺構内や遺物包含層から、多量の中世土師皿や陶磁器等が出土した。

２　遺構と遺物（第47図）

（１）掘立柱建物跡（ＳＢ）

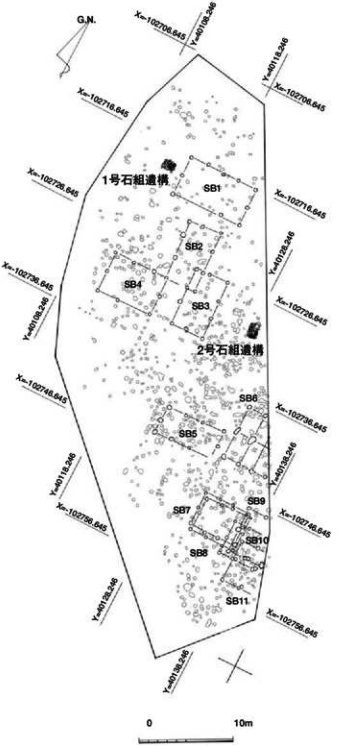
掘立柱建物跡はいずれも古墳時代～古代にかけて構築された竪穴住居跡の上面から11棟検出した。そのうち南東部では掘立柱建物跡が５棟切り合っていた。各建物跡の方位は、いずれも座標北方向から２～３°の振れを有し主軸を南北とするものと、88～90°の振れを有し主軸を東西とするものの二つに分類される。柱穴から出土した遺物は小片であるが中世土師器の特徴をもつことから、建物跡の構築時期は同時期相当と考えられる。遺構については別表（第12表）にまとめた。

ＳＢ１（第48図）

本遺跡で検出された建物跡の中では最も規模が大きい。南側柱の西から第２、第３柱は確認できなかった。西側柱中央部から約90cm外側に中世に構築されたと推定される１号石組遺構を検出した。主軸をほぼ同じとするが建物跡との関連は明らかではない。

ＳＢ２（第49図）

調査区の北側中央部で、古墳から古代にかけての住居跡が最も密集する地区の上面に位置している。東側柱間に比べ西側柱間は若干短く台形状を呈する。南側柱の西から第１柱の南半分と第２柱は、確認トレンチで削平されていた。南北方向に主軸を有し、ＳＢ４とは一部が重複しているため時期差があると考えられるが、先後関係は不明である。



第47図　調査第３面遺構分布図（S=1/400）

ＳＢ３（第50図）

ＳＢ２と同じく南北方向に主軸を有するが、先後関係は不明である。ＳＢ４とは主軸が直角になる位置関係である。棟方位はＮ２°Ｗを指す。

ＳＢ４（第51図）

柱穴の掘形はＳＨ１～ＳＨ10までよく似ており柱間が正確に設置されている。北側柱の東から第１柱は試掘トレンチにより削平されている。また、南側柱の東から第２柱は確認できなかった。検出面からみた地形は北西側がやや高く、南東側に向かって緩やかに下降する傾斜地となっている。棟方位は、Ｎ88°Ｅを指す。

ＳＢ５（第52図）

ＳＢ１，ＳＢ４同様、東西方向に主軸を有する。南側柱の東から第１柱はトレンチにより削平されている。棟方位は、Ｎ88°Ｅを指す。

ＳＢ６（第53図）

柱間規模や掘形の深さからみて調査区外にかかる東西棟の総柱建物跡もしくは西面庇の大型建物跡と考えられる。検出面での柱穴径は、40cm～106cmと幅がある。また、径の大きさの割には深く掘り込まれているものが多く、ＡＴ層の下層まで掘り込まれている。最深のものはＳＨ２とＳＨ８で検出面から1.2ｍを測る。西側柱から東へ第３列、北から第２柱は確認できなかった。棟方位は、Ｎ89°Ｗを指す。

ＳＢ７（第54図）

ＳＢ８とともに確認面からの深さが比較的浅く、後世の削平をかなり受けたものと推測される。ＳＢ８とほぼ重なるように検出され、主軸や規模、その他特徴がよく似ていることから、位置を規制しての立て替えが推測される。

ＳＢ８（第54図）

棟方位は、ほぼ真東を指す。柱穴の掘形はＳＢ７と同様、円形に近い楕円形である。

ＳＢ９（第55図）

調査区の南側東端Ｅ・Ｆ－６グリッドに位置している。調査区外にかかる東西棟の側柱建物跡と考えられＳＢ７・８・10・11と重複しているが先後関係は不明である。規模は4.98ｍ（西側柱間）で柱間は2.35～2.59ｍ、梁行は不明で柱間は1.85～2.04ｍを測る。確認面からの深さはＳＢ10，ＳＢ11とともに比較的浅く、後世の削平をかなり受けたものと推測される。棟方位は、ほぼ真東を指す。柱穴の掘形は円形若しくは楕円形である。

ＳＢ10（第55図）

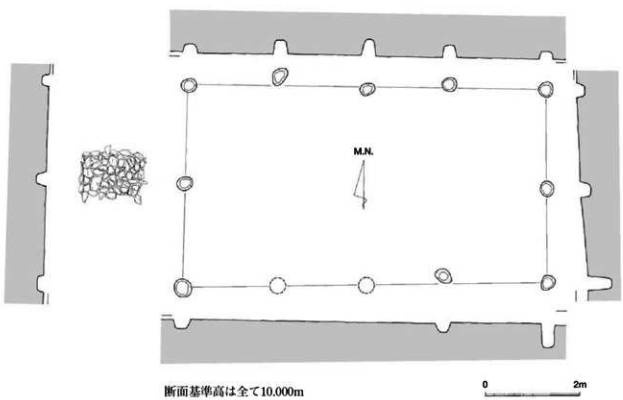
調査区外にかかる東西棟の側柱建物跡と考えられる。ＳＢ11と重なるように検出され、主軸や規模、その他特徴がよく似ていることから、位置を規制しての立て替えが推測される。

ＳＢ11（第55図）

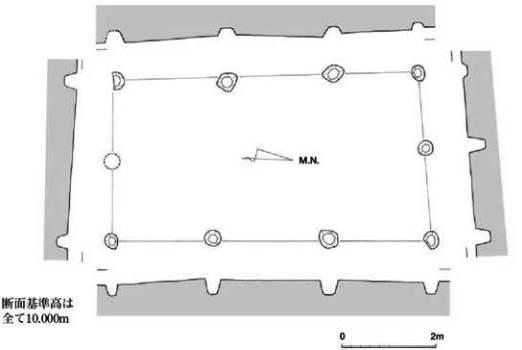
調査区の南側東端Ｅ・Ｆ－６グリッドに位置している。調査区外にかかる東西棟の側柱建物跡と考えられる。規模は桁行不明で1.93～2.11ｍ、梁行4.45ｍ（西側柱間）で柱間2.14～2.31ｍを測る。棟方位は、ほぼ真東を指す。柱穴の掘形は円形若しくは楕円形である。

第12表　掘立柱建物跡一覧表

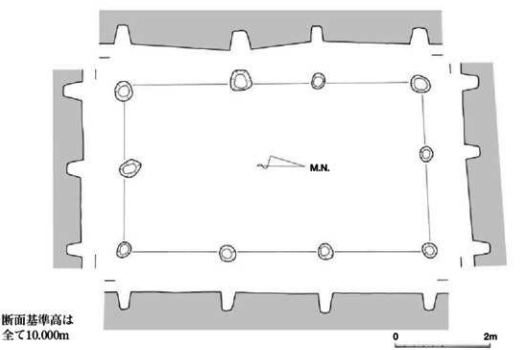
建物番号	位　　置	主軸	建物の種別	規模	桁行	梁行	長幅比	床面積
SB1	C･D－2･3グリッド	東西	側柱建物	4間×2間	7.56～7.71m	4.08～4.28m	1.8	32.1㎡
SB2	C･D－3･4グリッド	南北	側柱建物	3間×2間	6.46～6.71m	3.44～3.54m	1.9	23.2㎡
SB3	D－3･4グリッド	南北	側柱建物	3間×2間	6.31～6.45m	3.39～3.54m	1.8	22.8㎡
SB4	C－4グリッド	東西	側柱建物	3間×2間	6.00～6.02m	4.44～4.51m	1.3	26.9㎡
SB5	D･E－5グリッド	東西	側柱建物	3間×2間	6.28～6.31m	3.02～3.04m	2.1	20.2㎡
SB6	E－5グリッド	東西	総柱建物か	3＋α×2間	5.44m以上	5.88m以上(西側)	－	－
SB7	E－6グリッド	東西	側柱建物	3間×2間	5.02～5.04m	3.54～3.58m	1.4	18.3㎡
SB8	E－6グリッド	東西	側柱建物	3間×2間	4.98～5.00m	3.64～3.90m	1.3	19.1㎡
SB9	E･F－6グリッド	東西	側柱建物	2＋α×2間	4.19m以上	5.04m以上(西側)	－	－
SB10	E･F－6グリッド	東西	側柱建物	2＋α×2間	5.06m以上	3.75m以上(西側)	－	－
SB11	**E･F－6グリッド**	**東西**	**側柱建物**	**1＋α×2間**	**4.22m以上**	**4.46m以上(西側)**	**－**	**－**



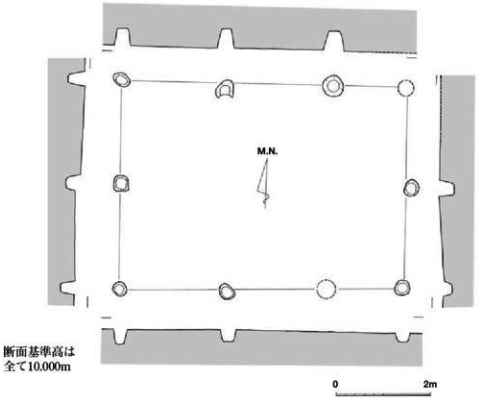
第48図　SB1及び1号石組遺構実測図（S=1/80）



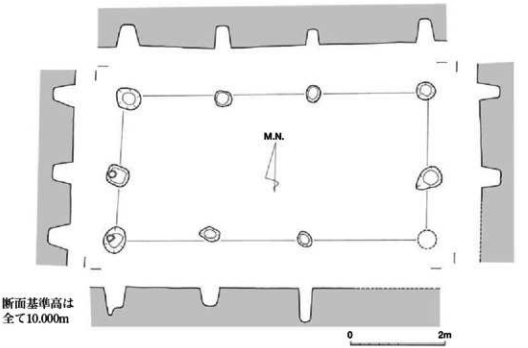
第49図　SB2実測図（S=1/80）



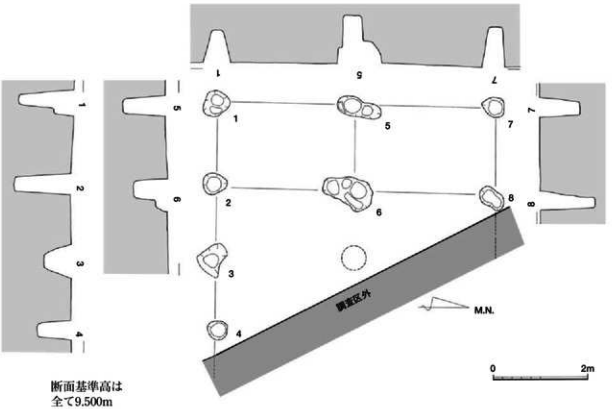
第50図　SB3実測図（S=1/80）



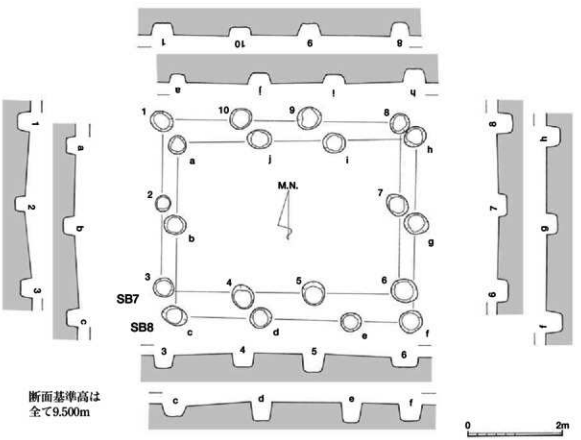
第51図　SB4実測図（S=1/80）



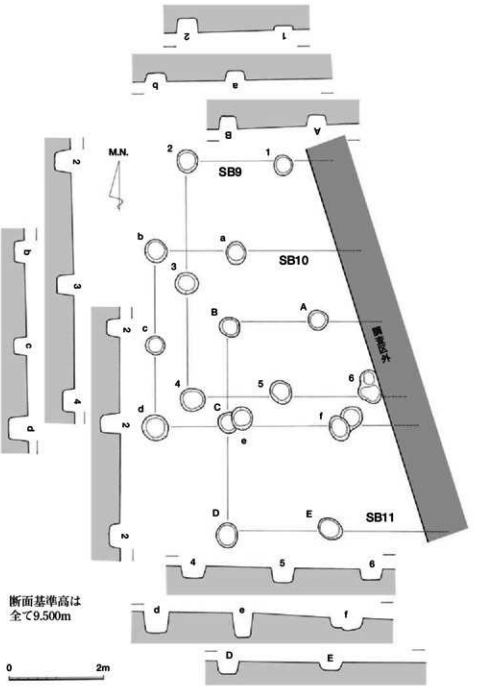
第52図　SB5実測図（S=1/80）



第53図　SB6実測図（S=1/80）



第54図　SB7・8実測図（S=1/80）



第55図　SB9・10・11実測図（S=1/80）

（2）石組遺構

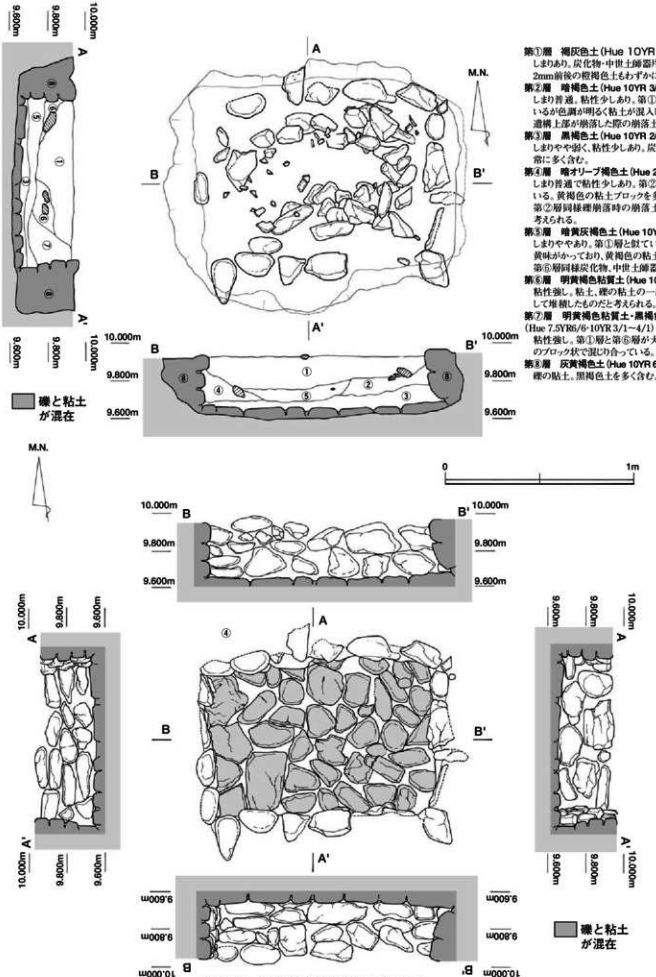
本遺跡では石組遺構を2基検出した。いずれも掘り込みに川原石を敷き詰め、直方体の空間をつくりだしているものである。構築時期は出土遺物から中世と考えられる。用途は不明であるが、埋土に炭化物や焼土が含まれることや遺構内面に露出している川原石の表面が被熱している部分があることから、内部で火を用いたことが推測される。県内では、本遺跡の石組遺構と似た構造をもつ遺構がこれまで21基（本遺構を含む）確認されているが、構築時期や用途の解明について糸口となる遺物が出土している例は少ない。県内の石組遺構について別表（第13表）にまとめたので、本遺跡のものと比較されたい。

1号石組遺構（第56図）

調査区北部C－3グリッドに位置し、第Ⅱ層で検出された。ほぼ東西軸である。掘り込みは長軸1.54m、短軸1.34mの不整方形を呈し、検出面からの深さは0.33mである。南壁の一部が0.15m程窪む。内法は中軸線上で長軸1.13m、短軸0.84m、深さ0.27mの直方体を呈する。石組は砂岩の円礫を平らな面を内側にして床面を形成しており、その上に扁平な砂岩を丁寧に組み上げている。掘り込みと石の間には灰黄褐色の粘質土が詰められており、石は粘質土に打ち込まれて内面を平坦に構築している。下部に比べて上部がやや内傾するのは、遺構外部の土圧によるものと考えられる。内部を精査していくと32個以上の砂岩の円礫が出土したが、粘質土が付着しているものが多いことや構成礫と非常に似ていることから崩落礫だと思われる。埋土は中・近世の包含層であるⅡ層に似た特徴をもつとともに、炭化物や粘質土、焼土と中世土師皿の小片等を含む。また、床面には、炭化物を非常に多く含む黒褐色土が3cmの厚さで検出された。西隣に本遺構と主軸をほぼ同じくするＳＢ１が検出されているが、本遺構との関連は不明である。**遺物（第58図）** 310～312は土師器の皿である。310は底径が大きく糸切り底で、体部は直線的に伸びている。311,312はヘラ切り底をもち、体部が内湾する。313は鉄製品であるが用途不明である。先端が尖り反っており、端部には穿孔（？）をもつ。

2号石組遺構（第57図）

調査区北部D・E－4グリッドに位置し、第Ⅱ層で検出された。主軸は、N－12°－Wである。掘り込みは長軸1.61m、短軸1.08mの方形を呈する。隅角は鈍角で壁面はややふくれ気味となる。検出面からの深さは0.39mを測る。内法は長軸1.28m、短軸0.78m、深さ0.30mの直方体を呈する。北東隅角は、ピットに掘りとられて礫が消失している。ピットからは、土師器の皿や坏が出土しているが、本遺構との関連については不明である。石の組み方は1号石組遺構と非常に似ているが、石間が狭く詰まっていること、掘り込みと石の間の粘質土の量が少ないことにおいて違いが見られる。また、内側に向いた石面がそれほど平らではなく1号石組遺構に比べるとつくりが粗い。内部には3個の崩落礫とともに、土師質土器の小片等が出土した。埋土は基本土層のⅡ層に似ており、中に炭化物や粘質土、焼土と中世土師皿の小片を含む。また、床面には、炭化物を非常に多く含む黒褐色土が3cmの厚さで検出された。本遺構に関連する遺構等は検出されなかった。**遺物（第59図）** 314～319は土師器の皿である。314,315は糸切り底である。315～319はヘラ切り底で、いずれも器高が低く、体部が内湾気味である。320は鉄製品で用途不明だが、釘の可能性がある。321は石製品である。利用石材はチャートで中央部に穿孔をもつ。



第①層　褐灰色土（Hue 10YR 3/1）
しまりあり。炭化物・中世土師器片を含む。2mm前後の橙褐色土もわずかに含む。

第②層　暗褐色土（Hue 10YR 3/3）
しまり普通。粘性少しあり。第①層と似ているが色調が明るく粘土が混入している。遺構上部が崩落した際の崩落土か。

第③層　黒褐色土（Hue 10YR 2/2）
しまりやや弱く、粘性少しあり。炭化物を非常に多く含む。

第④層　暗オリーブ褐色土（Hue 2.5Y 3/3）
しまり普通で粘性少しあり。第②層と似ている。黄褐色の粘土ブロックを多く含む。第②層同様礫崩落時の崩落土であると考えられる。

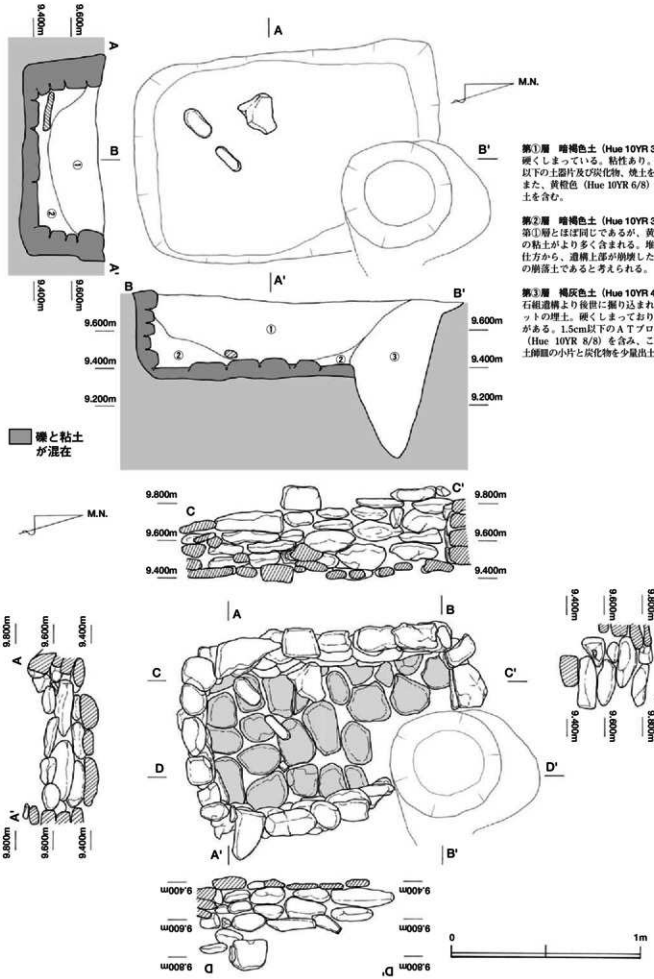
第⑤層　暗黄灰褐色土（Hue 10YR 4/2）
しまりややあり。第①層と似ているが少し黄味がかっており、黄褐色の粘土を含む。第⑥層同様炭化物、中世土師器を含む。

第⑥層　明黄褐色粘質土（Hue 10YR 6/6）
粘性強し。粘土、礫の粘土の一部が崩落して堆積したもの土と考えられる。

第⑦層　明黄褐色粘質土・黒褐色灰色土（Hue 7.5YR6/6-10YR 3/1～4/1）
粘性強し。第①層と第⑤層が大きさ不定のブロック状で混じり合っている。崩落土か。

第⑧層　灰黄褐色土（Hue 10YR 6/2～6/3）
礫の粘土。黒褐色土を多く含む。

第56図　1号石組遺構実測図（S=1/20）

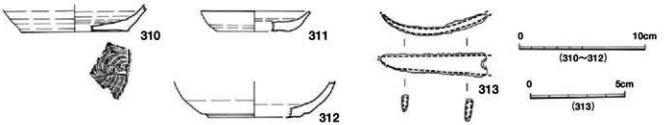


第①層　暗褐色土（Hue 10YR 3/4）
硬くしまっている。粘性あり。2cm以下の土器片及び炭化物、焼土を含む。また、黄橙色（Hue 10YR 6/8）の粘土を含む。

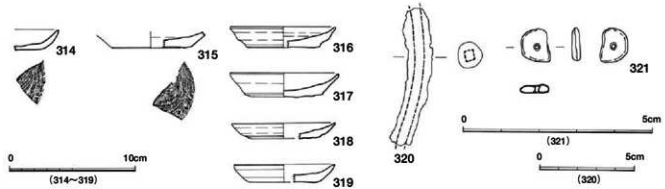
第②層　暗褐色土（Hue 10YR 3/4）
第①層とほぼ同じであるが、黄橙色の粘土がより多く含まれる。堆積の仕方から、遺構上部が崩壊したときの崩落土であると考えられる。

第③層　褐灰色土（Hue 10YR 4/1）
石組遺構より後世に掘り込まれたピットの埋土。硬くしまっており粘性がある。1.5cm以下のＡＴブロック（Hue 10YR 8/8）を含み、この他、土師皿の小片と炭化物を少量出土した。

第57図　2号石組遺構実測図（S=1/20）



第58図　1号石組遺構出土遺物実測図（S=1/2、1/4）



第59図　2号石組遺構出土遺物実測図（S=1/1、1/2、1/3）

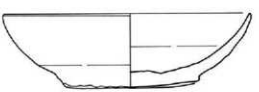
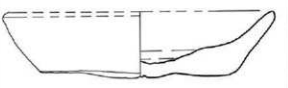
（2）その他の遺物

調査第3面の遺構から出土した遺物以外にも、包含層等から中世の特徴をもつ遺物が出土した。出土遺物には土師器、須恵器、陶磁器、銅製品、銭貨がある。

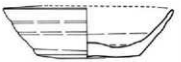
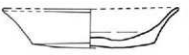
①　土師器（第60図）

本遺跡からは坏や皿が出土した。ここではこれらの土師器を、まず、底部の切り離し技法からヘラ切り底をⅠ類、糸切り底をⅡ類として分類し、さらに、口唇部・体部・底部の各形態の組み合わせによって分類した。形態分類は以下のとおりである。また、石組遺構で出土した土師皿についても同様に分類した。なお、いずれの分類にも当てはまらない372は、平面的なつくりになっており、煤が全面に付着していることから灯明皿の可能性が高い。

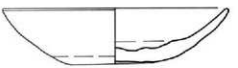
○口唇部

①類：口唇部を先細りに調整する	②類：口唇部を丸く調整する
	

○体部

A類：内湾気味である	B類：直線的である	C類：外反気味である
		

○底部

ア類：底部と体部の境が明確である	イ類：底部と体部の境が明確でない
	

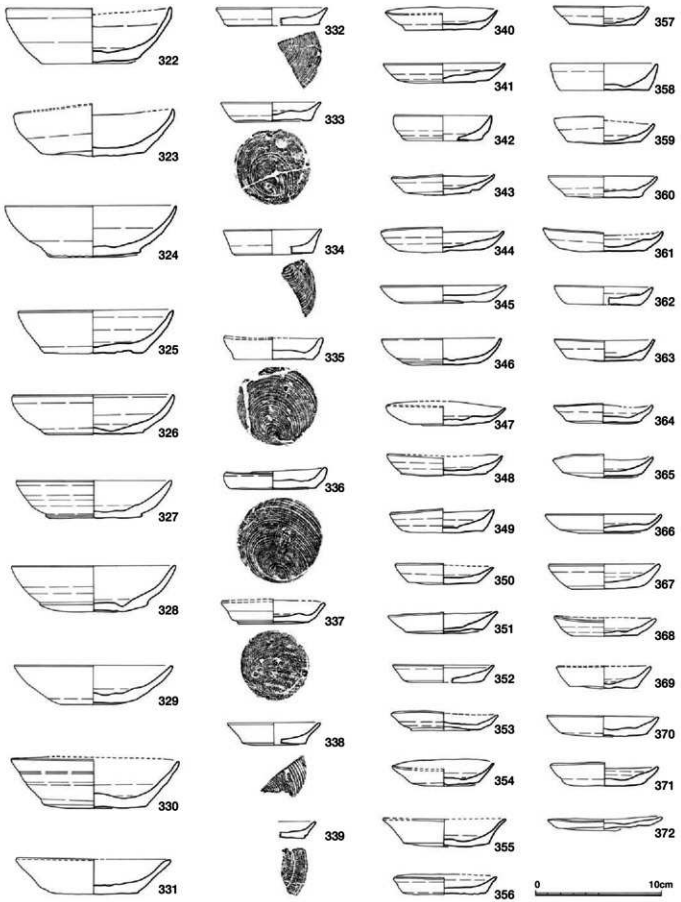
坏＜口径：12.1～13.9cm　器高：2.7～4.4cm　底径：7.1～8.6cm程度＞（第60図）

坏はすべてヘラ切り底（Ⅰ類）である。

Ⅰ類	**①－A－ア類：（322～326）**
	②－A－ア類：（327）
	②－A－イ類：（328,329）
	②－B－ア類：（330）
	②－C－ア類：（331）

皿＜口径：7.3～9.8cm　器高：1.2～2.2cm　底径：5.1～8.4cm程度＞（第60図）

Ⅰ類	①－A－ア類：（340）	Ⅱ類	①－B－ア類：（332）
	①－A－イ類：（341～348）		①－C－ア類：（333,334）
	①－B－ア類：（316,317,349）		②－A－ア類：（335）
	①－B－イ類：（318,350～354）		②－A－イ類：（314,336,337）
	①－C－ア類：（355）		②－B－ア類：（310,315）
	①－C－イ類：（356）		A－ア類：（312）
	②－A－ア類：（357～363）		B－ア類：（310,315）
	②－A－イ類：（311,314,319,364～367）		B－イ類：（339）
	②－B－ア類：（368）		
	②－B－イ類：（369～371）		
	A－ア類：（312）		
	その他の類：（372）		



第60図　その他の遺物（中世土師器）実測図（S=1/3）

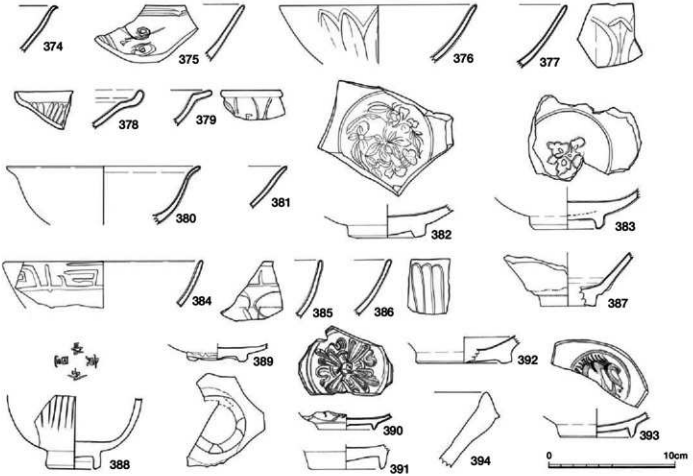
② 須恵器（第61図）

1点のみ出土した。373は東播系須恵器の擂鉢である。

第61図　その他の遺物（中世須恵器）実測図（S=1/3）

③ 陶磁器（第62図）

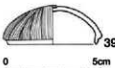
土師器と比較すると量が少なく21点図化した。貿易陶磁器は中国産がほとんどでその中でも龍泉窯系青磁が12点で最も多く、その他に景徳鎮系青磁等が出土した。詳細は遺物観察表（第15表）にまとめている。また、分類については上田秀夫分類及び大宰府編年を使用した。



第62図　その他の遺物（中世陶磁器）実測図（S=1/3）

④ 銅製品（第63図）

395は銅製の蓋である。天井部中央の窪みはつまみ欠損部か。内側のふくらみはつまみ接合時の押さえによるものだと考えられる。また、天井部から口縁部にかけて明瞭な工具痕が残る。口縁端部には段をもち、蓋と一対になるであろうものの存在を伺わせる。仏具か。



第63図　その他の遺物（中世銅製品）実測図（S=1/2）

⑤ 銭貨（第64図）

396～398は古銭である。396は皇宋通寶である。397は紹聖元寶、398は無文銭であると思われる。いずれも背に文や波はない。

第64図　その他の遺物（中世銭貨）実測図（S=1/1）

第13表　宮崎県内の石組遺構＜報告年度は報告書発行年度。未発行の場合は（　　）に調査年度。遺跡名下【　　】内は、取扱遺構名＞

遺　跡　名	報告年度	所在地	規　模	主軸	焼土	目張	出土遺物	構築時期	用途	関連遺構	特　記　事　項
田代堀第１遺跡A,B地区【ＳＣ２】	１９８７	清武町	長軸：3.4m 短軸：2.6m 深さ：1.2m	N88°E	－	－	なし	中世	不明	なし	内部の石は被熱。底部付近の埋積土は黒色を呈し、炭化物を含む。
野稲尾遺跡【石組状遺構】	（１９８７）	川南町	長軸：1.92m 短軸：1.42m	N72°E	－	－	青磁碗	不明	不明	なし	内部の石はかなり被熱している。
天神河内第１遺跡【石組遺構】	１９９１	田野町	長軸：1.5m 短軸：1.2m 深さ：0.65m	南北	○	－	鉄片や土師質小皿（ヘラ切り）	不明	不明	掘立柱建物跡内に構築されるが関係は不明	外側主軸の延長線上に川原石が立った状態で出土した。
大戸ノ口第２遺跡【配石遺構】	１９９１	高鍋町	長軸：2.26m 短軸：1.08m 深さ：0.18m	東西	○	－	土錘、盤７、鉄片、土師器片、陶磁器片	不明	不明	なし	目張りなし。盤７には丹塗りの痕跡。配石の南側に充たされた粘土に多量の炭化物。
蔵元遺跡【石組遺構】	１９９６	えびの市	長軸：3.33m 短軸：1.94m 深さ：1.03m	東西	○	○	なし	不明	不明	なし	黒色土と白色粘土の混じった土で目張りをする。
鶴喰遺跡【ＳＲ01】	（１９９７）	都城市	長軸：1.47m 短軸：0.98m 深さ：0.82m	N29°W	○	不明	滑石製品 土師器	中世	不明	ＳＢ０１（総柱建物）内だが軸がずれる。	埋土に炭化物、灰を含む。
鶴喰遺跡【ＳＣ22】	（１９９７）	都城市	長軸：1.74m 短軸：1.2m 深さ：0.84m	N65°W	○	不明	白磁、丸瓦、るつぼ	中世	不明	ＳＢ０１内だが軸がずれる。	埋土に粘性の赤褐色土が層として残る。
西下本庄【１号石組土坑】	１９９９	国富町	長軸：1.7m 短軸：1.1m 深さ：0.6m	N9°E	○	○	龍泉窯系青磁 白磁碗、国産陶磁器	中世	不明	なし	壁面に楕円形状の円礫を小口積みにし、目地には白色粘土を詰める。
西下本庄【２号石組土坑】	１９９９	国富町	長軸：1.7m 短軸：1.2m 深さ：0.7m	N83°W	○	○	須恵器坏（糸切底部）瓦器？	中世	不明	なし	壁面に楕円形状の円礫を小口積みにし、目地には白色粘土を詰める。
西下本庄【３号石組土坑】	１９９９	国富町	長軸：不明 短軸：不明 深さ：不明	南北	－	○	なし	中世か	不明	なし	石の大きさや石組みの特徴は１・２号とよく似る。
年神遺跡【石組遺構】	２００１	小林市	長軸：2.0m 短軸：1.5m 深さ：0.8m	東西	○	○	なし	不明	不明	なし	白色粘土で目張り。底面は扁平な円礫、壁面には細長いか比較的小さな円礫を用いる。
箕原遺跡【石組遺構】	２００１	都城市	長軸：1.3m 短軸：0.65m 深さ：0.45m	南北	－	○	鉄片、土師質小皿（ヘラ切り）	不明	不明	掘立柱建物跡内に構築されるが関係は不明	白粘土で目張り。側壁の石１段目を下方向に突き刺すように据える。
加治屋Ｂ遺跡【ＳＣ60】	（２００１）	都城市	長軸：1.45m 短軸：0.94m 深さ：0.63m	N13°E	○	○	土師器坏、常滑焼	中世	不明	掘立柱建物跡内に構築されるが主軸が若干ずれる	扁平な礫を使用する。
加治屋Ｂ遺跡【ＳＣ125】	（２００１）	都城市	長軸：1.3m 短軸：0.65m 深さ：0.45m	N81°W	○	○	土師器小皿、白磁、粘土塊	中世	不明	なし	他の遺構に切られており、上半部の残存悪い。輝石安山岩使用
加治屋Ｂ遺跡【ＳＣ130】	（２００１）	都城市	長軸：1.75m 短軸：1.2m 深さ：0.7m	南北	○	－	土師器坏、常滑焼	中世	不明	なし	拳大の円礫使用
前ノ田村上【石組遺構】	（２００２）	川南町	長軸：1.26m 短軸：0.91m 深さ：0.63m	東西	－	－	真竹の炭化物	中世（13c）	不明	なし	底の敷石上に10cmの厚さで灰が堆積する。
上の原第２遺跡【集石遺構】	２００３	宮崎市清武町	長軸：1.38m 短軸：1.13m 深さ：0.8m	東西	－	－	なし	不明	不明	なし	礫の一部が赤化。覆土中に炭化物。床面に80～100cm大の扁平な巨礫

※　参考報告書等は第Ⅲ章に記載した。規模や主軸等の数値は、報告書掲載の図面から測定したものを含む。新富町上開遺跡や西都市宮ノ東遺跡でもそれぞれ１基検出されているが、詳細不明。
※　「野稲尾遺跡」については、近藤協氏（宮崎県埋蔵文化財センター）、「鶴喰遺跡」「加治屋Ｂ遺跡」については、柴垣光博氏（都城市教育委員会文化財課）、「前ノ田村上遺跡」については、河野康男氏（宮崎県埋蔵文化財センター）に御教示を受けた。

第14表　竹淵C遺跡出土土器（中世）観察表

遺物番号	種別	器種 部位	出土場所	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	焼成	胎土の特徴	備考
310	土師器	皿 底部	石組1	—	(6.4)	—	回転ナデ　糸切り	回転ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1mm以下の橙色粒	
311	土師器	皿 口縁部～底部	石組1	(8.4)	(6.2)	1.6	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2mm以下の赤褐色の粒	
312	土師器	皿 体部～底部	石組1	—	(6.4)	—	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	きめ細か	
314	土師器	皿 口縁部～底部	石組2	—	—	—	回転ナデ　糸切り	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	きめ細か	
315	土師器	皿 底部	石組2	—	(6.4)	—	回転ナデ　糸切り	回転ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	きめ細か	
316	土師器	皿 口縁部～底部	石組2	(8.2)	(6.0)	1.7	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR7/6)	良好	きめ細か	板目圧痕
317	土師器	皿 体部～底部	石組2	(8.5)	(6.2)	1.9	回転ナデ　工具痕　ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	精良	
318	土師器	皿 口縁部～底部	石組2	(8.2)	(5.8)	1.2	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	灰褐 (7.5YR5/2)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	精良	外面に黒変
319	土師器	皿 口縁部～底部	石組2	(7.8)	(5.6)	1.4	回転ナデ　ヘラ切り	工具ナデ　指押え	灰褐 (7.5YR5/2)	灰褐 (7.5YR5/2)	良好	精良	板目圧痕
322	土師器	坏 口縁部～底部	SH424	(13.9)	7.7	4.4	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　風化気味	灰白 (10YR7/1)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	1mm以下の黒色粒	板目圧痕
323	土師器	坏 口縁部～底部	SH406	12.4	8.2	4.2	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　ナデ	淡橙 (5YR8/3)	淡橙 (5YR8/4)	良好	1mm以下の赤茶色砂粒	いびつな土器 板目圧痕
324	土師器	坏 口縁部～底部	SH128	(13.5)	7.5	4.0	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	1mm以下の灰褐色粒	内面に一部黒変 板目圧痕
325	土師器	坏 口縁部～底部	SH445	(12.1)	7.8	3.4	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	精良	板目圧痕
326	土師器	坏 口縁部～底部	ＳＨ	(12.6)	(8.0)	3.1	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　仕上げナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1mm以下の透明粒	
327	土師器	坏 口縁部～底部	CⅠ407	(12.2)	(7.7)	3.0	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	きめ細か	
328	土師器	坏 口縁部～底部	BⅠ717	(12.8)	(8.6)	3.7	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1mm以下の黒　茶色粒	
329	土師器	坏 口縁部～底部	BⅠ720	(12.4)	(7.2)	3.1	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	きめ細か	板目圧痕
330	土師器	坏 口縁部～底部	SH432	13.3	8.0	4.0	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm以下の褐灰色粒	
331	土師器	坏 口縁部～底部	SH780	12.1	7.1	2.7	回転ナデで風化気味　ヘラ切り	回転ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	1mm以下の浅茶色砂粒	
332	土師器	皿 口縁部～底部	CⅠ227	(8.6)	(7.6)	1.4	回転ナデ　糸切り	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1mm以下の灰褐色粒	
333	土師器	皿 口縁部～底部	SH917	(7.7)	6.1	1.5	回転ナデ　糸切り	回転ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	きめ細か	
334	土師器	皿 口縁部～底部	SH358	(7.6)	(6.4)	2.0	回転ナデ　糸切り	回転ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	1mm以下の黒色粒	
335	土師器	皿 口縁部～底部	CⅠ2237	7.7	6.3	1.7	回転ナデ風化気味　糸切り	回転ナデ風化気味	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	1mm以下の茶色粒	
336	土師器	皿 口縁部～底部	SH262	7.9	6.9	1.4	回転ナデ　糸切り	回転ナデ　仕上げナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	きめ細か	
337	土師器	皿 口縁部～底部	SH495	8.0	5.9	1.9	回転ナデ　糸切り	回転ナデ　仕上げナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm以下の黒　茶色粒	
338	土師器	皿 口縁部～底部	BⅠ	(7.3)	(5.1)	1.8	回転ナデ　糸切り	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1mm以下の赤褐色粒	
339	土師器	皿 口縁部～底部	CⅠ2207	—	—	—	回転ナデ　工具痕？　糸切り	回転ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm以下の灰褐色粒	
340	土師器	皿 口縁部～底部	SH216	8.9	5.5	1.8	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	きめ細か	板目圧痕
341	土師器	皿 口縁部～底部	SH258	9.6	6.9	1.6	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　仕上げナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	精良	
342	土師器	皿 胴部～底部	ＳＣ２	7.6	6.4	2.0	回転ナデ　風化している　ヘラ切り	回転ナデ風化している	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	精良	
343	土師器	皿 口縁部～底部	SH399	8.1	5.9	1.6	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	1mm以下の赤褐　茶色粒	
344	土師器	皿 口縁部～底部	SH290	9.6	6.7	2.0	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　未調整か？底部は指押さえ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm以下の黒・茶色粒	板目圧痕
345	土師器	皿 口縁部～底部	CⅠ2238	(9.8)	(6.4)	1.4	回転ナデ　風化気味　ヘラ切り	回転ナデの後仕上げナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2mm以下の茶褐色の粒	
346	土師器	皿 口縁部～底部	BⅡ437	(12.5)	8.2	2.7	口縁部は回転ナデ　ヘラ切り	ナデ　仕上げナデ	橙 (.5YR6/6)	橙 (.5YR6/6)	良好	きめ細か	
347	土師器	皿 口縁部～底部	SH128	9.5	5.7	1.9	ヨコナデ　回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/2)	良好	1mm以下の茶褐色粒	板目圧痕
348	土師器	皿 口縁部～底部	SH258	9.2	6.8	1.5	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	精良	
349	土師器	皿 口縁部～底部	SH137	8.2	6.2	1.9	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	精良	板目圧痕
350	土師器	皿 口縁部～底部	SH104	7.6	5.5	1.7	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	精良	板目圧痕
351	土師器	皿 口縁部～底部	SH396	8.5	6.2	1.7	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　仕上げナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	1mm以下の黒色粒	板目圧痕
352	土師器	皿 口縁部～底部	ＳＣ２	(8.0)	(6.2)	1.4	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　指押え	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1mm以下の灰褐色粒	
353	土師器	皿 口縁部～底部	AⅠ2054	8.4	5.5	1.4	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	3mm以下の明赤褐色粒	
354	土師器	皿 口縁部～底部	SH242	7.9	5.3	2.1	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	灰白 (10YR8/2)	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	2mm以下の茶褐粒 2mm以下の黒色粒	板目圧痕
355	土師器	皿 口縁部～底部	SH926	9.6	6.8	2.2	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　回転ナデ後指頭痕 指ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	1mm以下の黒・茶色粒	
356	土師器	皿 口縁部～底部	SH326	8.0	6.6	1.6	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	きめ細か	
357	土師器	皿 口縁部～底部	SH495	7.4	5.2	1.6	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1mm以下の赤茶色砂粒 きめ細か	板目圧痕
358	土師器	皿 口縁部～底部	SH917	(8.4)	(7.0)	2.1	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデの後仕上げナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	2mm以下の茶色粒	板目圧痕
359	土師器	皿 口縁部～底部	SH917	7.8	5.8	2.2	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1mm以下の赤茶色砂粒	板目圧痕
360	土師器	皿 口縁部～底部	BⅠ603	(8.4)	6.0	1.7	回転ナデ　風化　ヘラ切り	回転ナデ風化	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	きめ細か	
361	土師器	皿 口縁部～底部	SH503	9.3	7.0	1.5	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	精良	板目圧痕
362	土師器	皿 口縁部～底部	CⅠ2177	(7.8)	(5.6)	1.4	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデの後仕上げナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	1mm以下の黒色粒	板目圧痕
363	土師器	皿 口縁部～底部	SH448	7.8	5.9	1.6	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1mm以下の赤茶色砂粒 きめ細かな砂粒	
364	土師器	皿 口縁部～底部	BⅠ736	7.7	5.9	1.6	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	きめ細か	板目圧痕
365	土師器	皿 口縁部～底部	SH146	7.7	6.2	1.9	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm以下の赤褐色粒	板目圧痕
366	土師器	皿 口縁部～底部	SH367	(9.2)	6.0	1.5	ヨコナデ　回転ナデ　風化気味 ヘラ切り	回転ナデの後仕上げナデ	にぶい橙 (7.5YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1mm以下の茶褐色粒	
367	土師器	皿 口縁部～底部	CⅠ2174	(8.5)	(5.8)	2.0	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ　仕上げナデ	淡橙 (5YR8/4)	淡橙 (5YR8/4)	良好	きめ細か	
368	土師器	皿 口縁部～底部	BⅠ718	7.9	5.1	1.4	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	きめ細か	板目圧痕
369	土師器	皿 口縁部～底部	BⅠ1318	7.4	5.4	1.7	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (2.5YR7/6)	良好	きめ細か	
370	土師器	皿 口縁部～底部	BⅠ727	(8.7)	7.0	1.6	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	きめ細か	板目圧痕
371	土師器	皿 口縁部～底部	SH128	8.5	6.1	1.9	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	きめ細か	板目圧痕
372	土師器	皿 口縁部～底部	CⅡ2168	8.7	7.3	1.2	回転ナデ　ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	きめ細か	内面外面とも黒変
373	須恵器	捏鉢 口縁部	SA16	(23.6)	—	—	回転ナデ　黒変　風化気味	回転ナデ	灰白 (10Y7/1)	なし	なし	東播系	13c～14c

第15表　竹淵C遺跡出土陶磁器（中世）観察表

遺物番号	出土場所	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	胎土調	釉調 外面	内面	産地	年代
374	Ⅱ層	白磁	端反碗	—	—	—	—	—	灰白(5Y7/1)	灰白(7.5Y7/2)	灰白(7.5Y7/2)	中国	12c中〜後
375	Ⅱ層	青磁	碗	—	—	—	—	劃花文	灰白(7.5Y7/1)	灰オリーブ(7.5Y6/2)	灰オリーブ(7.5Y6/2)	龍泉窯系	12c中〜後
376	Ⅱ層	青磁	碗	(15.4)	—	—	鎬蓮弁文	—	灰白(7.5Y7/1)	緑灰(7.5GY6/1)	緑灰(7.5GY6/1)	龍泉窯系	13c末〜14c
377	石積	青磁	碗	—	—	—	鎬蓮弁文	—	灰(5Y6/1)	灰オリーブ(5Y5/3)	灰オリーブ(5Y5/3)	龍泉窯系	13c末〜14c
378	SC1	青磁	盤	—	—	—	—	陰刻	灰(N7/)	灰オリーブ(7.5Y5/2)	灰オリーブ(7.5Y5/2)	龍泉窯系	13c後〜14c中
379	SC1	白磁	碗か皿	—	4.5	—	鎬蓮弁文	—	灰白(7.5Y7/1)	灰オリーブ(7.5Y6/2)	灰オリーブ(7.5Y6/2)	龍泉窯系	13c後〜14c中
380	SC1	青磁	碗	(15.4)	—	—	—	—	灰(5Y6/1)	灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	龍泉窯系	14c末〜15c
381	SH27	白磁	皿	—	—	—	口禿	口禿	灰白(N8/)	灰白(5GY8/1)	灰白(5GY8/1)	中国	13c後〜14c中
382	石積	青磁	碗	—	—	—	—	見込印花文	灰白(5Y7/)	灰オリーブ(5Y5/2)	灰オリーブ(5Y5/2)	龍泉窯系	14c末〜15c
383	SE1	青磁	碗	—	(5.2)	—	高台内面露胎	見込印花文	灰白(7.5Y7/1)	緑灰(10GY6/1)	緑灰(10GY6/1)	龍泉窯系	14c後〜15c中
384	SC 1	青磁	碗	(15.3)	—	—	ヘラ描雷文	—	灰(10Y6/1)	オリーブ灰(10Y6/2)	オリーブ灰(10Y6/2)	龍泉窯系	15c
385	SA29	青磁	碗	—	—	—	ヘラ描雷文	—	灰白(5Y7/1)	灰オリーブ(5Y5/3)	灰オリーブ(5Y5/3)	龍泉窯系	15c
386	石積	青磁	碗	—	—	—	ヘラ片切彫蓮弁文	—	灰(7.5Y6/1)	灰オリーブ(7.5Y5/2)	灰オリーブ(7.5Y5/2)	龍泉窯系	15c
387	石積	陶器	天目茶碗	—	(4.3)	—	高台脇下露胎	—	褐灰(7.5Y5/1)	青黒(5B1.7/1) 明褐(7.5YR5/6)	青黒(5B1.7/1) 明褐(7.5YR5/6)	中国？	15〜16c
388	石積	青磁	碗	—	3.6	—	線描蓮弁文	印花「長命富貴」	灰白(5Y7/1)	オリーブ黄(5Y6/4)	オリーブ黄(5Y6/4)	龍泉窯系	16c か
389	石積	白磁	碗	—	(4.8)	—	切り高台	—	灰白(5Y8/1)	灰白(N8/)	灰白(N8/)	中国	14c前〜15c終
390	石積	青花	皿	—	4.4	—	唐草文	十字花文　圏線	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	景徳鎮系	15c後〜16c前
391	石積	白磁	碗	—	(7.4)	—	—	—	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰白(10Y 8/1)	灰白(10Y 8/1)	中国	11c後〜12c前
392	石積	白磁	碗	—	(5.5)	—	—	露胎	にぶい黄橙(10YR7/2)	明オリーブ灰(5GY7/1)	明オリーブ灰(5GY7/1)	中国	11c後〜12c前
393	Ⅱ層	青花	碗	—	5.8	—	—	—	灰白(5Y7/1)	灰白(5GY8/1)	灰白(5GY8/1)	中国	—
394	SC1	陶器	擂鉢	—	—	—	—	9条1単位の擂目	灰(5Y6/1)	灰(5Y4/1)	灰(5Y4/1)	備前	15c前〜中

第16表　竹淵C遺跡出土金属製品（中世）計測表

遺物番号	種別	器種	出土場所	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
313	鉄器	不明鉄器	石組1	(5.7)	1.1	0.2	6.0	刀子の刃部か
320	鉄器	釘か	石組2	(7.3)	0.5	0.5	21.7	
395	銅製品	銅製の蓋	トレンチ1	4.7	4.7	2.0	45.6	仏具か

第17表　竹淵C遺跡出土石器（中世）計測表

遺物番号	器種	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
321	不明石器	石組2	0.9	0.8	0.2	0.2	チャート	勾玉か

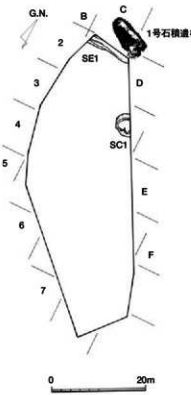
第18表　竹淵C遺跡出土銭貨（中世）計測表

遺物番号	種別	銭貨名	出土場所	王朝	初鋳年	銭径(cm)	内径(cm)	穿径(cm)	重量(g)	備考
396	銭貨	皇宋通寶	BⅡ	北宋	1039	2.4	2.0	0.8	1.1	一部欠損
397	銭貨	紹聖元寶	AⅢ	北宋	1094	2.4	1.8	0.7	3.3	
398	銭貨	不明	AⅢ	—	—	2.4	2.0	0.6	2.6	

第４節　調査第４面（近世）の調査

１　調査の概要（第65図）

調査第４面（基本土層の第Ⅱ面）の調査では、溝状遺構１条と土坑１基を検出した。また、調査区北端境近辺には石積遺構が表出していた。溝状遺構の床上からは、内野山窯系銅緑釉陶器が出土した。調査区東端に検出した土坑は、径が約4.8m、掘込みはＡＴ層まで届く規模の大きいもので、流れ込みと思われる大量の遺物が出土した。石積遺構からは石塔や土器や石器等の遺物が大量に出土し、その中には風字硯も含まれていた。また、石塔には紀年銘等がなく、後世に石積遺構に寄せられたものも多いと考えられるが、この節で説明する。

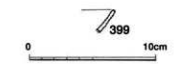


第65図　調査第４面
遺構分布図（S=1/800）

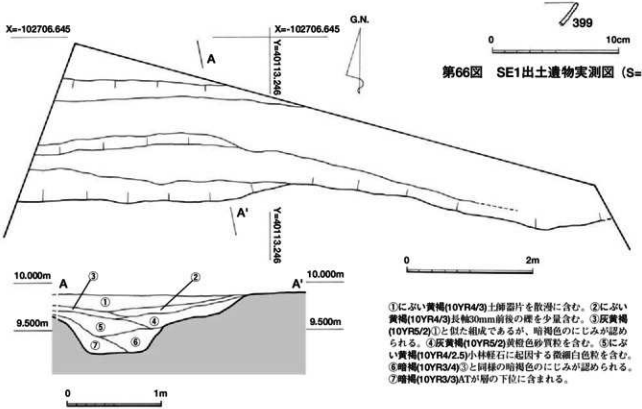
２　遺構と遺物

（１）溝状遺構（ＳＥ）

Ｃ・Ｄ－２グリッドで東西に走る溝が一条確認（第67図）された。遺構の東部と西部は調査区外に延びていたため、全体は把握できなかった。確認できた範囲での規模は、検出面で幅1.5～2m、底面の幅60cm、深さ40～60cm、断面は箱薬研状を呈していた。底面は、ＡＴ層まで掘り込まれており硬化面はなかった。また、東端部に近づくにつれてしだいに浅くなる。**遺物（第66図）**399は床面で検出された陶器で内野山窯系Ⅲである。口縁部内面及び口唇部に銅緑釉が施されている。



第66図　SE1出土遺物実測図（S=1/3）

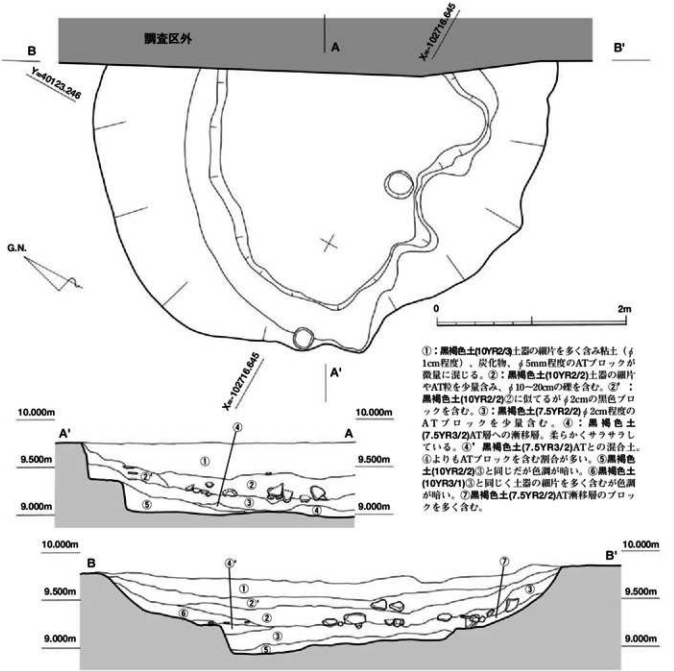


①にぶい黄橙(10YR4/3)土師器片を散漫に含む。②にぶい黄橙(10YR4/3)長軸30mm前後の礫を少量含む。③灰黄褐(10YR5/2)①と似た組成であるが、暗褐色のにじみが認められる。④灰黄褐(10YR5/2)黄橙色砂質粒を含む。⑤にぶい黄橙(10YR4/2.5)小林軽石に起因する微細白色粒を含む。⑥暗褐(10YR3/4)③と同様の暗褐色のにじみが認められる。⑦暗褐(10YR3/3)ATが層の下位に含まれる。

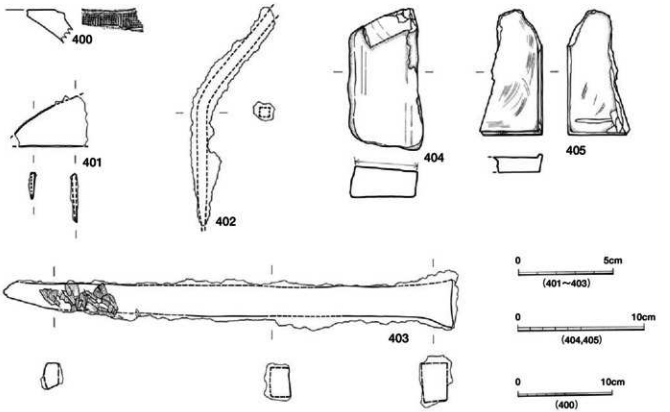
第67図　SE1実測図（平面図：S=1/60、断面図：S=1/40）

（2）土坑（ＳＣ）

Ｄ－３グリッドで遺構の東部が調査区外にかかる土坑を１基（第68図）検出した。ＳＡ13の北東に位置し、中世構築のＳＢ１南東部端を切る。確認できた範囲では、直径約4.8ｍの半円形プランを呈し、深さは約80cmを測る。全体的に下部に向かって緩やかに掘り込まれているが、北西部では途中に段をもつ。②層下部には砂岩系の拳大～人頭大の礫が堆積する。①～②層からは流れ込みと思われる遺物が出土した。礫堆積層下の床面付近からは土師質土器や鉄器、砥石や石硯などが出土した。**遺物（第69図）**400は火鉢である。口唇部にスタンプで格子目状の文様が施される。401～403は鉄製品である。401は下部に刃部をもつ鉄鎌の先端か。402の断面は方形で下部に向かうにつれ細くなることから鉄釘か。403は水田の代掻き作業に使用された鉄製馬鍬歯か。断面は長方形の板状で、頭部は基部より広がりをもち基部端部は摩耗して細くなる。404は砂岩製の砥石で磨面は１面である。405は赤色頁岩製の石硯である。



第68図　SC1実測図（S=1/40）



第69図　SC1出土遺物実測図（S=1/2、1/3、1/4）

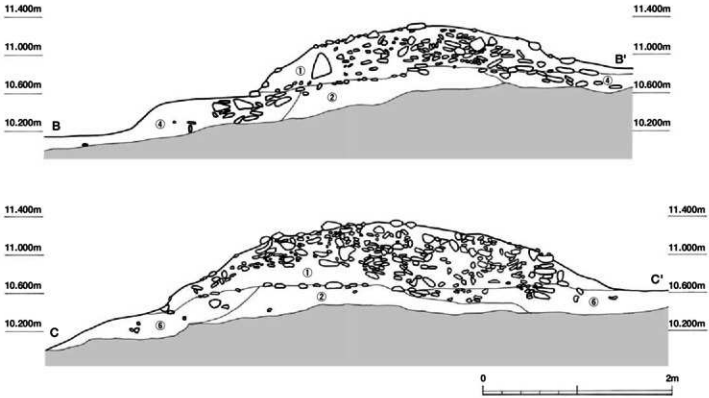
（3）石積遺構

遺構はC・D－1グリッドで顕在しており、表面には、石塔が数基祀られていたが文化課により写真測量された後、遺構横に据え直されていた。当初この遺構は後世に積まれたと考えられる礫で覆われていたため、礫の様子を確認しながら浮石や竹根などで攪乱された軟らかい土を除去していった。

遺構は長軸約9.2m、短軸約4.4mの楕円形を呈し、主軸はN69°Wである。本遺構は、まず第1段階として平坦な地山面に3種類の黒褐色土(Hue7.5YR3/1,Hue10YR2/2,Hue10YR3/2)を24～30cm程度盛土して基底部を造成している。第2段階はその基底部上に礫と暗褐色土(Hue10YR3/3)を最大厚約70cmまで積み上げて本遺構を構築する。第1段階と第2段階の間には礫が散布していた。第2段階には拳大から人頭大の礫が含まれるが、その密度には偏りが見られる。礫はいずれも円礫の四万十系砂岩を主とし、その他に頁岩や頁岩のホルンフェルス、流紋岩、デイサイト、チャートで構成されている。

浮石等の除去後、20cm程度の川原石が石積遺構を取りまくように並べられているのが確認されたが、特に北東側にその傾向が強い。また、積石が密集するのは遺構南西側であり本来はこの南西部が当初区画された主体部であった可能性がある。遺構上に意図的な礫の並びを数箇所確認したが、その下部からは何も出土しなかった。また、遺構中央部やや南寄りに原位置を保つ近世のものと思われる地輪及び水輪が礫間から出土したが、いずれも蔵骨器や墓坑等は検出できなかった。遺物等は礫間から須恵器や陶磁器、鉄器等が出土したが当初の石組遺構構築後、後世に寄せられたものだと思われる。すでに据え直されていた五輪塔は、石材や大きさの違いから組合せが本来のものではないと思われるものが多かった。これらのことからこの石積遺構は、死者を葬らない五輪塔や板碑のみを祀ったいわゆる参拝のための遺構であると考えられる。

第70図　1号石積遺構実測図（S=1/40）



①暗褐色土(Hue10YR3/3)かたくしまっており粒子は粗い。粘性はない。礫間から須恵器や陶磁器等の遺物が出土するが後世に寄せ集めたものか。②黒褐色土(Hue7.5YR3/1)かたくしまっている。①層より粘性がある。遺物はほとんど含まない。③黒褐色土(Hue10YR2/2)粒子が粗くもろい土質。粘性はない。④黒褐色土(Hue10YR3/2)粒子が粗くもろい土質。粘性がありややしまっている。竹根による攪乱がある。遺物は遺構端部の上層から土師器片が少数出土したが後世に寄せ集めたものか。⑤黒褐色土(Hue10YR3/2)粒子は細かく粘性に乏しい。ややしまりがあり西寄りに向かう程攪乱が激しくなる。遺物は遺構端部の上層から須恵器片や石器が出土したが後世に寄せ集めたものか。⑥黒褐色土(Hue10YR2/2)粒子は細かく粘性に乏しい。

第71図　1号石積遺構断面実測図（S=1/40）

（4）石塔

石塔は、五輪塔と板碑が確認された。すべて利用石材は凝灰岩である。五輪塔は、火輪と水輪は厚手・薄手ともに存在し、4基の水輪が納骨孔を有していた。また、線刻梵字が施されている空風輪と火輪が1基ずつ、水輪と地輪が2基ずつあった。石積遺構上部から遺構横に据え直されていた五輪塔は、ほとんどが当初の組合せではないと考えられ原位置を保っていなかったものと思われる。また、出土した空風輪、火輪、水輪、地輪の数も異なることから、周辺にあった五輪塔類が寄せ集められたことも考えられ、本来の遺構配置は中央の1基（地輪：432、水輪：425）を除いて不明である。なお、五輪塔のそれぞれの分類については、確認された個体数が少ないことから、「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第1集　山内石塔群　(1984)」の法量分布を用いた。

①　五輪塔

空風輪

空風輪は18基が確認された。そのうち残りのよい10基を図化・分類した。空輪部の頂部形態によって尖頭型・主頭型・円筒型の3種類に分類し、さらに空輪の最大径によって肩ばり・胴ばり・腰ばりに細分類した。

	尖頭型	主頭型	円筒型
肩ばり	409（太大）	412（太中）	414（細中）
胴ばり	408（太大）		
腰ばり	406（太大）、407（太大）	410（太中）、411（太中）	413（太中）

415は空輪上部が欠損しており類別化できなかった。また、その他の特徴として、407は空輪の1面と風輪の4面に梵字の墨書が施されている。

火輪

火輪は5基が確認された。そのうち残りのよい4基を図化・分類した。火輪は、形態と法量によって分類した。本遺跡で確認した火輪はすべて軒をもち、柄孔の形態は円形であることから、屋根流れの反りと厚さで細分類した。

	反り：有
厚手	416（厚中）、417（厚大）

	反り：無
薄手	418（細小）、419（細小）

その他の特徴として417は屋根流れの4面に梵字の刻書が施されている。

水輪

水輪は9基が確認され、そのうち残りのよい8基を図化・分類した。水輪は、納骨孔（有：円形・無）・プロポーションの2要素によって分類する。

	厚　手	薄　手	樽　型
納骨孔無	422（厚大）	423（薄中）、426（薄中）	427（厚大）
納骨孔有（円形）	420（厚中）、421（厚中） 424（厚大）、425（厚中）		

その他の特徴として、421は胴部に3面、梵字の墨書が施されている。また、422は1面のみ刻書が施されているのを確認できたが、剥落が進んでおり梵字は判読できない。

地輪

地輪は6基が確認され、そのうち残りのよい5基を図化・分類した。受部をもつものはみられず、プロポーションによって分類した。

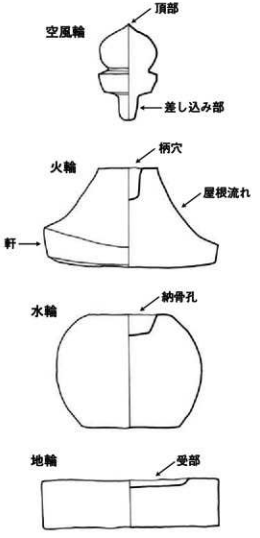
厚　手
428（厚大）、429（厚中）

薄　手
430（薄中）、431（薄中）、432（薄中）

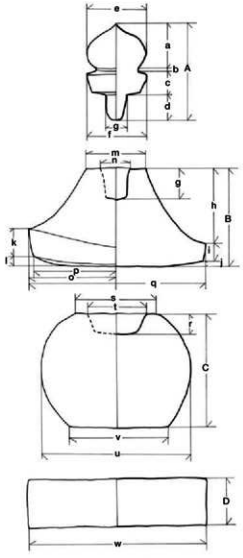
その他の特徴として、428,429は4面に梵字の刻書が施されている。また、これらの五輪塔のうち、石積遺構上の原位置と考えられる箇所で出土した地輪と水輪の組合せは432と425である。

②　板碑

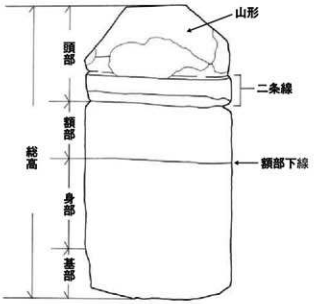
板碑は1基が確認された。433は頭部、身部とも4面が面取されていた。二条線部分で頭部と身部に破損分離し、基部下側も表裏面が欠損していた。また、頭部の形が本来のものかどうかは、風化のため不明である。板碑の総高と頭部長は不明であるが、幅19cm,厚さ10cmである。墨書、刻書等は確認できなかった。



五輪塔各部名称

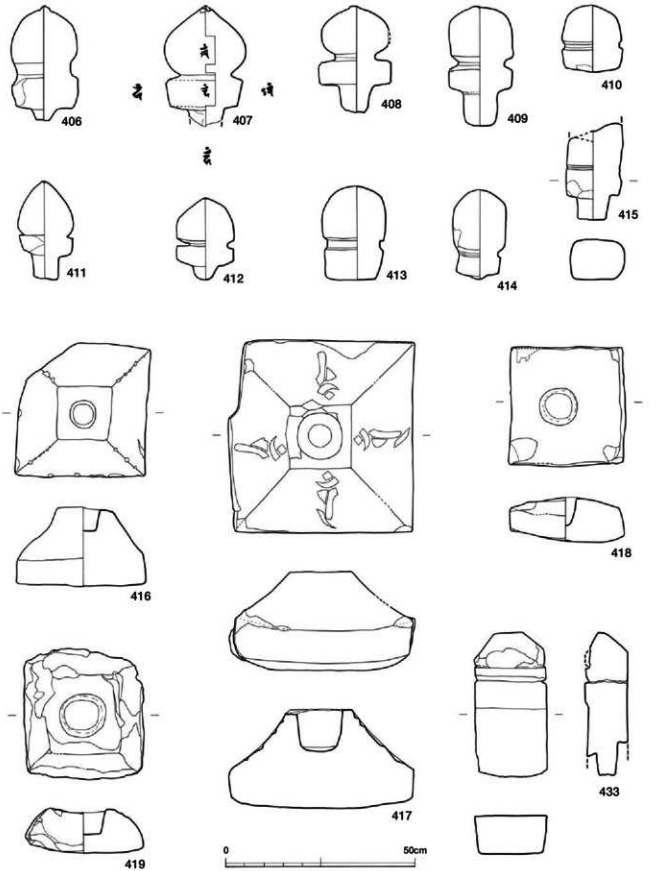


五輪塔法量表凡例

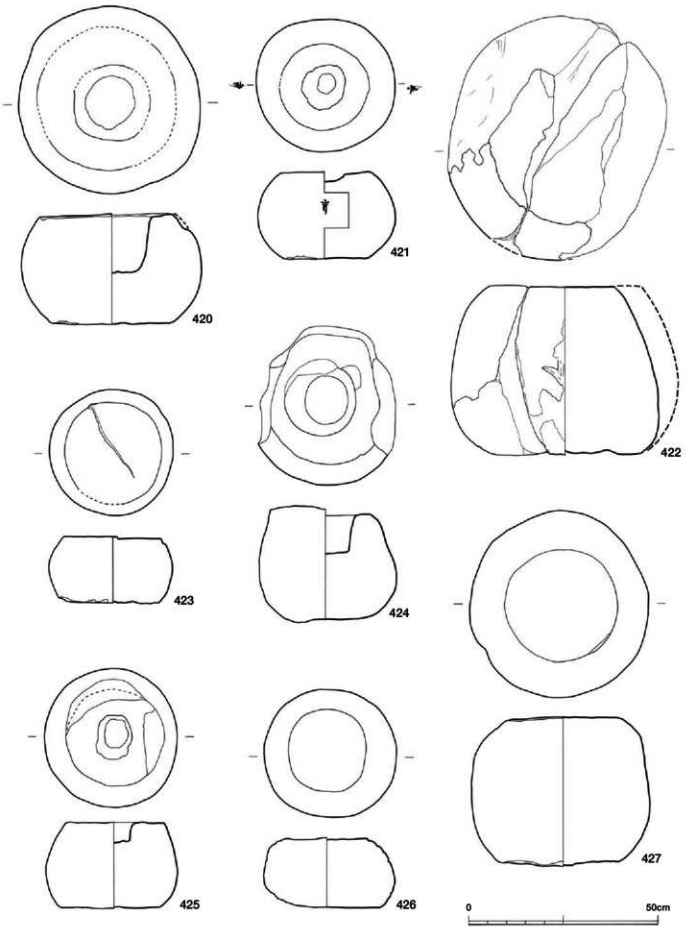


板碑各部名称

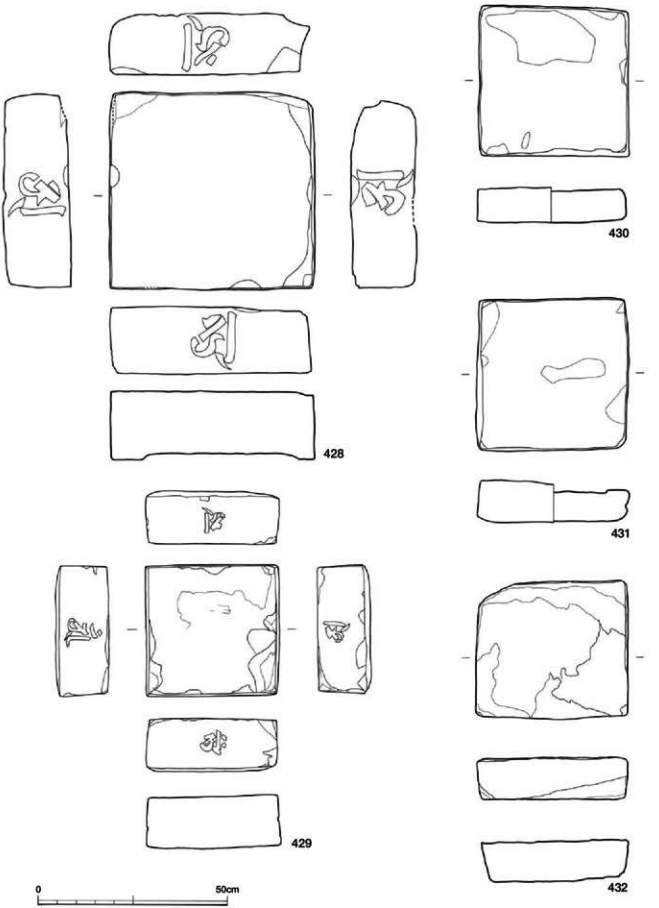
第72図　石塔・板碑各部名称及び法量表凡例



第73図　石塔実測図①（S=1/10）



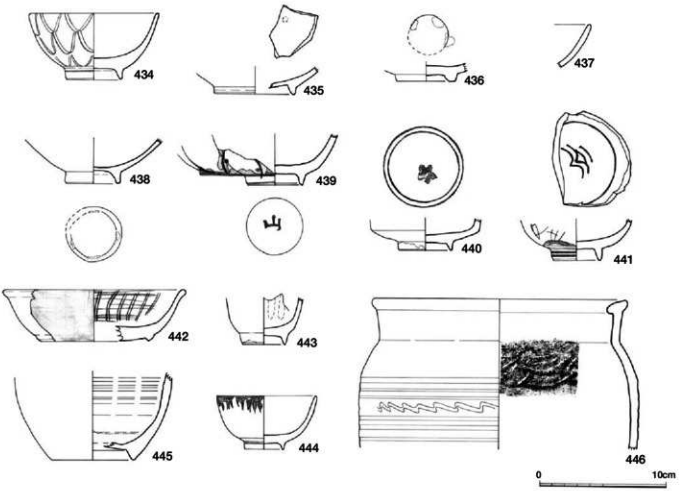
第74図　石塔実測図②（S=1/10）



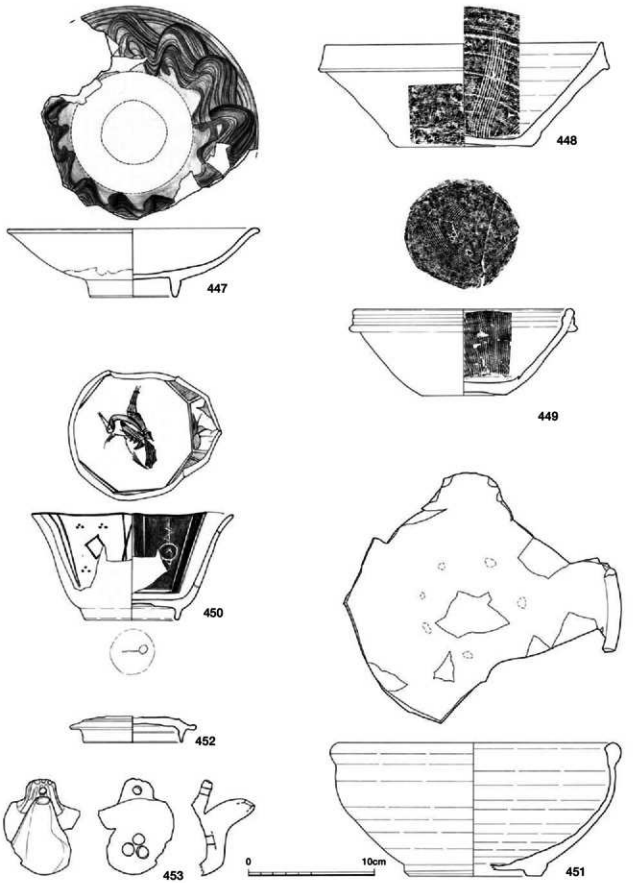
第75図　石塔実測図③（S=1/10）

（５）その他の遺物（第76図～77図）

石積遺構に後世寄せ集められたもののほか、古墳時代の竪穴住居跡の埋土上部から合わせて20点が出土した。産地の判明する14点のうち、肥前系が最も多く９点、薩摩焼が２点、堺系と唐津焼が１点ずつ出土した。また、中国産と思われる磁器が１点出土した。434～442は碗である。434は外面に二重網目文が描かれる。435は陶器碗である。高台内面が露胎となり、見込みにハマ跡（？）が認められる。436は磁器Ⅲ類である。畳付に目跡、見込みに砂目と蛇の目釉剥ぎが残る。438～443は肥前系である。439は外面に雪輪梅花文が表現されたいわゆる「くらわんか」碗である。440は見込みにコンニャク印判で五弁花文が施される。443,444は小坏である。443は内面に花弁状の印刻を施し、内外面に瑠璃釉をかけている。444は雨降り文をもつ染付小坏である。445は肥前系の陶器瓶で、胴部下半部に刷毛目で白化粧土を施している。446は陶器甕である。内面に同心円タタキ痕がナデ消されずに残っている。447は唐津焼の刷毛目Ⅲである。448,449は擂鉢である。448は９条１単位、449は８条１単位の擂目が認められる。450,451は鉢である。450は八角鉢で高台内面に焼継印をもち、451は陶器鉢で見込みに6箇所の目跡を確認できる。452,453は薩摩焼の土瓶である。452は蓋であるがつまみ部が欠損している。453の注ぎ口は溜口である。



第76図　その他の遺物（近世陶磁器）実測図①（S=1/3）



第77図　その他の遺物（近世陶磁器）実測図②（S=1/3）

第19表　竹淵C遺跡出土空風輪法量表

遺物番号	法量（単位cm）									重量（kg）	備　考
	A	a	b	c	d	e	f	g	法量比（a/e）		
406	29.9	14.7	4.1	8.5	2.6	17.5	17.7	6.7	0.84	5.6	
407	(32.1)	18.4	1.5	7.7	(4.5)	21.6	20.2	9.6	0.85	9.5	空輪1面に墨書梵字「ケン」風輪4面に墨書梵字「カン」か
408	28.1	12.4	1.7	6.3	7.7	17.9	19.2	9.2	0.69	6.6	
409	31.4	13.3	3.4	6.6	8.1	15.9	16.8	9.1	0.84	3.1	
410	17.9	9.7	2.2	6	—	15.8	15.9	—	0.61	3.5	
411	25.6	14.5	—	5.3	5.8	14.9	14.2	6.9	0.97	3.5	
412	21.8	11.6	1.5	5.3	3.4	15.2	15.1	6.6	0.76	3.6	
413	25.1	13.8	3.1	8.2	—	16.9	15.5	—	0.82	6.4	
414	23.9	16.1	1.8	5.1	0.9	13.8	11.4	3.9	1.17	4.1	
415	(26.2)	(11.8)	0.9	7.8	5.7	14.6	14.7	8.7	(0.81)	3.7	空輪上部欠損

第20表　竹淵C遺跡出土火輪法量表

遺物番号	法量（単位cm）											重量（kg）	柄穴	備　考
	B	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	法量比（B/q）		
416	20.5	11.7	8.2	0.6	6.1	1.1	1.48	6.9	1.81	1.76	34.6	0.59	22.9	丸	
417	26.2	12.2	9.8	4.2	10.4	3.6	16.6	11.9	23.2	21.2	48.1	0.54	67.1	丸	屋根流れ4面刻書梵字「ラン」か
418	11.6	2.9	7.1	1.6	5.9	3.1	—	10.1	15.2	14.7	30.3	0.38	13.3	丸	
419	11.6	6.6	3.6	1.4	3.5	1.4	15.6	12.1	15.5	—	31.2	0.37	12.9	丸	

第21表　竹淵C遺跡出土水輪法量表

遺物番号	法量（単位cm）							納骨孔	重量（kg）	備　考
	C	r	s	t	u	v	法量比（C/v）			
420	29.2	15.6	35.1	20.2	47.9	31.9	0.92	丸	62.5	
421	23.1	2.6	24.2	11.2	36.5	21.3	1.08	丸	29.7	3面墨書梵字すべて「バン」か
422	44.4	—	(40.3)	37.9	60.1	37.9	1.17	—	155.3	1面刻書　梵字か
423	17.6	—	25.8	—	32.9	23.9	0.74	—	19.5	
424	29.2	11.7	27.3	16.7	36.5	—	—	丸	43.3	
425	22.9	5.6	26.2	9.1	35.4	25.9	0.88	丸	28.8	
426	18.6	—	20.6	—	35.1	22.8	0.82	—	21.4	
427	39.3	—	29.9	—	47.2	31.1	1.26	—	89.5	

第22表　竹淵C遺跡出土地輪法量表

遺物番号	法量（単位cm）			重量（kg）	備　考
	D	w	法量比（D/w）		
428	16.4	54.2	0.30	207.3	4面刻書梵字すべて「ア」
429	18.6	34.9	0.53	79.4	4面刻書梵字「ア」「ア」アン」「アク」か
430	9.1	39.2	0.23	19.2	
431	9.6	39.8	0.24	22.1	
432	10.7	38.9	0.28	25.1	

第23表　竹淵C遺跡出土土器（近世）観察表

遺物番号	種別	器種	出土場所	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴
		部位		口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
400	土師器	火鉢口縁部	SC1	—	—	—	ヨコナデ　格子目状の文様	ヨコナデ　ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/3)	良好	1mm以下の透明粒

第24表　竹淵C遺跡出土陶磁器（近世）観察表

遺物番号	出土場所	種別	器種	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		胎土調	釉調		産地	年代
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
399	SE1	陶器	皿	—	—	—	—	—	灰黄(2.5Y7/2)	にぶい黄(2.5Y6/3)	緑灰(7.5GY5/1)	内野山系	17c後
434	石積	染付	碗	10.0	4.1	5.2	二重網目文	—	灰白(7.5Y8/1)	灰白(10Y8/1)	灰白(10Y8/1)	肥前系	18c
435	SA29	陶器	碗	—	(6.3)	—	高台内面露胎	ハマ跡か	浅黄(2.5Y 8 /3)	淡黄(2.5Y7/4)	淡黄(2.5Y7/4)		
436	石積	磁器	碗	—	(4.7)	—	目跡	砂目　蛇の目釉剥ぎ	灰黄(2.5Y7/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	中国	12c中
437	SA29	陶器	碗	—	—	—	—	—	浅黄(2.5Y 8 /3)	明黄褐(2.5Y7/4)	明黄褐(2.5Y7/4)		
438	石積	陶器	碗	—	4.2	—	目跡	—	灰白(5Y7/1)	灰オリーブ(5Y5/3)	灰オリーブ(5Y5/3)	肥前系	17c後
439	石積	陶器	碗	—	(4.4)	—	雪輪梅花文　高台内に「大明年製」	—	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰白(5Y8/1)	灰白(5Y8/1)	肥前系	18c後～19c
440	石積	青磁染付	碗	—	(4.0)	—	くずれ	コンニャク印判五弁花文　圏線	灰白(5Y7/1)	明緑灰(7.5Y8/1)	灰白(10Y8/1)	肥前系	18c後
441	石積	染付	碗	—	(3.8)	—	草花文？	荒磯文　圏線	灰白(N8/)	明オリーブ灰(5GY7/1)	明オリーブ灰(5GY7/1)	肥前系	19c
442	石積	染付	碗	(13.9)	(8.4)	4.1	蛇の目釉剥ぎ	二重格子文　圏線　化粧土	灰(5Y6/1)	灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	肥前系	19c前～中
443	石積	磁器	小坏	—	(3.4)	—	瑠璃釉	瑠璃釉　陽刻	灰白(N8/)	瑠璃	瑠璃	伊万里	17c前
444	石積	染付	小坏	7.7	3.1	4.5	雨降らし文	—	灰白(N8/)	灰白(10Y7/1)	灰白(10Y7/1)	肥前系	19c　底部に砂目痕
445	石積	陶器	瓶	—	(6.7)	—	刷毛目、化粧土	—	赤(10R5/6)	褐灰(7.5YR6/1)	明黄褐(10YR6/6)	肥前系	17c後～18c前
446	石積	陶器	壺	(26.4)	—	—	沈線　波状文	同心円タタキ	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	暗赤褐(10R3/2)	灰赤(10R4/2)		
447	石積	陶器	皿	(19.6)	6.9	5.4	高台内外露胎	蛇の目釉剥ぎ　化粧土による刷毛目	にぶい褐(7.5YR6/3)	黄褐(2.5Y5/4)	黄褐(2.5Y5/4)	唐津	18c後
448	石積	陶器	擂鉢	(29.1)	(14.4)	10.9	タタキの後横方向のナデ	9条1単位の擂目	明赤褐(2.5YR5/6)	なし	なし		胎土は一部褐灰色(10YR4/1)
449	石積	陶器	擂鉢	(22.6)	—	9.0	—	8条1単位の擂目	暗赤褐(7.5R3/2)	なし	なし	堺系	19c
450	石積	磁器	八角鉢	(16.0)	(7.3)	8.6	圏線　焼継印　蛇の目凹高台	草花文、高文、圏線	灰白(N8/)	明青灰(10BG7/1)	明青灰(10BG7/1)	肥前系	19c後　墨弾き
451	石積	陶器	鉢	(21.8)	10.5	13.6	高台内外露胎	目跡（6箇所）	浅黄(2.5Y 8 /4)	明黄褐(2.5Y7/6)	明黄褐(2.5Y7/6)		19c
452	石積	陶器	土瓶蓋	—	7.9	—	つまみ欠損	露胎	にぶい赤褐(5Y5/4)	黒褐(2.5Y3/2)	黒褐(2.5Y3/2)	薩摩	
453	石積	陶器	土瓶	—	—	—	—	露胎	明赤褐(2.5YR5/6)	明褐(7.5YR3/4)	明褐(7.5YR3/4)	薩摩	

第25表　竹淵C遺跡出土鉄製品（近世）計測表

遺物番号	種別	器種	出土場所	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
401	鉄器	鉄鎌か	SC1	(3.9)	2.7	3.0	8.9	刃部の一部
402	鉄器	釘か	SC1	(11.3)	0.5	0.5	33.6	
403	鉄器	不明鉄器	SC1	23.8	2.1	1.5	242.0	馬鍬歯か

第26表　竹淵C遺跡出土石器（近世）計測表

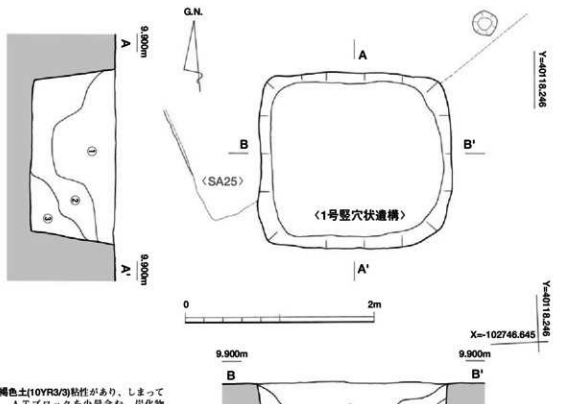
遺物番号	器種	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
404	砥石	SC1	11.2	6.0	2.7	278.0	砂岩	
405	石硯	SC1	10.0	5.0	1.4	95.4	赤色頁岩	

第５節　時期不明の遺構調査

調査区中央部西端に、竪穴状遺構１基を検出した。古墳時代構築のＳＡ25を切る形で検出したが、住居としては規模が小さく掘込みの深さがＡＴ層まで0.9m程と深かったこと、遺物をほとんど出土しなかったことからここでは時期不明の竪穴状遺構として取り扱う。

（１）竪穴状遺構

Ｃ－５グリッドで竪穴状遺構（第78図）を検出した。検出面は第Ⅲ層である。規模は、長軸2.0m、短軸1.8mの隅丸方形を呈しており、主軸はＮ－２°－Ｗである。平面プランは竪穴住居跡に似ているが、規模は非常に小さく、最も小型の竪穴住居跡であるＳＡ23の床面積と比較しても、半分以下である。床面は検出面から0.9m程掘り窪められ、ＡＴ層に達する。遺構内から時期を特定できる遺物は、ほとんど出土しなかった。埋土は３層でレンズ状を呈しており自然堆積と考えられる。壁は床面から90°に近い角度で立ち上がり、床面と壁の境は明瞭である。床面は平坦で特に硬化した範囲は認められず、ピット等は検出しなかった。遺構の北西部はＳＡ25を切っていることから同遺構より構築時期は新しい。また、検出面の第Ⅲ層は古墳時代から古代にかけての包含層であるが、遺構上面の撹乱が激しいことから、さらに新しい時期の遺構である可能性をもつ。



第78図　1号竪穴状遺構実測図（S=1/40）

第Ⅳ章　まとめ

竹澗C遺跡は、縄文時代早期から近世にかけての遺跡である。一ツ瀬川沿いに立地していながら、河川の氾濫による撹乱をほとんど受けておらず、遺跡は良好な形で残っていた。本遺跡の遺構・遺物は、各時代におけるこの地域の人々の生活や果たしてきた役割を知る上で大変貴重である。以下、時代の流れに添いつつ、いくつかの項目について検討を加え、竹澗C遺跡のまとめとしたい。

第１節　縄文時代の遺構・遺物

（１）集石遺構

縄文時代の調査については、諸般の事情によりすでに遺構・遺物が露出していた部分を中心に、調査区の約10%の部分発掘を行い、第Ⅳ層中から集石遺構を４基検出した。ＳＩ１からは遺物が出土したものの、集石遺構内から出土する土器が必ずしも集石遺構の時期を特定するものではないことから、本遺構の時期特定は困難であるが、遺構の特徴について検討する。

まず、本遺構の特徴を、八木澤一郎氏の分類（1994)を利用すると次のようになる。

ＳＩ１：集石２類（密集型、掘込み無し、底石無し）
ＳＩ２：集石３類（密集型、掘込み有り、底石無し）
ＳＩ３：集石２類（密集型、掘込み無し、底石無し）
ＳＩ４：集石１類（分散型、掘込み無し）

つぎに、阿部祥人氏ほか(1984)の見解に従って「準備」、「使用中」、「使用後」の段階を数値を使って分類した清武町白ヶ野第２・３遺跡(2002)での分類案によれば、次のようになる。

「使用後破棄」タイプ：ＳＩ１、ＳＩ４	「使い始めに近い時期」タイプ：ＳＩ２、ＳＩ３

従って、ＳＩ１とＳＩ３は同じ集石２類であるが、角度や円度の割合と礫の大きさから、ＳＩ１は「使用後破棄タイプ」に分類されるのに対し、ＳＩ３は「使用中（使用始め）」であると考えられる。また、ＳＩ２とＳＩ３は同じ「使い始めに近い時期」タイプであるが、ＳＩ２は掘込みがあるのに対し、ＳＩ３は掘込みをもたない。利用石材はほとんどが砂岩である。眼下を流れる一ツ瀬川の川岸には、形状・大きさともよく似た石が豊富にあり、一般的に言われている石蒸しに使用するため、運び込んだことは容易に想像できる。

一方問題点としては、調査範囲が１割程度で全体の状況が不明であることに加え、ＳＩ１とＳＩ２は上層の堆積がうすく、表土を剥いだ時点で検出され、ＳＩ３はすでに上部の礫が露出していたことがあげられる。すなわち当初の構築面の状況は不明であり、本遺構はさらに規模が大きかった可能性がある。また、近世の石積遺構に多くの礫が寄せられていたことや、表土掘り下げ中に調査区全体から多くの礫が出土している状況から、破壊され消滅した集石遺構や散礫なども存在していたものと想定される。

（２）遺物

ここでは図化した９点の土器について述べる。本調査区の縄文土器は押型文と貝殻条痕文を施す土器に大別できる。出土点数は少ないものの楕円押型文の割合が高く、３～７は概ね稲荷山式から田村式の時期幅（坂本1998）であると考えられる。山形押型文については、器形や原体から古手の様相がみられるが、８は口縁部がほぼ直口し口唇部はやや丸みを呈する。文様は外面のみに横位の山形押型文を施し内面施文を行わないものである。これは、黒川忠広氏により下剥峠式の辻タイプや桑ノ丸式土器と時間

的な近時性を指摘されたものによく似る。一方貝殻条痕文を施す土器では、9が横位の貝殻刺突文と短い羽状文とを交互に施すものである。これは、栗畑光博氏によって下剥峰式土器の辻タイプと称された土器に類する。10・11は、貝殻やヘラあるいは櫛状の工具により羽状文を施すもので、新東氏により桑ノ丸式土器と型式設定された土器に該当する。胎土は小礫を含みやや粗い印象が強いが、内外面ともに入念な調整を行うことで胎土の粗さを補っている。

以上、本遺跡出土の土器型式を概観すると、早期前葉から中葉までの時期が想定される。

第2節　古墳時代から古代の遺構・遺物

(1) 竪穴住居跡

本遺跡は、一ツ瀬川下流域の自然堤防上の微高地に位置している。台地の縁辺部に開かれた集落が低地へ展開するのは、弥生時代後期以降であるが、宮崎平野の北部を流れる大河のほとりに、古墳時代から古代にかけての竪穴住居跡が29軒検出されるのは未だ類例をみない。この遺跡の集落としての始まりは5世紀中葉からで、その後古代に至るまでの間に「5世紀後葉～6世紀前葉」、「6世紀後葉～7世紀前葉」、「8世紀～9世紀」という3つのピークがある。

①　5世紀後葉から6世紀前葉

住居跡を9軒（ＳＡ8・11・15・21・25・26・27・28・29）検出した。調査区全体に広がりまとまらない。住居跡の規模にはばらつきがあり、主軸も一定しない。配列上規則的な柱穴はＳＡ26以外に確認できなかった。出土遺物はＳＡ25・27・28・29では大量に出土したが、他の住居跡から出土したのは削平の影響もあるのか、いずれも少数で小片である。遺物内容は、土師器甕を中心とするが、高坏や壺、鉢などと一緒に須恵器の坏身なども出土する。

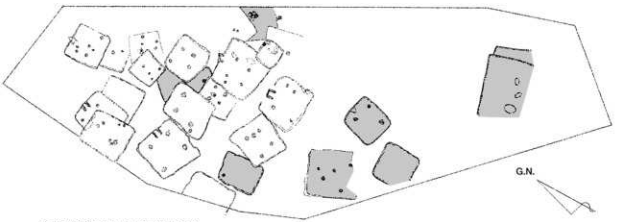
②　6世紀後葉から7世紀前葉

住居跡を13軒（ＳＡ1～7，9・10・12・13・18・24）検出した。本遺跡のほぼ北側に集中し切り合う。規模は3.7m程のものと4.8m程のものに二極化する。主軸はＳＡ6を除いてほぼN11°W付近を指し、4本柱を基本としているものが多い。また、住居内に竈や土器埋設炉を付設するものが出てくるが、両方を併用する住居跡は確認できなかった。須恵器の出土率が高まり、多くの坏蓋・身に加えて甕も出土する。また、土師器では、甕など煮炊き土器の占める割合が高くなる。

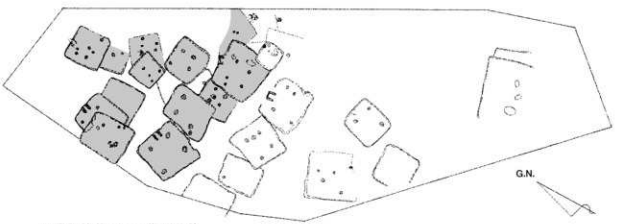
③　8世紀～9世紀

本遺跡の中央部で、帯状に7軒（ＳＡ14・16・17・19・20・22・23）検出した。ＳＡ23を除きやや大型化する。主軸は一定しない。住居には4本柱のものと柱穴をもたない（検出できなかった？）ものに分かれる。竈と土器埋設炉を併設するものはないが、いずれかを付設する割合は高く、住居内に火所をもつことが普及していることがわかる。出土遺物は少なく小片であることから、住居を破棄する際に、再利用可能な土器を持ち出したのであろうか。

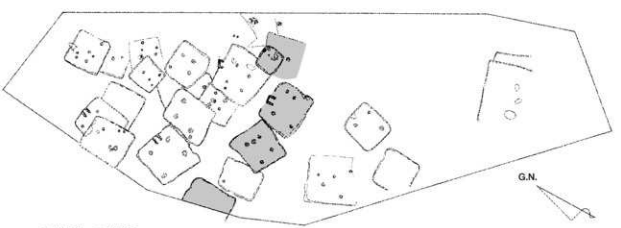
以上が本遺跡における集落の概観であるが、調査区東隣の民家畑地からも、同時期の遺物等が出土していることから、本遺跡一帯は大集落であった可能性も十分あると考えられる。



5 世紀後葉から 6 世紀前葉



6 世紀後葉から 7 世紀前葉



8 世紀～ 9 世紀

第79図　竹淵Ｃ遺跡時期別（古墳時代～古代）遺構配置図

(2) 竈

ＳＡ４・９・17・19で竈を４基検出した。ＳＡ２・５・16・26では、北壁中央部に竈粘土に似た粘質土を検出したが、竈本体は確認できなかった。本遺跡では、竪穴住居に竈を付設し始めるのは７世紀前葉からであり、８世紀になると普及率が高くなる。九州地方においては、造り付け竈の普及にかなり偏った傾向が見られ、福岡県域にかなりの普及が認められるが、５世紀代の造り付け竈が多数検出されている福岡県塚堂遺跡などからするとかなり時期的に下る。

本遺跡で検出された竈は、いずれも北壁中央部への造り付け竈で煙道をもたず、袖長は約60cm～80cmの規模でほとんど開かない。これらの特徴は、時期の隔たりに関わらず変化がない。長く延びた煙道をもたない造り付け竈は、宮崎市右葛ヶ迫遺跡や新富町上薗遺跡Ｆ地区などで検出されている。造り付け竈の出現の背景として、大陸から伝わったものであるとする視点とがからの発展形態として日本内に発生のメカニズムを求める視点に分かれるが、朝鮮半島で煙道が長く延びないタイプのものが検出されているのは興味深い。

また、ＳＡ17の竈では２本の支脚が立ったまま検出された。これは、当時の使用状況を検分する上において非常に重要な資料であるといえよう。つまり、ＳＡ17竈は二つ掛け横並びタイプで、一つ掛けが主流を占める西日本では非常に珍しい竈である。しかも、他の竈も規模・主軸等が似ていることから、同じタイプのものになる可能性を残す。二つ掛け横並び竈は東日本特有の特徴である。しかし、宮崎県ではこれまで、宮崎市の浦田遺跡や右葛ヶ迫遺跡（支脚は軽石）でも二つ掛けが検出されており、西日本の他地域とは異なる展開を見せている。この二つ掛け竈は一つ掛けに比べ規模が大きく重厚なつくりになるが、「甕を用いて食物を煮るという炊飯方式に、甕と甑を両者用いる炊飯方式が新たに加わったことが日常の火所として使用される竈を二つ掛けに発展させた」という杉井健氏（1993)の見解によれば、甑を乗せることによってより大きな重量がかかる方の甕が中心方向に偏在するとの推測が成り立つ。ＳＡ17竈内で出土した71は底部が失われていて断言できないが、甑である可能性も十分もつ。また、支脚位置は、焚き口の方からみて燃焼部の中央よりも右に偏っており、二つ掛け竈が検出された地域では左寄りが主流になっている中、特徴的であることも付け加えておく。

(3) 土器埋設炉

ＳＡ６・12・20・22・23・24で床面から土器埋設炉を６基検出した。また、住居跡は検出できなかったがＳＡ21の南壁近くに１基、ＳＡ24では２個体並んで出土したもののうち後世に埋設された１基の計８基を検出した。いずれも古墳時代から古代の特徴をもつ土師器甕である。本遺跡では竪穴住居に土器埋設炉を付設し始めるのは、竈を付設するよりもわずかに遡り６世紀後葉からである。住居に付設されたものは、床面に対してほぼ垂直に頸部付近まで設置されていた。その他の特徴は次のようになる。

検出場所	ＳＡ６	ＳＡ12	ＳＡ20	ＳＡ22	ＳＡ23	ＳＡ24	ＳＡ24上	ＳＡ21外
時　期	6世紀後葉	6世紀後葉	8世紀代	7世紀後葉 ~8世紀前葉	8世紀代	7世紀前葉	8世紀代	8世紀
設置場所	住居中央	住居中央	壁際	住居中央	壁際	住居中央	不明	不明
埋設土器底部	有	有	有	無	無	有	無	無

次に、住居における土器埋設炉の位置と埋設土器の底部の有無により分類すると次のようになる。

第Ⅰ類	ＳＡ6、ＳＡ12、ＳＡ24	住居中央部に設置してあり、底部がある。
第Ⅱ類	ＳＡ22	住居中央部に設置してあり、底部がない。
第Ⅲ類	ＳＡ20	住居の壁際に設置してあり、底部がある。
第Ⅳ類	ＳＡ23	住居の壁際に設置してあり、底部がない。

この分類に埋設時期を含めて分析すると、6世紀後葉から7世紀前葉は第Ⅰ類のみで、第Ⅱ類から第Ⅳ類は7世紀後葉以降の出現となる。すなわち、本遺跡では、6世紀後葉～7世紀前葉には住居中央部に底部をもったまま埋設され、8世紀からは住居壁にも付設され始め、底部が遺存するものとしないものが混在する。土器埋設炉には、「明」「食」「暖」という役割があると考えられるが、住居中央部のものは「明」「食」「暖」いずれも可能性があり、住居内で中心的な役割を果たすのに対し、壁際のものは「明」や「暖」の意味合いが薄れ「食」を中心とした役割を担う可能性が増すことになる。また、底部が出土しなかったものは7世紀後葉以降のものに限られたが、これらは埋土や掘込みの内部からも底部が出土しなかったことから、はじめから底部をもたずに埋設されている。これがどのような理由によるものかは計り知ることはできないが、土器の再利用や祭祀的な意味合いがあるのかもしれない。これからの類例を待ちたい。

土器埋設炉の埋土からは様々な生体痕跡（図版28）が出土した。この中で「小動物の骨、骨片」「二枚貝の殻頂」「脊髄」「網状構造をもつ石灰質物質」については、推測の域を超えないが、塩酸を加えることにより二酸化炭素の発生がみられたことから、骨や貝等の主成分である二酸化カルシウムの存在を確認した。また、ＳＡ20・24の土器埋設炉内からセンダンの種子が出土したことについても少し触れておきたい。センダンはヒマラヤを原産とする外来種であるが、万葉集にはセンダンについて詠んだ歌が収められており、おそらくこの時期には既に存在していたはずである。また、用途についてはこれも想像の域を超えないが、センダンの実は薬効をもつことや、時代は少し下るが、宮崎市の枯木ヶ迫遺跡の溝状遺構（10世紀前半構築）からセンダンを使った木製皿が2点出土していることから、この時期においてもセンダンを何らかの目的で利用していた可能性がある。

(4) 風字硯

一般に風字硯とは硯の前方に墨汁を貯える海をつくり、後方に磨墨の役をなす陸を設えたもので、平面の形が漢字の「風」に似ているものを指す。古代の陶硯としては円面硯と双肩の位置を占め、風字硯は全国で出土している。本遺跡の風字硯は樽崎彰一氏の分類(1982)によれば、第2種、第一類、第一型式Ｂとなる。つまり、硯の前頭部がわずかに外方に湾曲し、両側縁が硯尻（手前）に向かって八の字形に開く形態をとり、硯尻と左右両側にのみ立ち上がりの縁帯を有する。さらに、硯背後方部に二脚を設けて、硯面が前方に低く傾斜するようになっており、硯面に堤を設けず、海と陸を区画する境を有しないものに分類される。この形態は、全国的にみても一般的で、定型式風字硯は時代を追って両側縁の開きが少なくなり、終末期にはほぼ平行するようになる。また、最近の研究成果では、平城宮跡などから年号のある木簡と共に硯が検出され、円面硯から風字硯へと移りゆく姿が把握されつつあるが、石井則孝氏の編年（1985）によれば、本遺跡の風字硯は9世紀中葉から10世紀中葉のものによく似ている。

県内において、風字硯の出土例はわずか２例で一つは西都市寺崎遺跡内ですでに採取・保管されていた１点と、佐土原町下村窯跡で出土したミニチュア１点のみである。また、えびの市昌明寺遺跡で風字硯と思われる須恵器が出土したとの報告があるが、詳細は不明である。全国的にみると、風字硯の出土数は畿内が群を抜いて多いが、これは当時において硯が貴族、官人、僧侶など上層階級のみが使用し得た性格の遺物であり、律令体制下における政治の中枢箇所と一致していることが挙げられる。本遺跡も古代日向国の国府近くに位置していることは風字硯出土の背景を十分持ち得ていたことになる。

第３節　中世の遺構

(1) 掘立柱建物跡

本遺跡では掘立柱建物跡を11棟検出した。その内訳は側柱建物が10棟，総柱建物もしくは庇付建物が１棟である。いずれの柱穴内からも根石等は確認できなかった。主軸は南北軸と東西軸に二分され、しかも、それぞれの軸から２～３°の振れの中に収まることは極めて計画的な配置であり、特筆すべきことであろう。本遺跡の掘立柱建物跡は、規模や柱穴の埋土等が似ていることから、近接した時期の構築であると考えられる。また、若干位置をずらしているものがあり、特にＳＢ７とＳＢ８は位置を規制しての立て替えが推測される。調査区東端で検出したＳＢ６は、倉庫としての役割をもつと考えられる総柱建物跡か西面庇の大型建物跡と考えられる。その側柱側の柱間は比較的狭く、柱穴の深さは検出面から1.2ｍ下のＡＴ層下層まで掘り込まれているものがあり、かなりの重量を支えた建物跡であった可能性がある。また、ＳＢ６・９・10・11は調査区外に延びていることから、集落の範囲はさらに広がっていたと考えられ、その場合、本遺跡は集落の西端に位置していた区画だと考えられる。

(2) 石組遺構

本遺跡では石組遺構を２基検出した。第Ⅲ章第３節第13表で示したとおり、県内ではすでに本遺跡を含め21基の石組遺構が検出されている。未報告のものもあり詳細が定かなものばかりでないが、関連遺構等が検出されているものはほとんど無く、用途等が判明している例はない。また、県外においても、神奈川県杉浦平太夫邸跡や大分県利光遺跡で類似遺構が検出されている。特に利光遺跡では「水貯め遺構」の可能性を示唆している。県内外を問わず、石組遺構の構築時期は、中世であると考えられるものが多く、礫と掘込み間の粘質土の存在や火を用いた痕跡が残ることが多い。

一方、平面プランが正方形もしくは長方形の形態をもち、石積を側壁の四面全面に施している石積遺構は多く検出されている。これらが本遺跡の石組遺構と根本的に異なる点は、床面に礫が敷かれないことである。例えば、福井県一乗谷朝倉氏遺跡で多数検出されたものは便槽の可能性が指摘されている。また、滋賀県妙楽寺遺跡では、便槽の他に地下式貯蔵庫・水溜・沈殿槽と考えられているものも検出されている。しかし、いずれにせよ、埋土に焼土を含んだり規模が似ている点はあるものの、構造上の相違点があることを指摘しておきたい。

本遺跡では、石組遺構の関連遺構は検出せず、風呂（サウナ）・溜枡・地下式貯蔵庫・火葬墓・水溜・便所など当初予想した使用目的について解明するには至らなかった。しかし、前述の一乗谷朝倉氏遺跡では、後に石積遺構内から『金隠し』が出土し、便所説への急展開を見せたように、これから検出される類例の中で、新展開を迎えることを期待したい。

第４節　近世の遺構・遺物

中世まで続いてきた住居等の居住空間は近世を迎えるにあたって姿を消し、遺構は調査区の北端や東端にのみ確認できる。これは、当遺跡がこの時期から畑地等の役割を担い始めた可能性を示している。悠々と流れる一ツ瀬川を眼下に見下ろす微高地に顕在していた石積遺構は、調査区より東へ移動した生活空間との境界を示していたのかもしれない。

遺物では、古代から中世にかけて越州窯系青磁や緑釉陶器、灰釉陶器、龍泉窯系青磁などの貿易陶磁器が出土したが、近世では肥前系を中心とした国産陶磁器がほとんどを占める。これは、鎖国及び幕府による長崎貿易制限令が布かれたことに加え、国内の大量生産技術が高まったことを示している。また、ＳＣ１で出土した403は、鉄製馬鍬歯の可能性がある。青森県浪岡城跡や大阪府池島・福万寺遺跡などで、頭部が基部より広がった造りが酷似する鉄製品が出土している。馬鍬は古墳時代の前半期から遺物として出土する例があるが、鉄製馬鍬は中世以降に出現する。

このように本遺跡では、弥生時代を除き縄文時代早期前葉から中・近世へ連綿と受け継がれる生活の痕跡が確認された。大量に出土した遺物のことを考えながら17号竪穴住居跡の竈の傍らに立つと、万葉集の貧窮問答歌「竈には火気ふき立てず甑には　蜘蛛の巣かきて　飯炊くことも忘れて　鵺鳥の・・・（山上憶良）」の歌が聞こえてきた。毎日の生活の苦しさに追われながらも逞しく生きる庶民の生きる力を垣間見たような気がした。

【参考文献】

椚崎彰一	1981	「日本古代の陶硯－とくに分類について－」考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集　平凡社
宮崎県教育委員会	1984	「山内石塔群」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第１集
清武町教育委員会	1989	「田代堀第１遺跡」清武町埋蔵文化財調査報告書第３集
石井則孝	1985	「陶硯」考古学ライブラリー　42　ニュー・サイエンス社
高鍋町教育委員会	1991	「大ノ口第２遺跡」高鍋町文化財調査報告書　第５集
宮崎県教育委員会	1991	「大神河内第１遺跡」大淀川右岸農業水利事業国営大神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
豊田裕章	1991	「関西における石積み土壇の諸問題」関西近世考古学研究Ⅱ
杉井　健	1993	「竈の地域性とその背景」考古学研究　第40巻　第１号
福井県教育委員会	1993	「特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ」第15・25次、第24次調査
八木澤一郎	1994	「南九州の集石遺構」　南九州縄文通信　No.8　21-41
宮崎考古学会	1994	「宮崎県南部における中世城郭の一例」宮崎考古　第13号
吉本正典	1995	「集石遺構（宮崎県）旧石器から縄文へ」平成７年度鹿児島県考古学会秋季大会資料
新富町教育委員会	1995	「上畑遺跡Ｆ地区」新富町文化財調査報告書　第18集
佐土原町教育委員会	1996	「下村窯跡群報告書」佐土原町文化財調査報告書　第10集
えびの市教育委員会	1996	「蔵元遺跡」えびの市文化財調査報告書　第16集
中世土器研究会	1997	「概説　中世の土器・陶磁器」
日本貿易陶磁研究会	1998	「貿易陶磁研究」No.1～No.5
坂本嘉弘	1998	「東九州の押型文土器研究の現状と課題」「九州の押型文土器～論攷編～」縄文集成シリーズ３
宮崎県教育委員会	1999	「西下本庄遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第15集
宮崎県教育委員会	2000	「石葛ヶ迫遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第21集
宮崎県教育委員会	2000	「上の原第２遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第25集
乗岡実	2000	「備前焼擂鉢の編年について」第３回中近世備前焼研究会資料
宮崎県教育委員会	2001	「寺崎遺跡」国衙跡保存整備基礎調査報告書
宮崎県教育委員会	2001	「算原遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第42集
小林市教育委員会	2001	「年神遺跡」小林市文化財調査報告書　第13集
えびの市教育委員会	2001	「昌明寺遺跡」えびの市埋蔵文化財調査報告書　第30集
宮崎県教育委員会	2002	「白ヶ野第２・３遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第52集
鹿児島県教育委員会	2002	「上野原遺跡　第３分冊」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(41)
宮崎県教育委員会	2002	「枯木ヶ迫遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第55集
かながわ考古学財団	2002	「杉浦平太夫郎跡」かながわ考古学財団調査報告141
大分県教育委員会	2002	「利光遺跡」大分県文化財調査報告書　第132集
福岡県教育委員会	2003	「西新町遺跡Ⅴ」福岡県文化財調査報告書　第178集
松井和幸	2004	「馬鍬の起源と変遷」考古学研究　第51巻第１号

調査第１面調査グリッド

調査第１面散礫

ＳＩ１（東から）

ＳＩ２（東から）

ＳＩ３（西から）

ＳＩ４（東から）

図版 2

調査区北部の竪穴住居跡群

調査区中央部の竪穴住居跡群

竪穴住居跡検出状況

ＳＡ４竈

ＳＡ６土器埋設炉

ＳＡ７（南から）

ＳＡ９（南から）

ＳＡ９竈

図版4

ＳＡ10（南から）

ＳＡ12土器埋設炉

ＳＡ13

ＳＡ16

ＳＡ17（竈）・ＳＡ18

ＳＡ19（竈）・ＳＡ20

ＳＡ17竈及び支脚

ＳＡ24土器埋設炉（左）及び後世埋設の土器埋設炉（右）

図版6

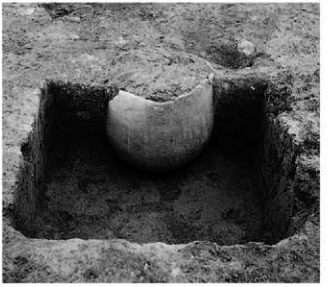
ＳＡ19竈

ＳＡ20土器埋設炉

ＳＡ23土器埋設炉

ＳＡ25遺物出土状況

ＳＡ25遺物出土状況（102）

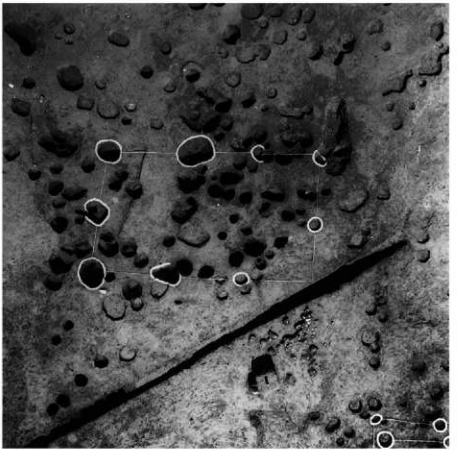


住居外検出の土器埋設炉

ＳＢ１と１号石組遺構

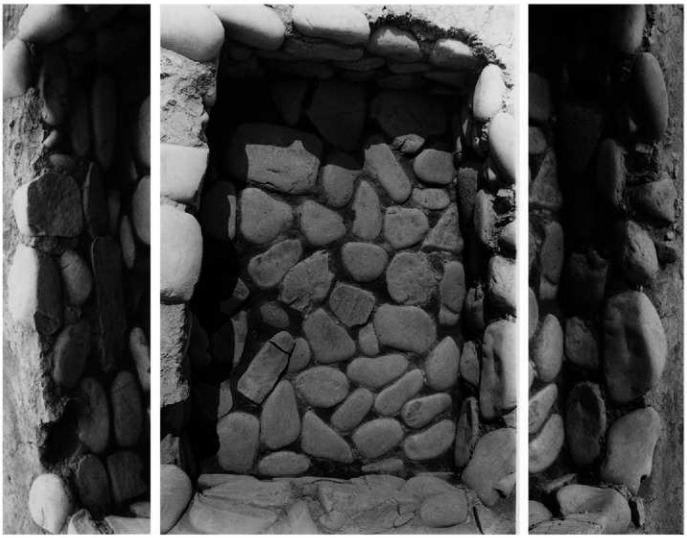
ＳＢ２・３・４

図版 8



SB 5

SB 7・8・9・10・11



1 号石組遺構分解写真

図版10

1号石組遺構検出状況

1号石組遺構埋土除去後

1号石組遺構礫除去後

1号石組遺構完掘状況

2号石組遺構埋土除去後

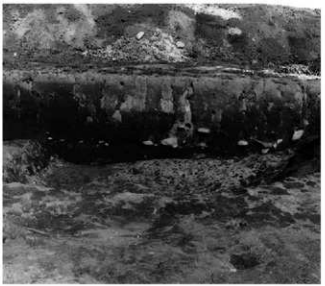
2号石組遺構完掘状況

ＳＥ１（東から）

ＳＥ１（南から）

ＳＥ１埋土堆積状況

ＳＣ１礫出土状況



ＳＣ１埋土堆積状況（西から）

ＳＣ１埋土堆積状況（南から）

図版12

石積遺構調査前（石塔移動後）

石積遺構浮石等除去後

石積遺構精査後出現した水輪（425）と地輪（432）

地輪下の半截状況

礫の並び下の半截状況

石積遺構調査前（石塔移動前）

復元した石塔

1号竪穴状遺構

図版14

現地説明会（遺物）

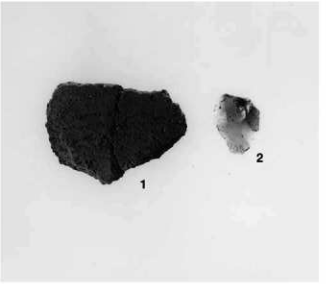
現地説明会（竪穴住居）

職場体験学習①

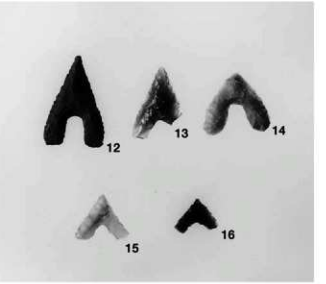
職場体験学習②

作業風景（ピット群）

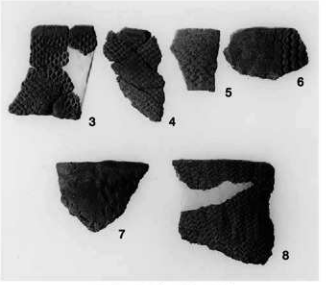
作業風景（ＳＣ１）



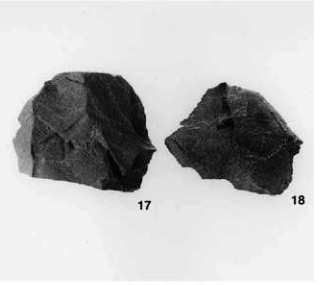
ＳＩ１出土遺物



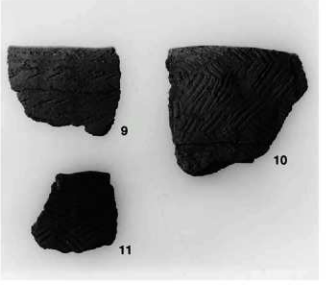
縄文石器（石鏃）



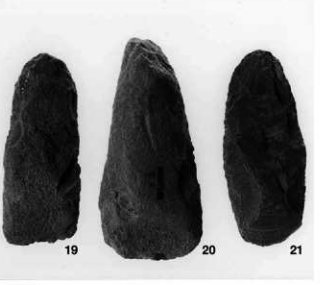
縄文土器（押型文土器）



縄文石器（剥片）

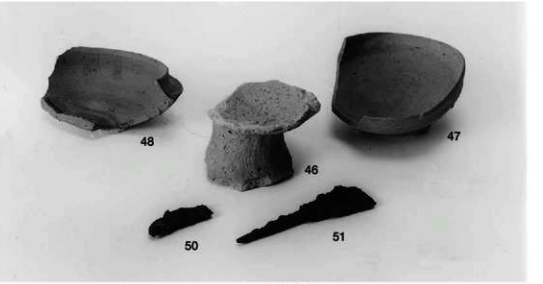


縄文土器（貝殻条痕文土器）

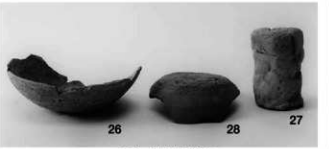


縄文石器（打製石斧）

図版16



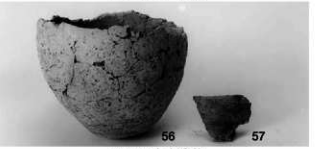
ＳＡ９出土遺物



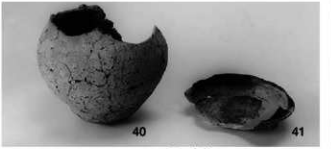
ＳＡ２出土遺物

ＳＡ10出土遺物

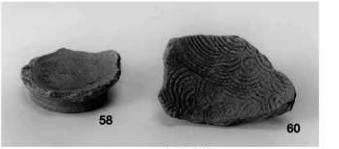
ＳＡ４・５出土遺物



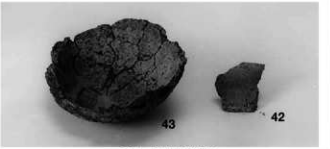
ＳＡ12出土遺物



ＳＡ６出土遺物

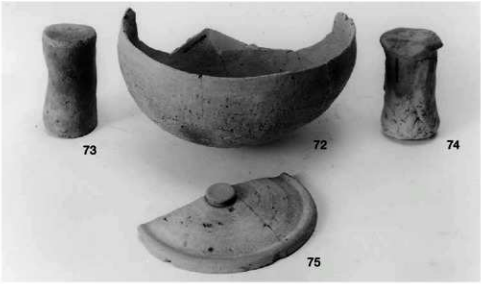


ＳＡ14出土遺物

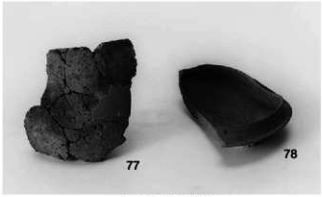


ＳＡ７出土遺物

ＳＡ16出土遺物



ＳＡ17出土遺物



ＳＡ18出土遺物

ＳＡ22出土遺物

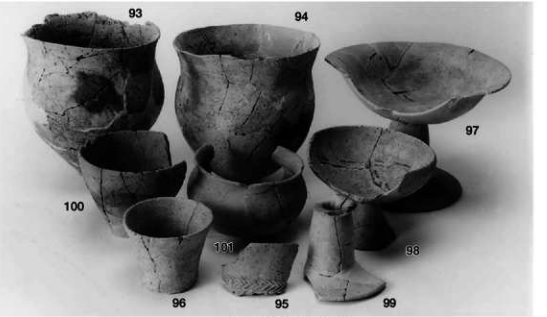
ＳＡ20出土遺物

ＳＡ23出土遺物

ＳＡ21出土遺物

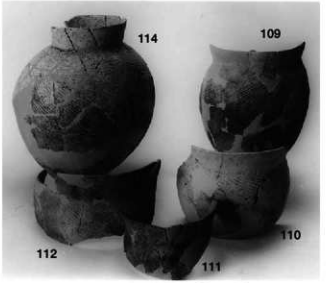
ＳＡ24出土遺物

図版18

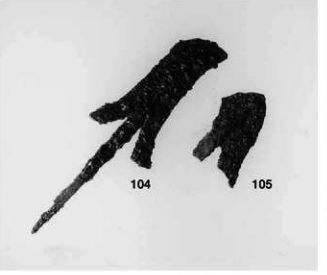


ＳＡ25出土遺物①（土師器）

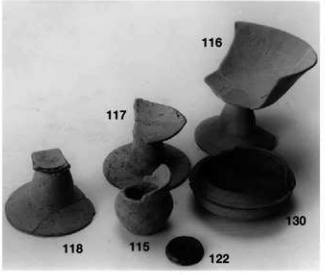
ＳＡ25出土遺物②（須恵器）



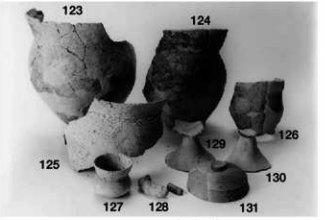
ＳＡ27出土遺物①（甕・壺）



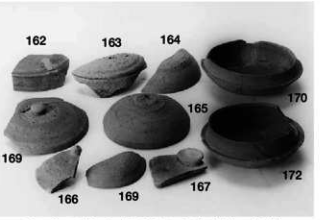
ＳＡ25出土遺物③（鉄鏃）



ＳＡ27出土遺物②（その他）

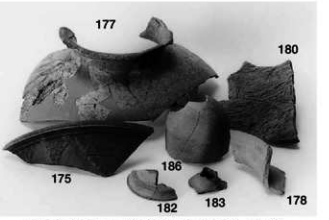


ＳＡ28・29出土遺物

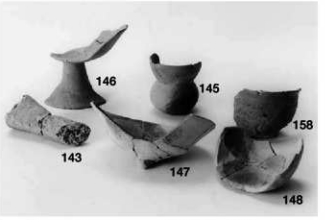


その他の遺物④（須恵器：古墳時代～古代）

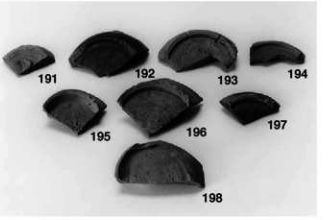
その他の遺物①（土師器：古墳時代～古代）



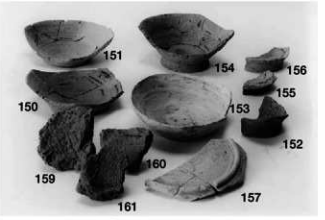
その他の遺物⑤（須恵器：古墳時代～古代）



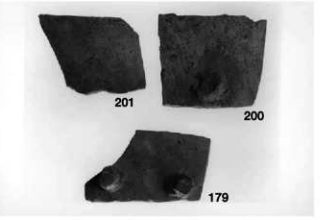
その他の遺物②（土師器：古墳時代～古代）



その他の遺物⑥（須恵器：古墳時代～古代）

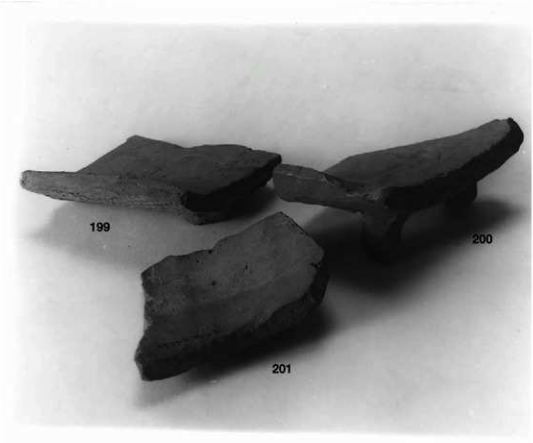


その他の遺物③（土師器：古墳時代～古代）

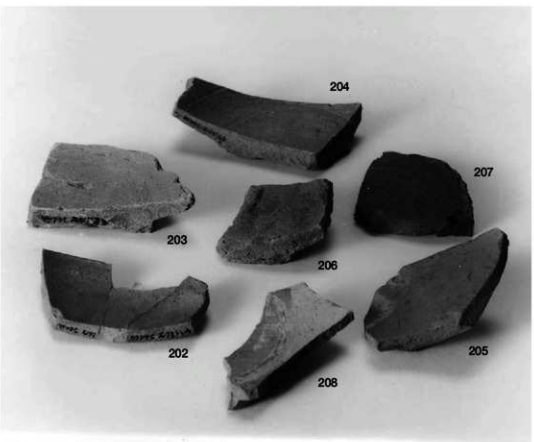


風字硯（硯背）

図版20



風字硯（硯面）

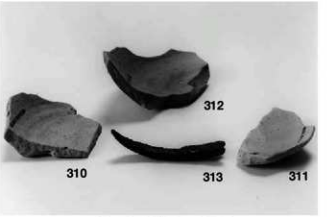


越州窯系青磁・緑釉陶器・灰釉陶器

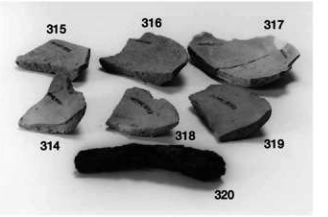
土錘①（報告書掲載分）

土錘②（全出土土錘）

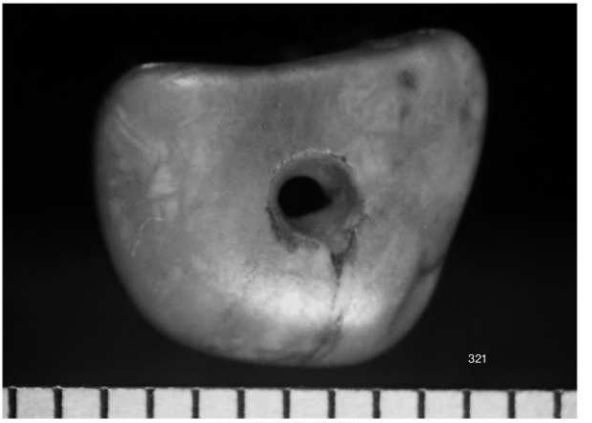
図版22



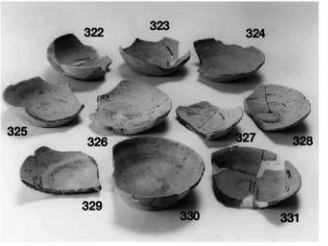
1号石組遺構出土遺物①



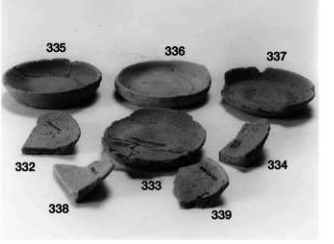
2号石組遺構出土遺物



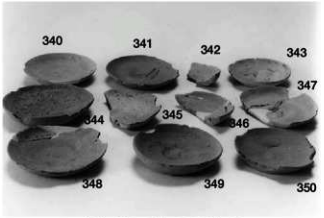
1号石組遺構出土遺物②



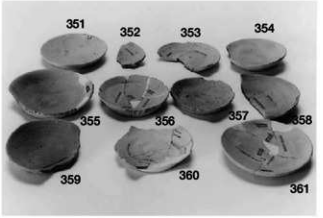
中世土師坏



中世土師皿（糸切り）

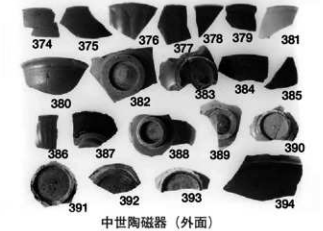


中世土師皿（ヘラ切り）①



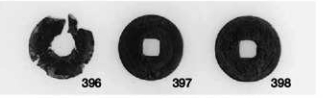
中世土師皿（ヘラ切り）②

中世土師皿（ヘラ切り）③



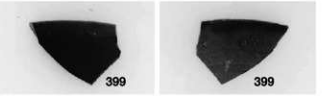
中世陶磁器（外面）

皇宋通寶・紹聖元寶・無文銭（表）

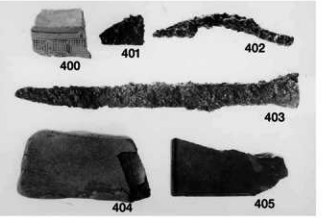


皇宋通寶・紹聖元寶・無文銭（裏）

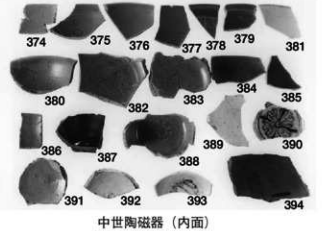
銅製の蓋



ＳＥ１出土　内野山窯系皿



ＳＥ１出土遺物



中世陶磁器（内面）

図版24

406

411

416

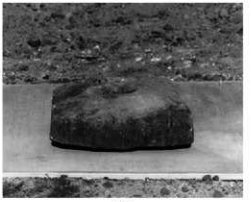
407

412

417

408

413


418

409

414

419

410

415

五輪搭（空風輪・火輪）

420

424

421

425

422

426

423

427

五輪搭（水輪）

図版26

428

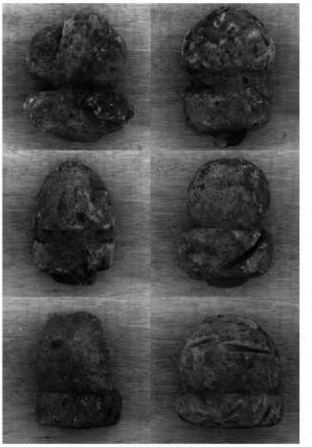
429

430

431

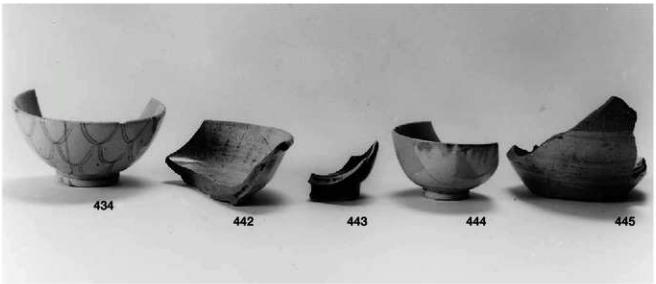
432

433

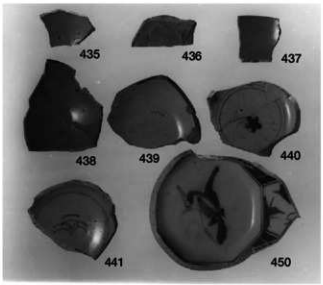


その他の空風輪

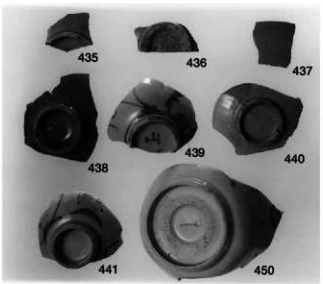
五輪搭（地輪・その他の空風輪）・板碑



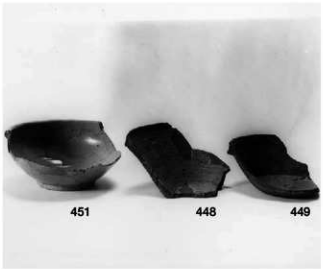
近世陶磁器①



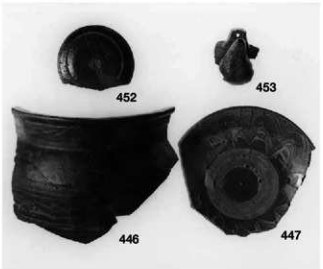
近世陶磁器②（内面）



近世陶磁器③（外面）



近世陶磁器④（鉢・擂鉢）

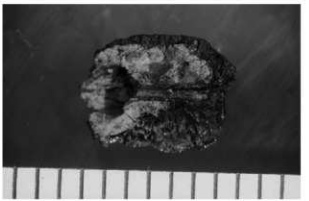


近世陶磁器⑤（皿・甕・土瓶）

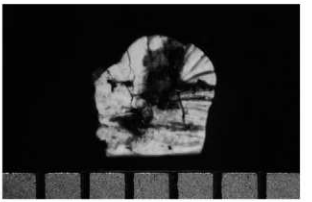
図版28

S A 6

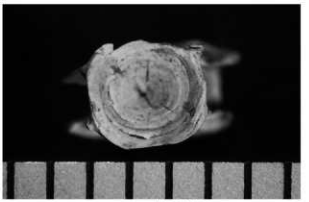
S A12



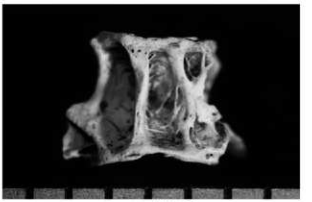
S A20



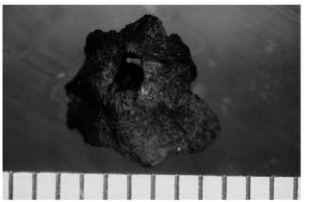
S A22



S A23（上から）



S A23（横から）



S A24

S A24

埋設土器内から出土した遺物の顕微鏡写真（１目盛りは１mm）

報告書抄録

ふりがな	たけぶちCいせき
書名	竹潤C遺跡
副書名	一ツ瀬川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第96集
執筆・編集担当者名	杉田康之
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
発行年月日	2005年1月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たけぶちCいせき 竹潤C遺跡	みやざきけんこゆぐん 宮崎県児湯郡 しんとみちょうおおあざ 新富町大字 にゅうたあざたけぶち 新田字竹潤 12672-1	45402	2007	30°04′35″	131°25′23″	2002. 05.21 ～ 2002. 10.18	1,280㎡	一ツ瀬川河川改良工事に伴う発掘調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡 散布地	縄文時代	集石遺構　4基	縄文土器・石鏃・剥片・石斧	・住居群の中に竈や土器埋設炉を付設した住居を検出し、そのうち竈支脚が立ったまま遺存するものあり。 ・風字硯が出土 ・中世の掘立柱建物跡群と大量の土師器
	古墳時代～古代	竪穴住居跡　29軒	土師器・須恵器・鉄器・石器 越州窯系青磁・緑釉陶器 灰釉陶器	
	中世	掘立柱建物跡　11棟 石組遺構　2基	土師器・須恵器・鉄器 銅製品・銭貨	
	近世	土坑　1基 溝状遺構　1条 石積遺構　1基	土師器・陶磁器・鉄器・砥石 石硯・五輪塔	
	その他	竪穴状遺構　1基		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第96集

竹 澗 C 遺 跡

一ツ瀬川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５年１月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171　　FAX 0985(72)0660

印　刷　有限会社 富士写真印刷
〒880-0212　宮崎郡佐土原町大字下那珂字浮橋7418-2
TEL 0985(74)2179　　FAX 0985(74)3066